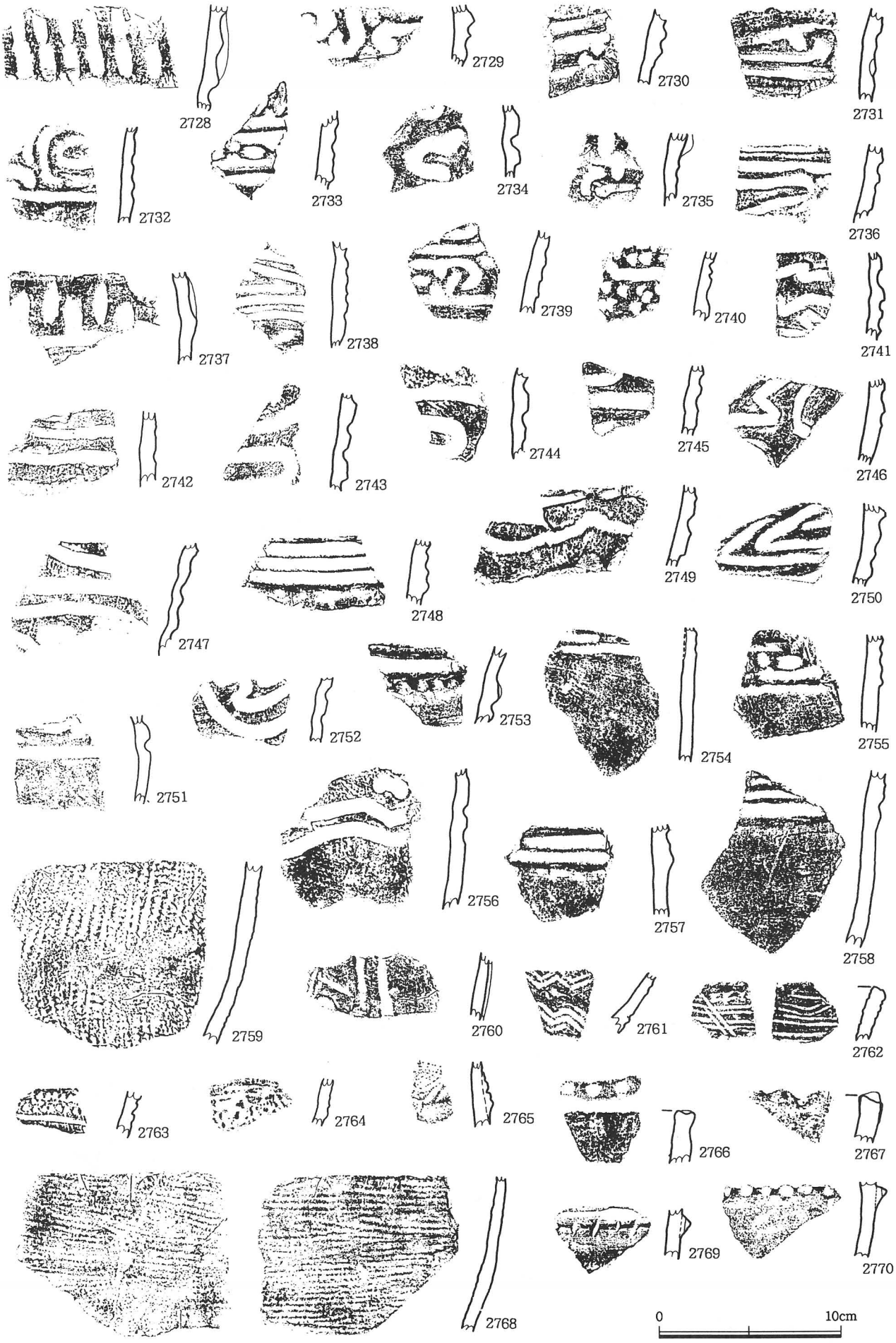
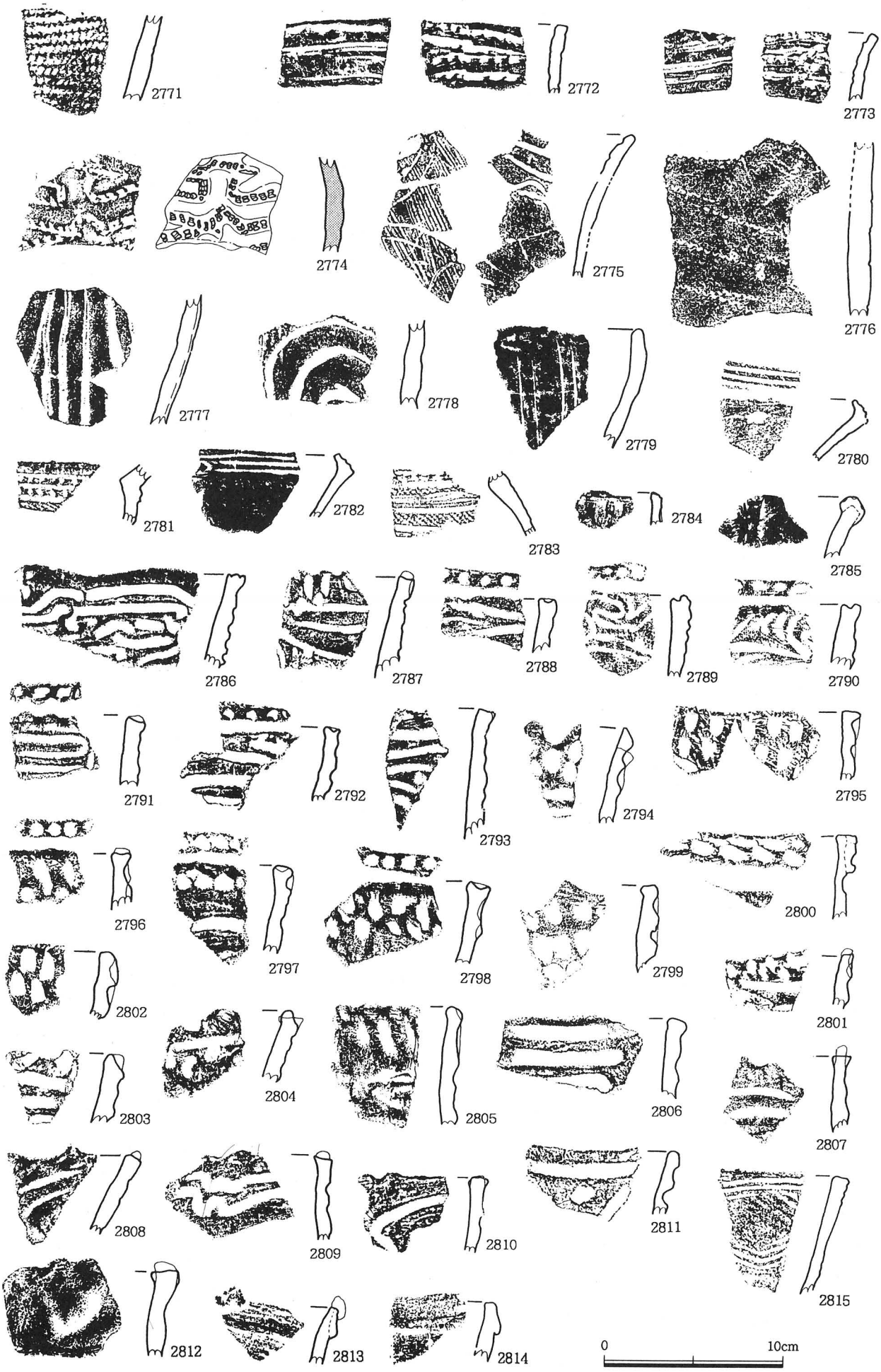


第136図　XV～XVIII区周辺　IV層出土縄文土器実測図（2）



第137図　Ⅰ・Ⅱ・XVII・XIX・XXVII・XXVIII区出土縄文土器実測図

打製石鏃（第138図、図版83）

黒曜石とチャート製が主で、若干の安山岩・頁岩系・玉髄がある。

石匙（第138図、図版83）

チャートと安山岩製で、縦長と横長タイプがある。

石錘（第139図、図版83）

黒曜石とチャート・玉髄製で、刃部は短い。

石斧（第140・141図、図版83・84）

ほとんどが磨製で、中型～小型であり、様々なタイプがある。蛇紋岩製は17点出土し、約４割を占める。破損後、敲き石に転用するものも多い。

石錘（第141・142図、図版89）

打欠石錘５点と切り目石錘52点が出土している。円盤状緑色片岩を素材とし、短軸に切り目を入れるタイプが多い。

スクレイパー（第142・143・144図、図版85）

不定形であるが、二次加工を施した直刃を持つ。中には、円形も含まれる。

刃器（第144・145図、図版85）

不定形の横長剥片を素材とし、鋭いエッジに若干の二次加工を施す。

使用痕・二次加工のある剥片（第146・147図、図版86）

不定形の横長剥片を素材とし、鋭いエッジを利用している。

礫器（第148・149図、図版86）

石核石器もしくは大型剥片に鋭い刃を付すもの。

石核（図版86）

礫以外には、黒曜石とチャートがある。

すり石（第150～154図、図版89・90）

大小98個出土し、断面が楕円形から家型、扁平楕円形へと磨滅していく過程が読みとれる。

石皿（第156・157図、図版91）

19点出土し、接合した１例以外は全て破片である。

台石（第158図、図版91）

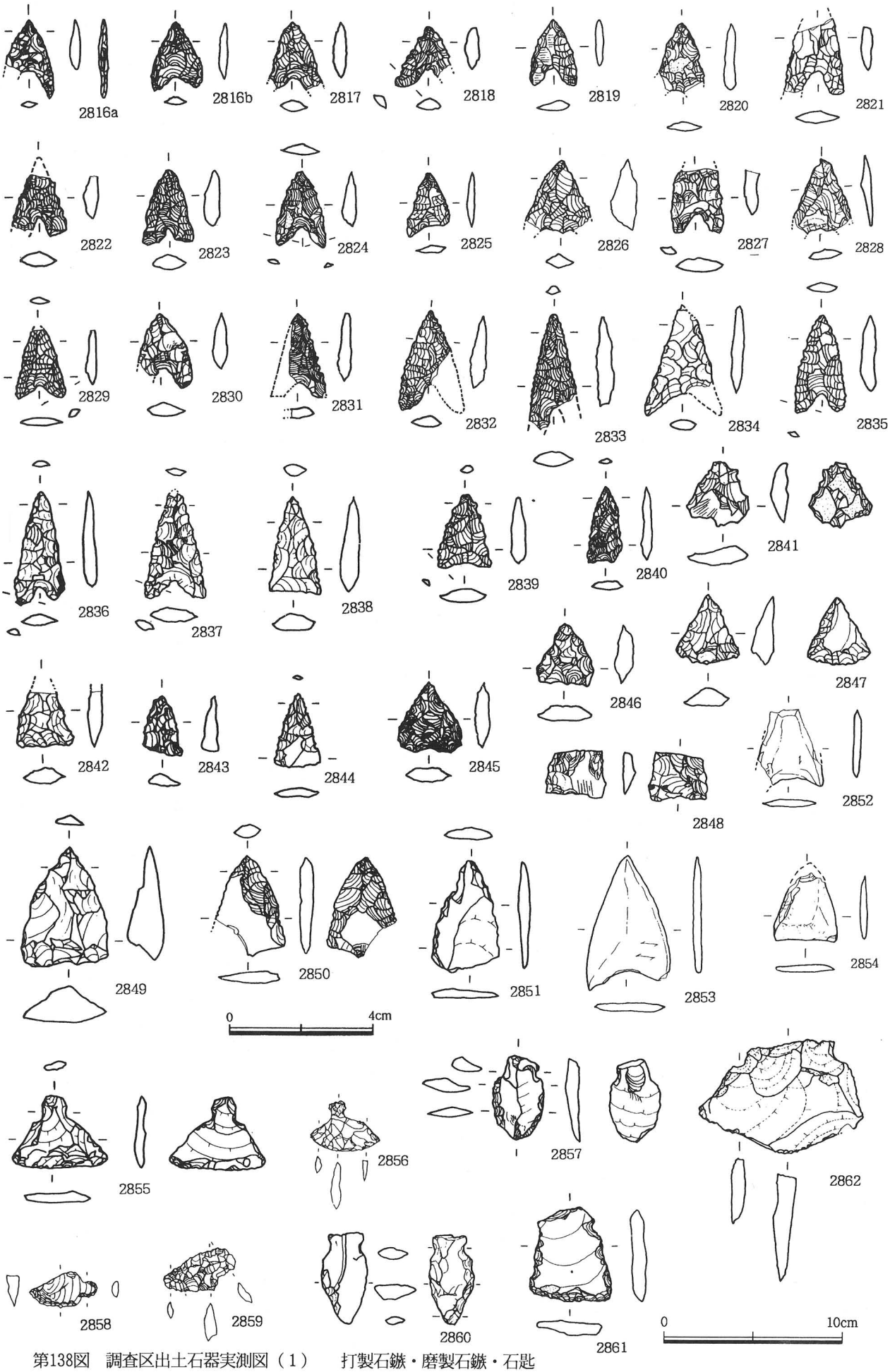
加久藤溶結凝灰岩が主で、平らな自然面を作業面として使用している。６点出土。

砥石（第158図-**3193**、図版92）

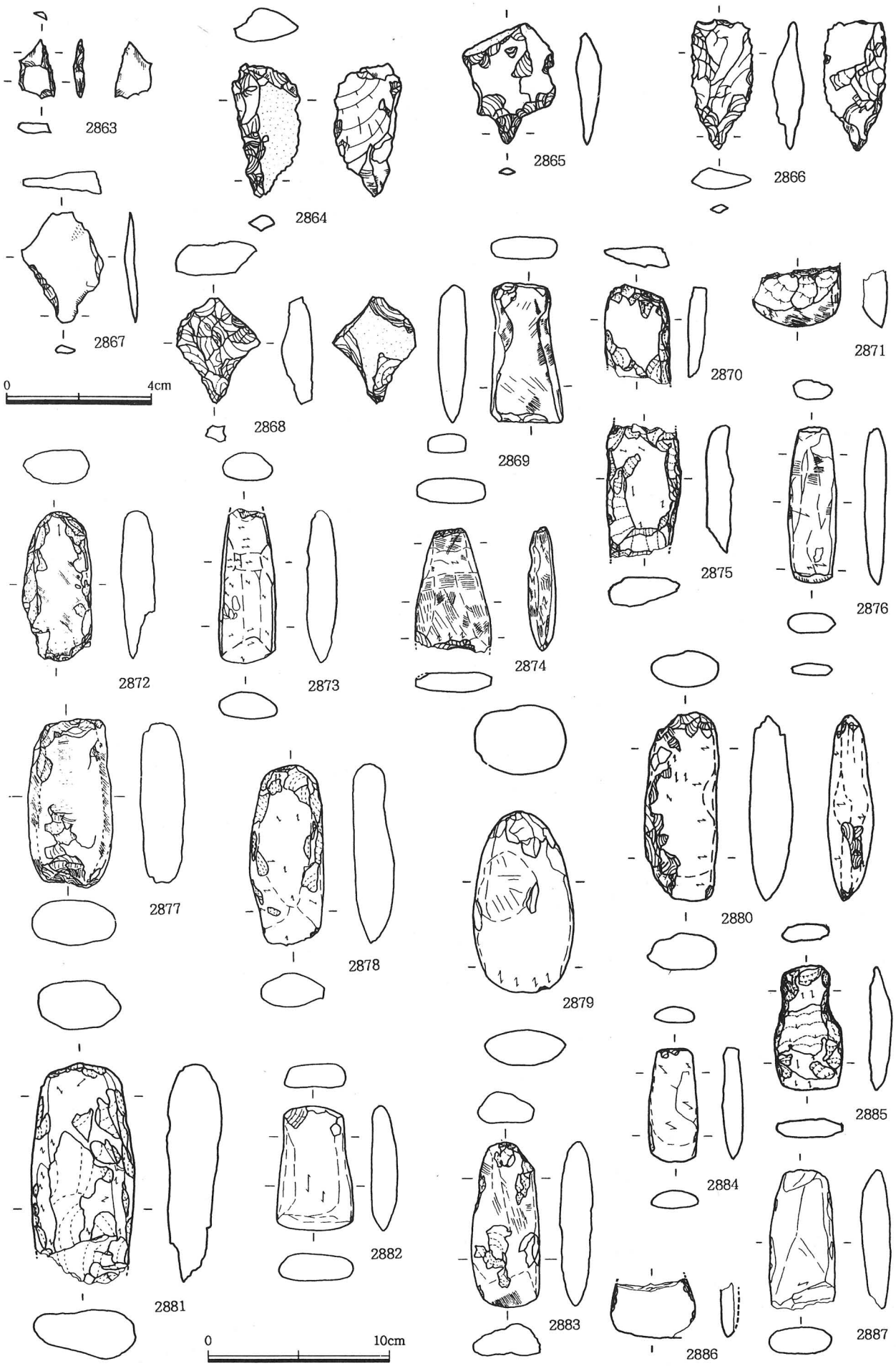
11.3×10.4cmの台形を呈し、厚さは６㎜である。表面は光沢をもつほど滑らかで若干凹んでいる。

敲き石（第149・150図、図版92）

石英塊のほか、すり石転用材などがある。すり石の側面にも、敲き痕を有するものが多い。

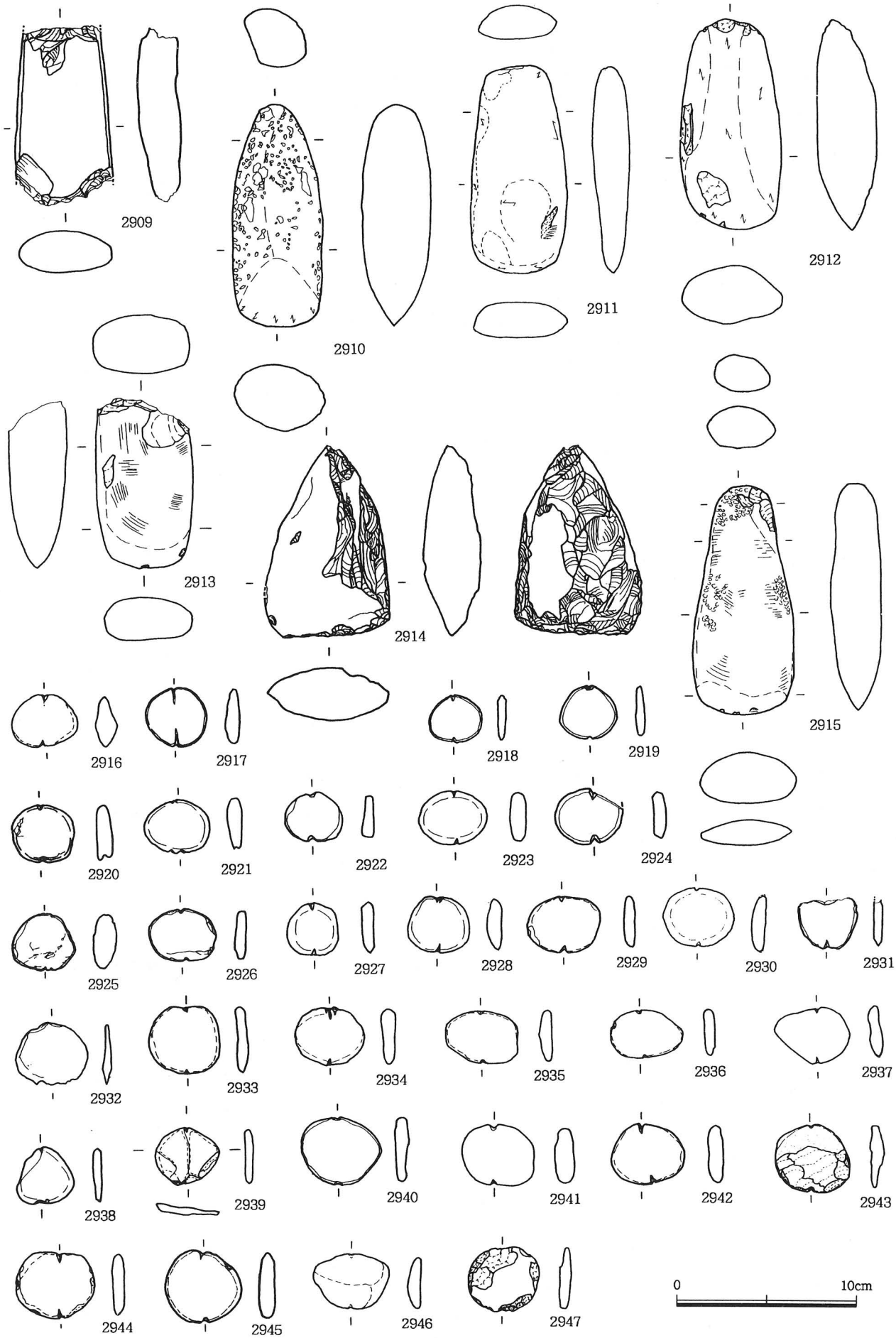


第138図　調査区出土石器実測図（1）　打製石鏃・磨製石鏃・石匙

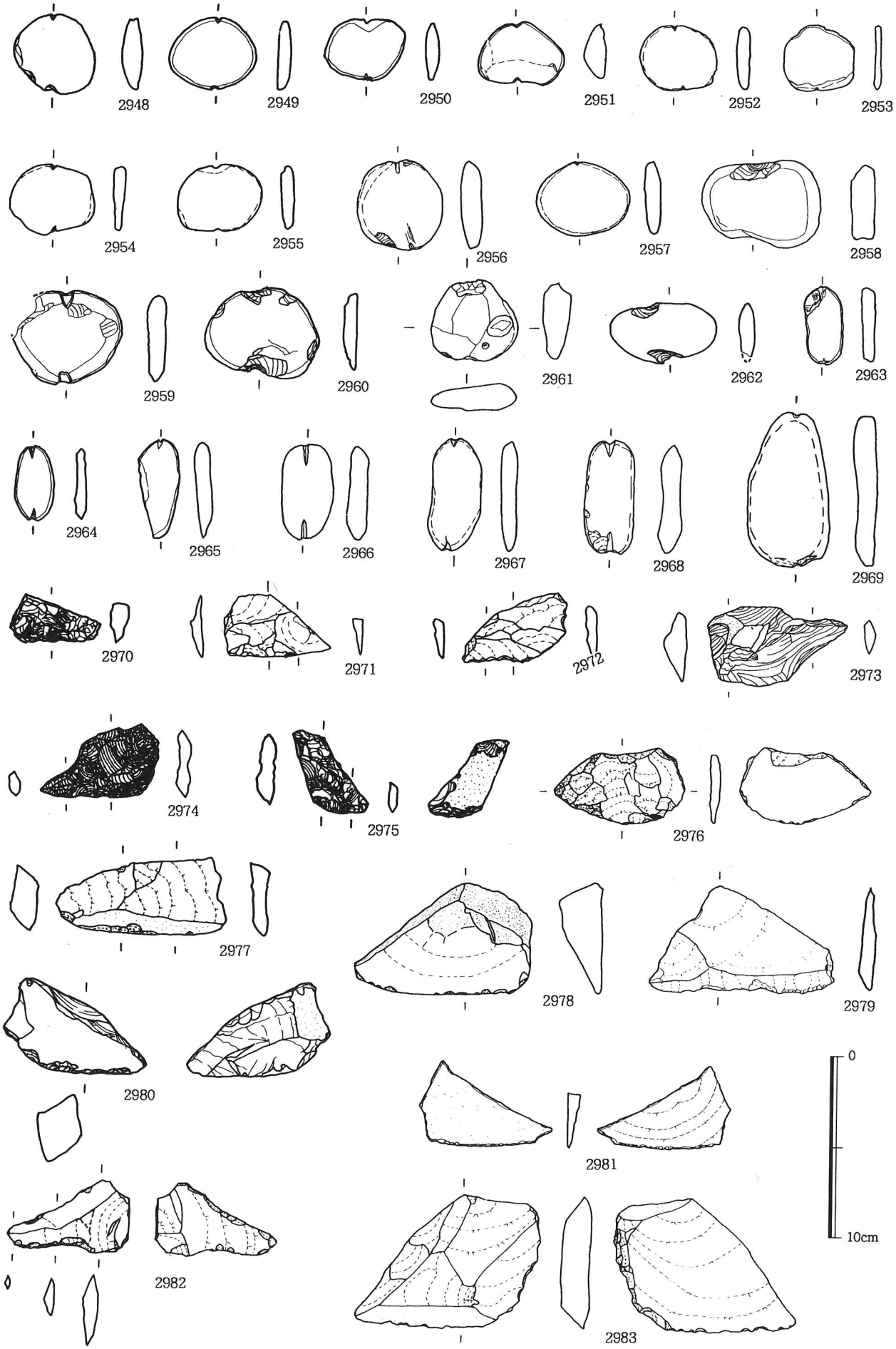


第139図　調査区出土石器実測図（2）　石錘・蛇紋岩製石斧

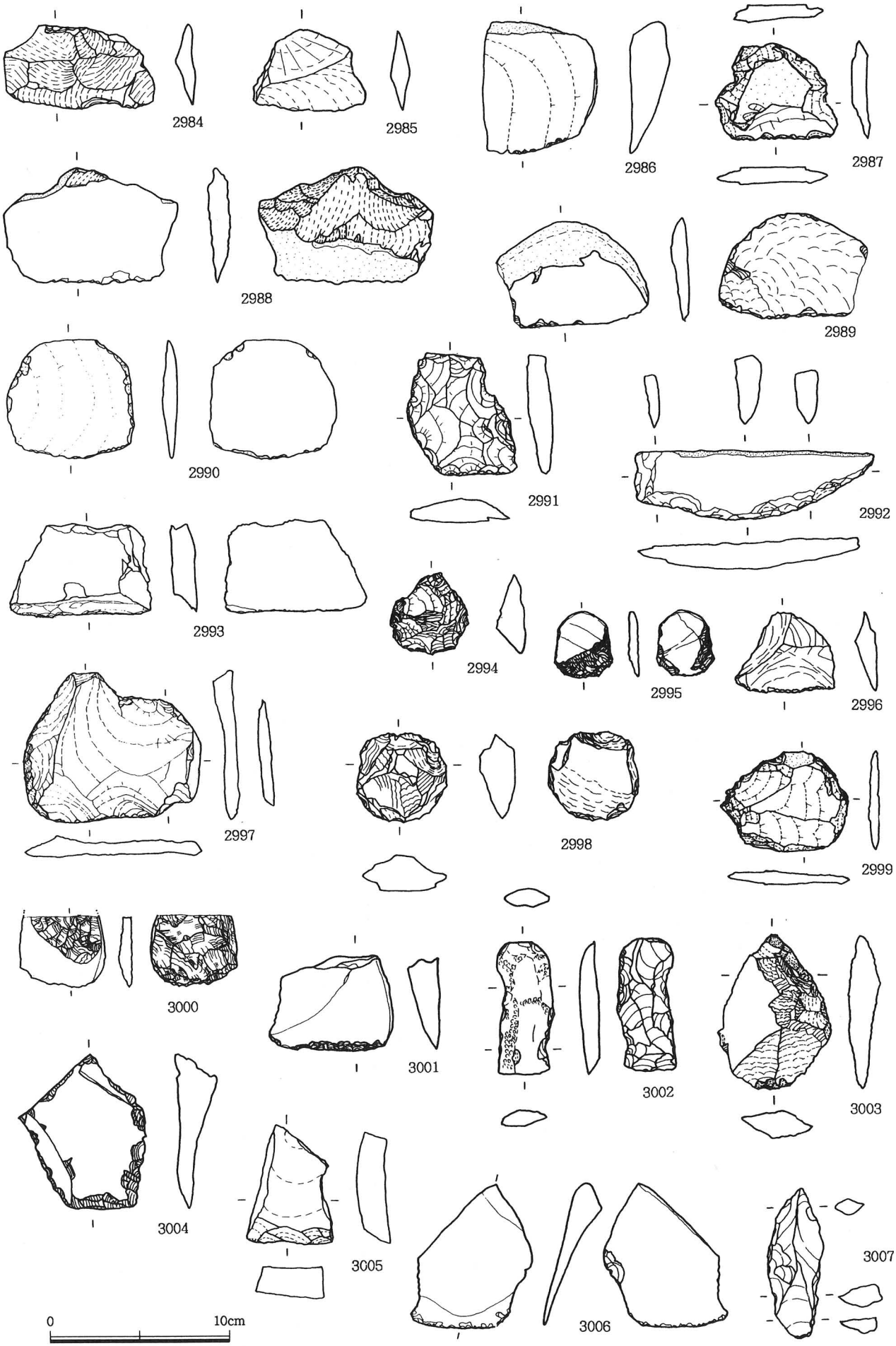
第140図　調査区出土石器実測図（3）　石斧（その1）



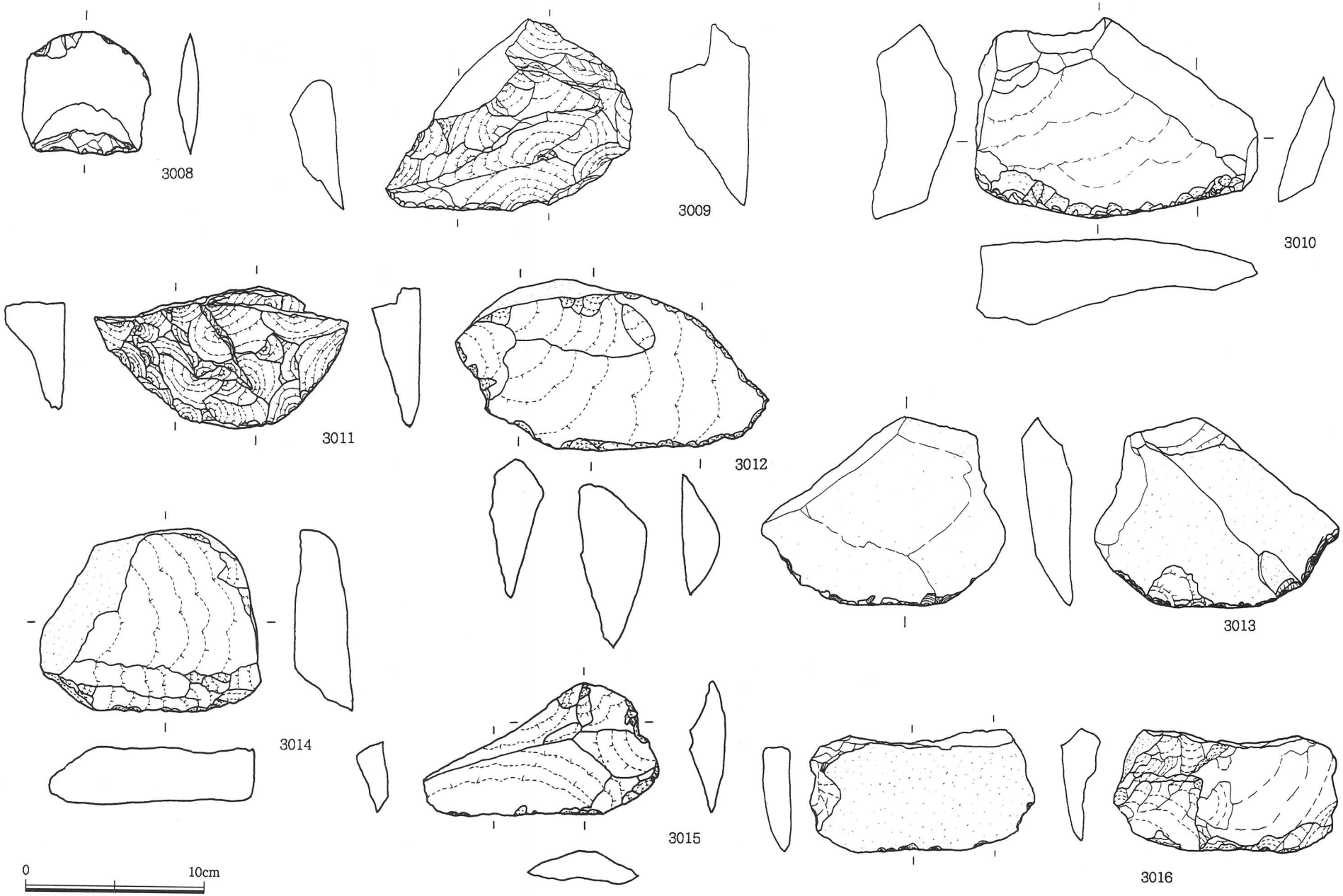
第141図　調査区出土石器実測図（4）　石斧（その2）・石錘（その1）



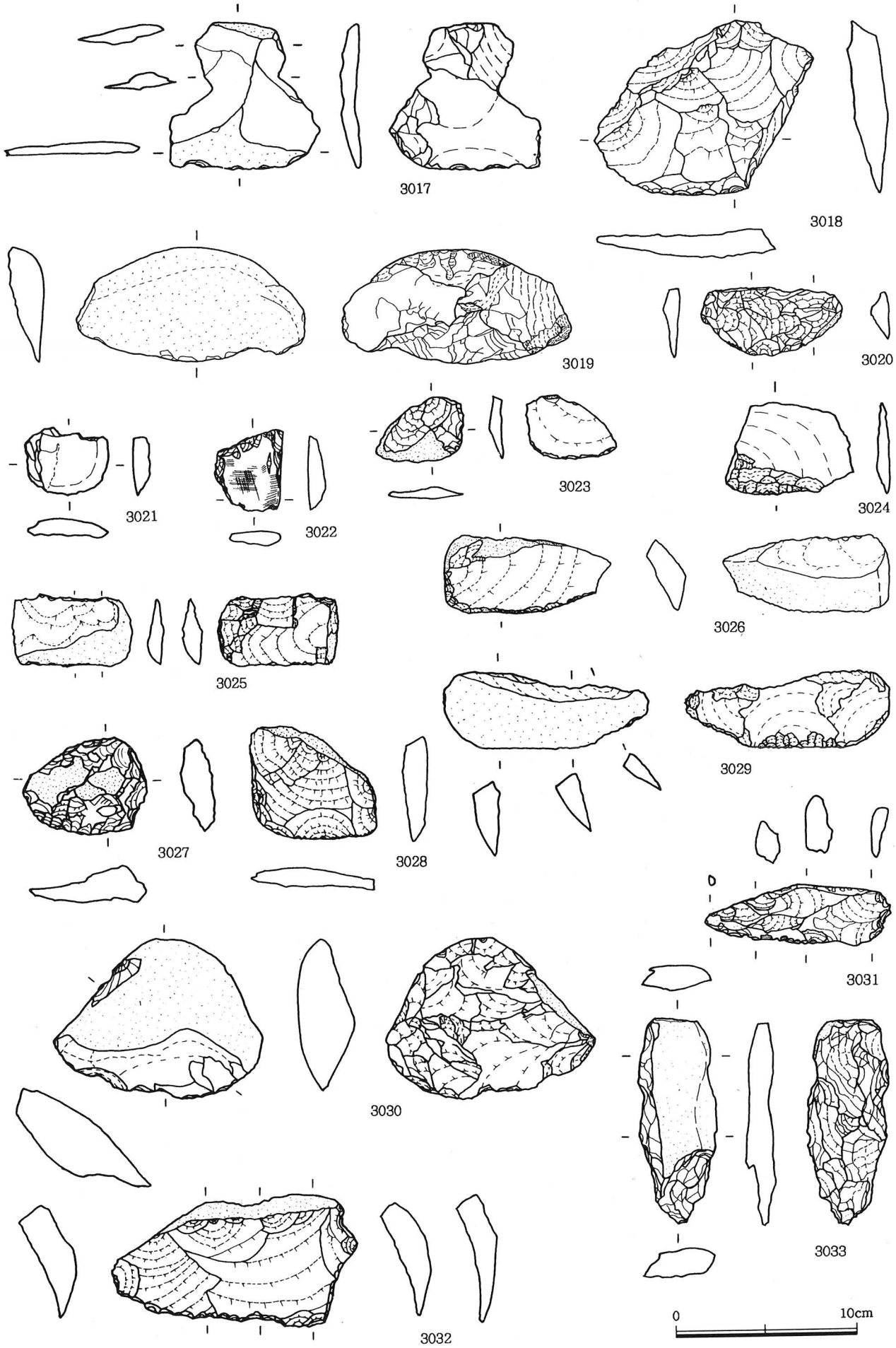
第142図　調査区出土石器実測図（５）　石錘（その２）・スクレイパー（その１）



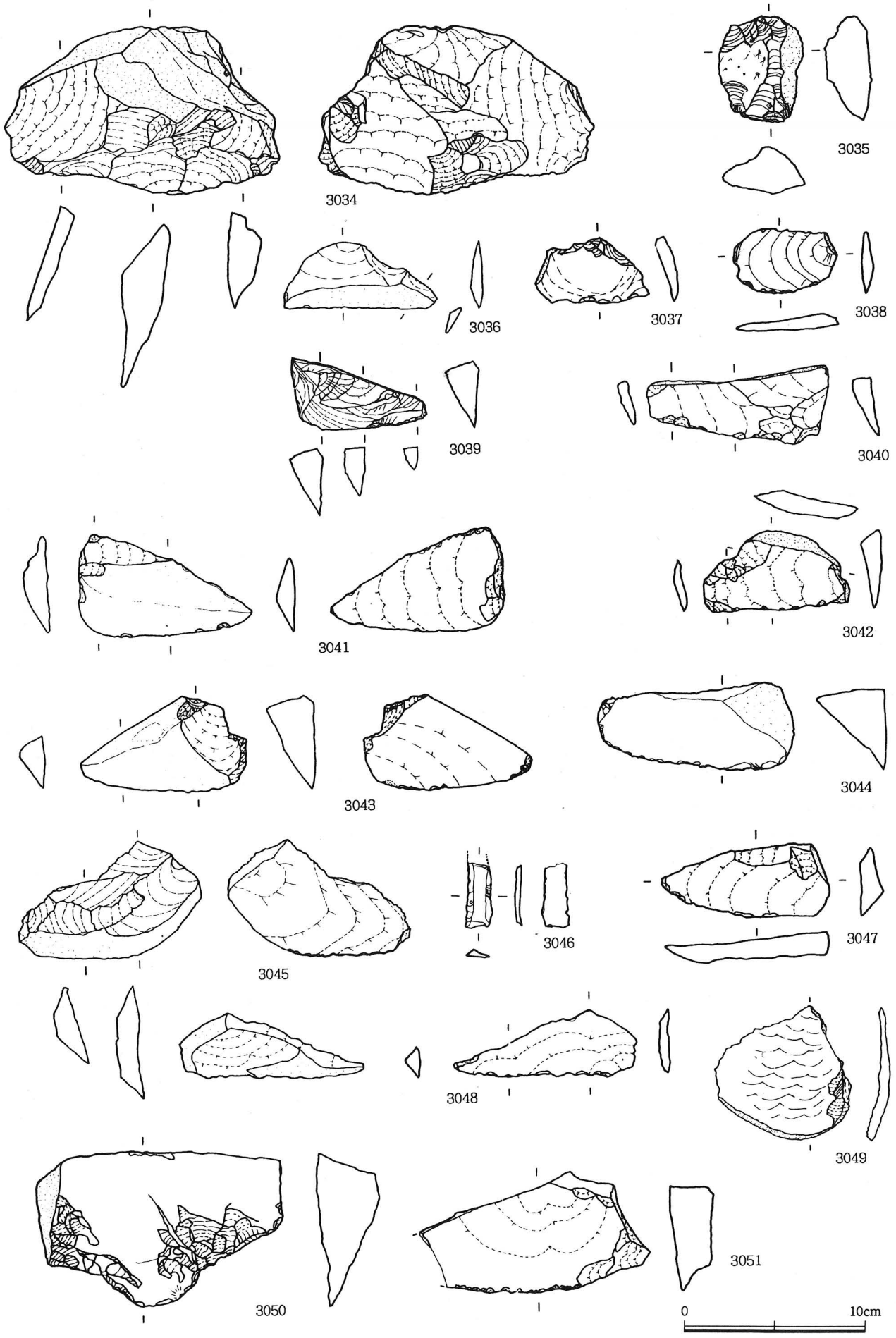
第143図　調査区出土石器実測図（6）　スクレイパー（その2）



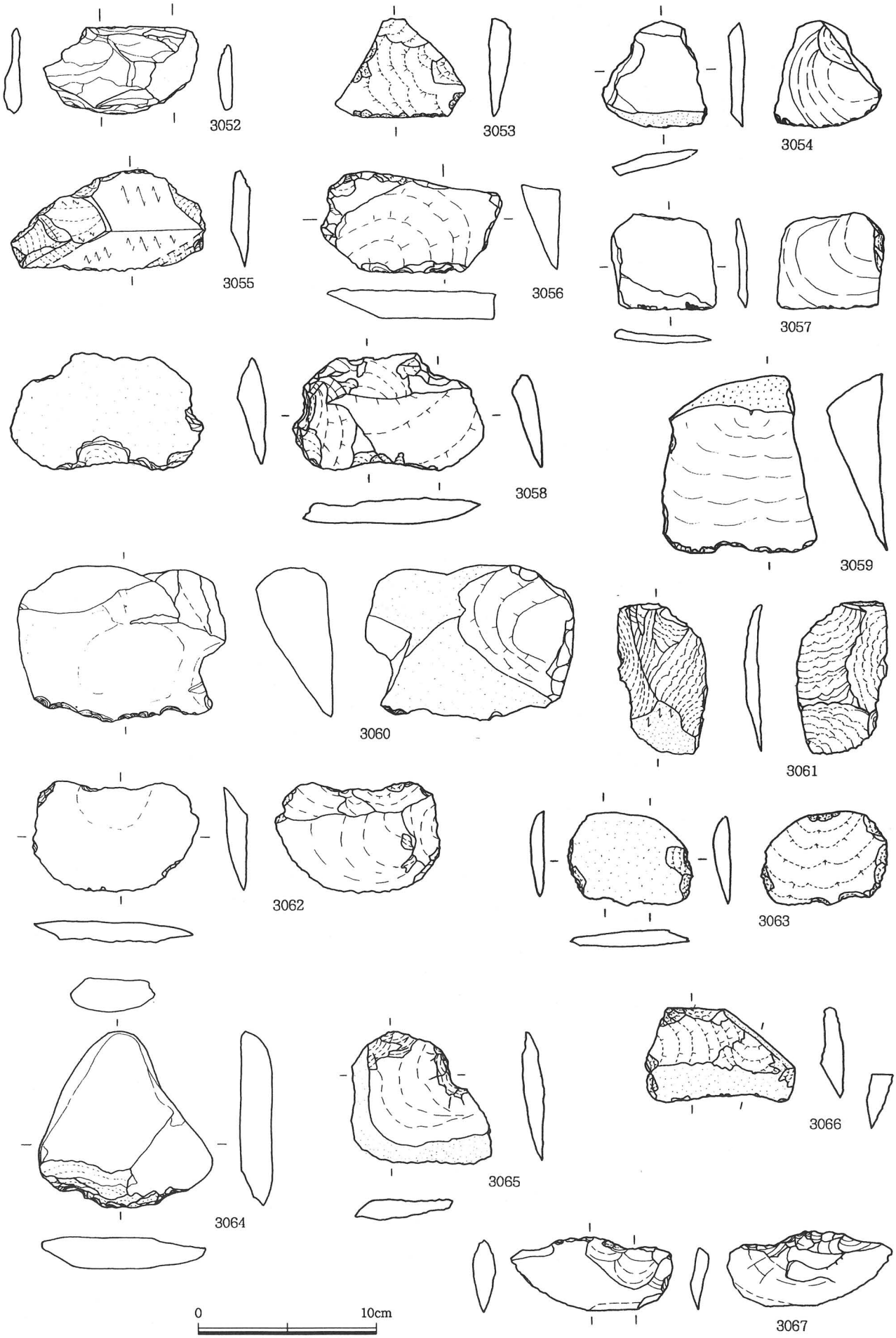
第144図　調査区出土石器実測図（7）　刃器



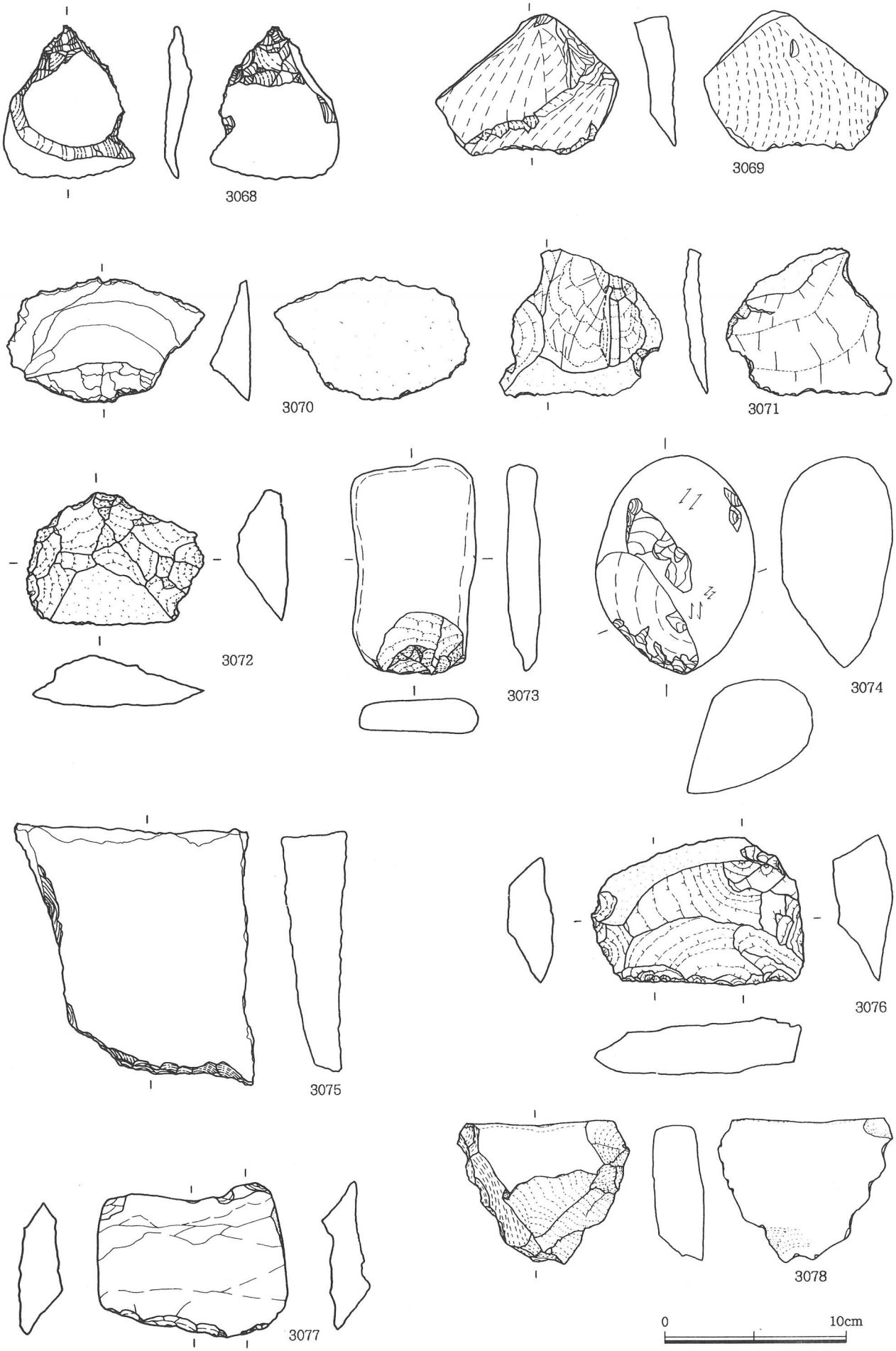
第145図　調査区出土石器実測図（8）　刃器・スクレイパー



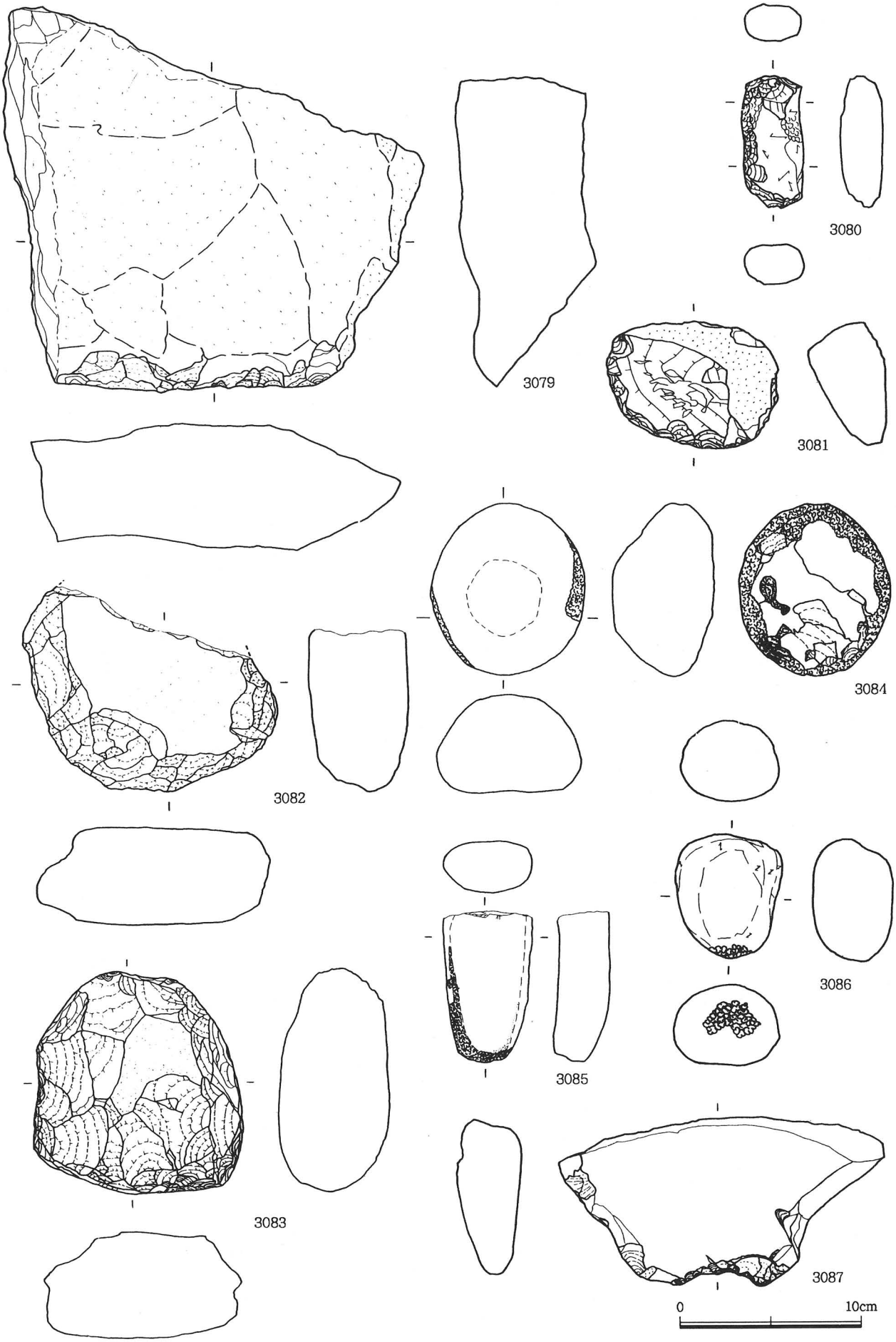
第146図　調査区出土石器実測図（9）　2次加工・使用痕のある剥片（その1）



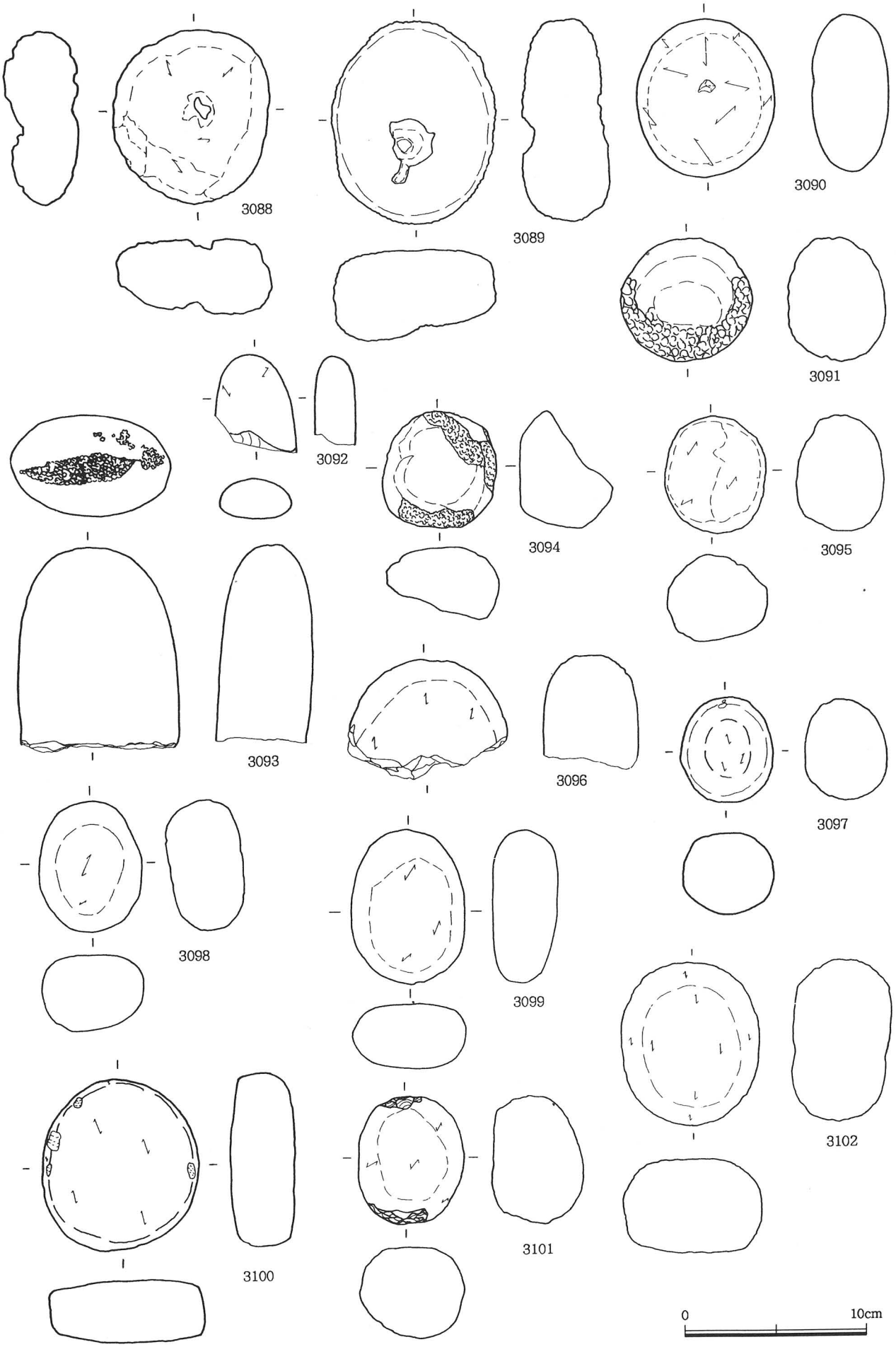
第147図　調査区出土石器実測図（10）　２次加工・使用痕のある剥片（その２）



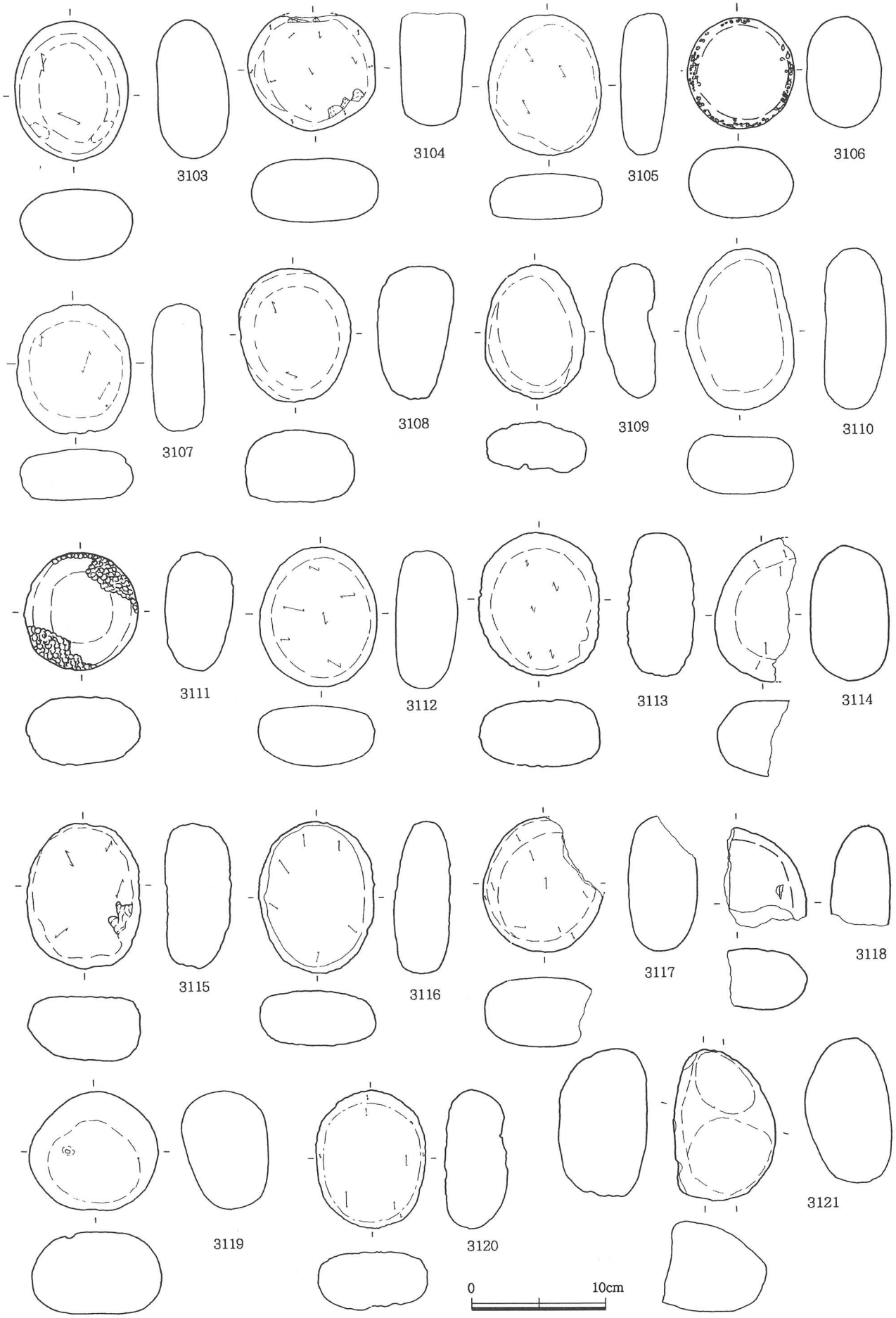
第148図　調査区出土石器実測図（11）　大型剥片石器・礫器（その１）



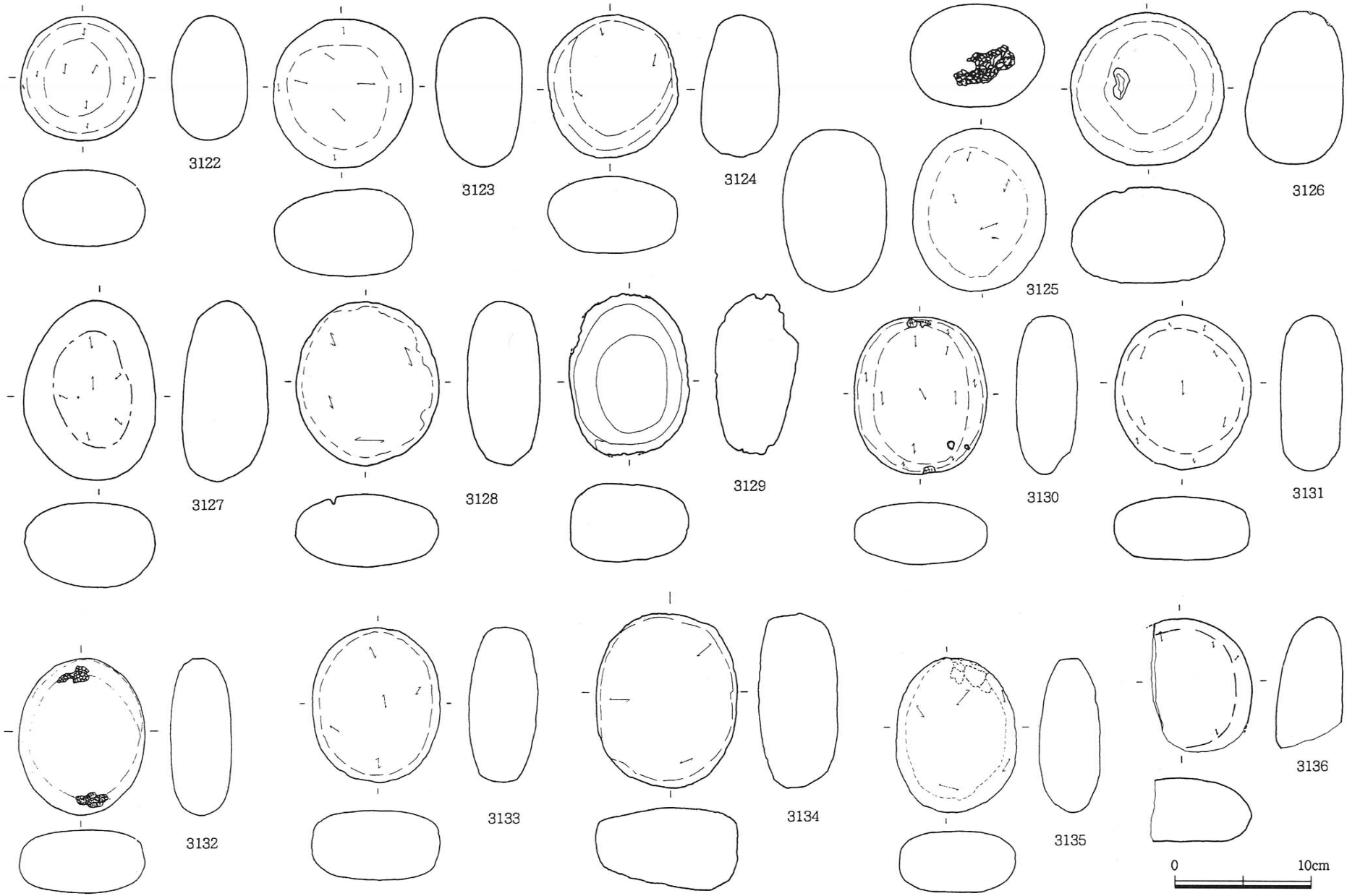
第149図　調査区出土石器実測図（12）　　礫器（その２）・敲き石（その１）・抉り入り石器



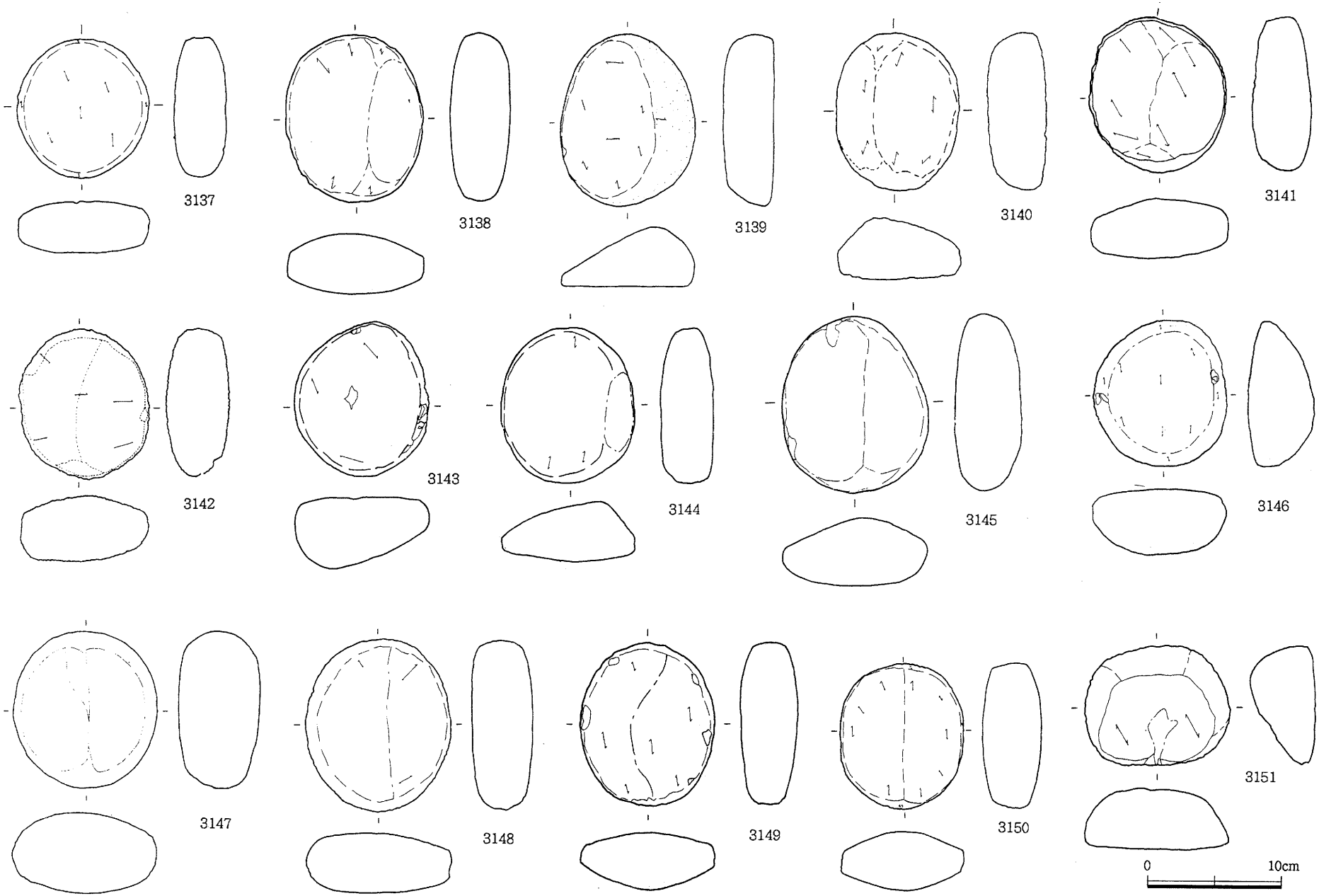
第150図　調査区出土石器実測図（13）　凹み石・敲き石（その２）・すり石（その１）



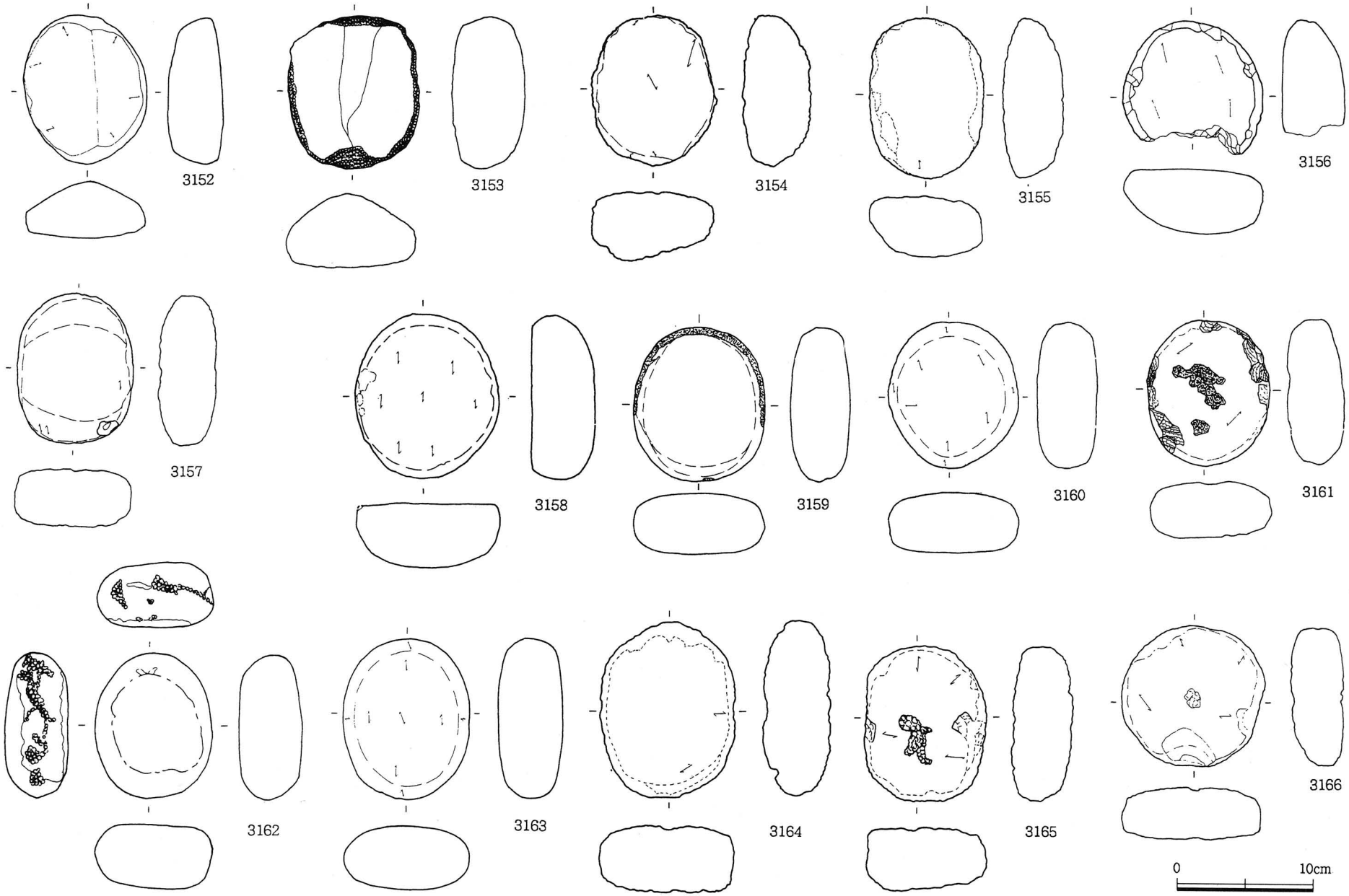
第151図　調査区出土石器実測図（14）　すり石（その２）



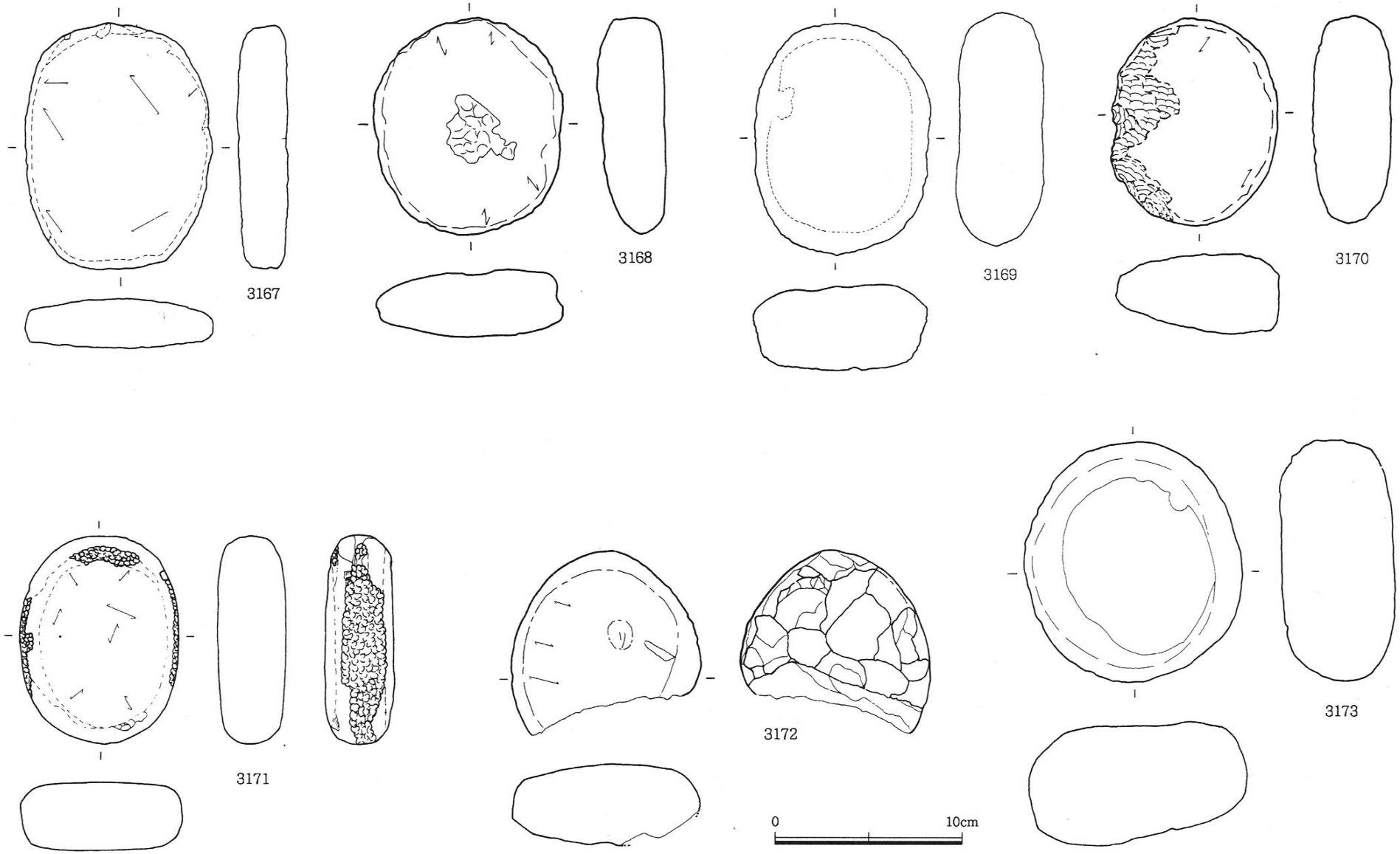
第152図　調査区出土石器実測図（15）　すり石（その３）



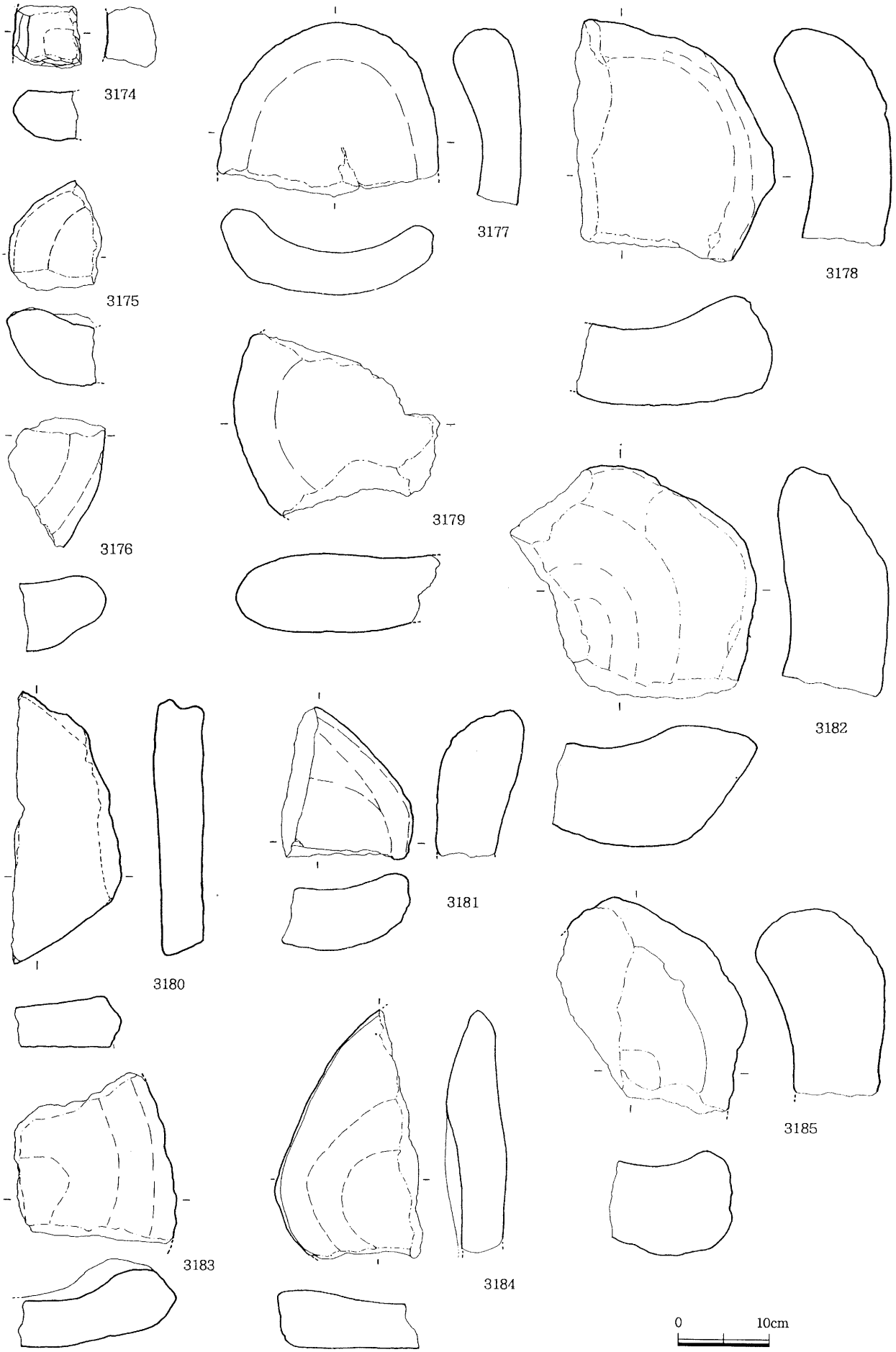
第153図　調査区出土石器実測図（16）　すり石（その４）



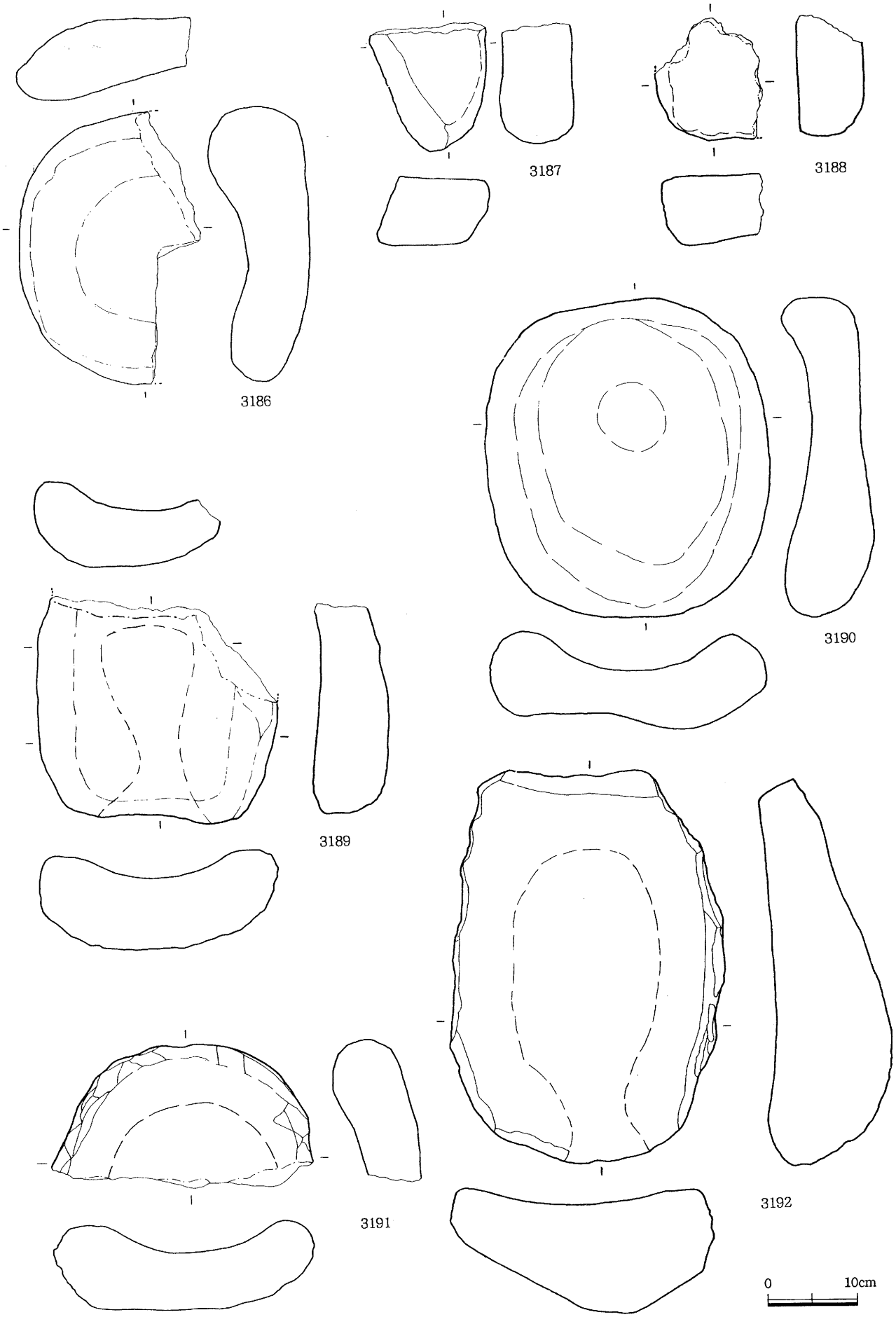
第154図　調査区出土石器実測図（17）　すり石（その５）



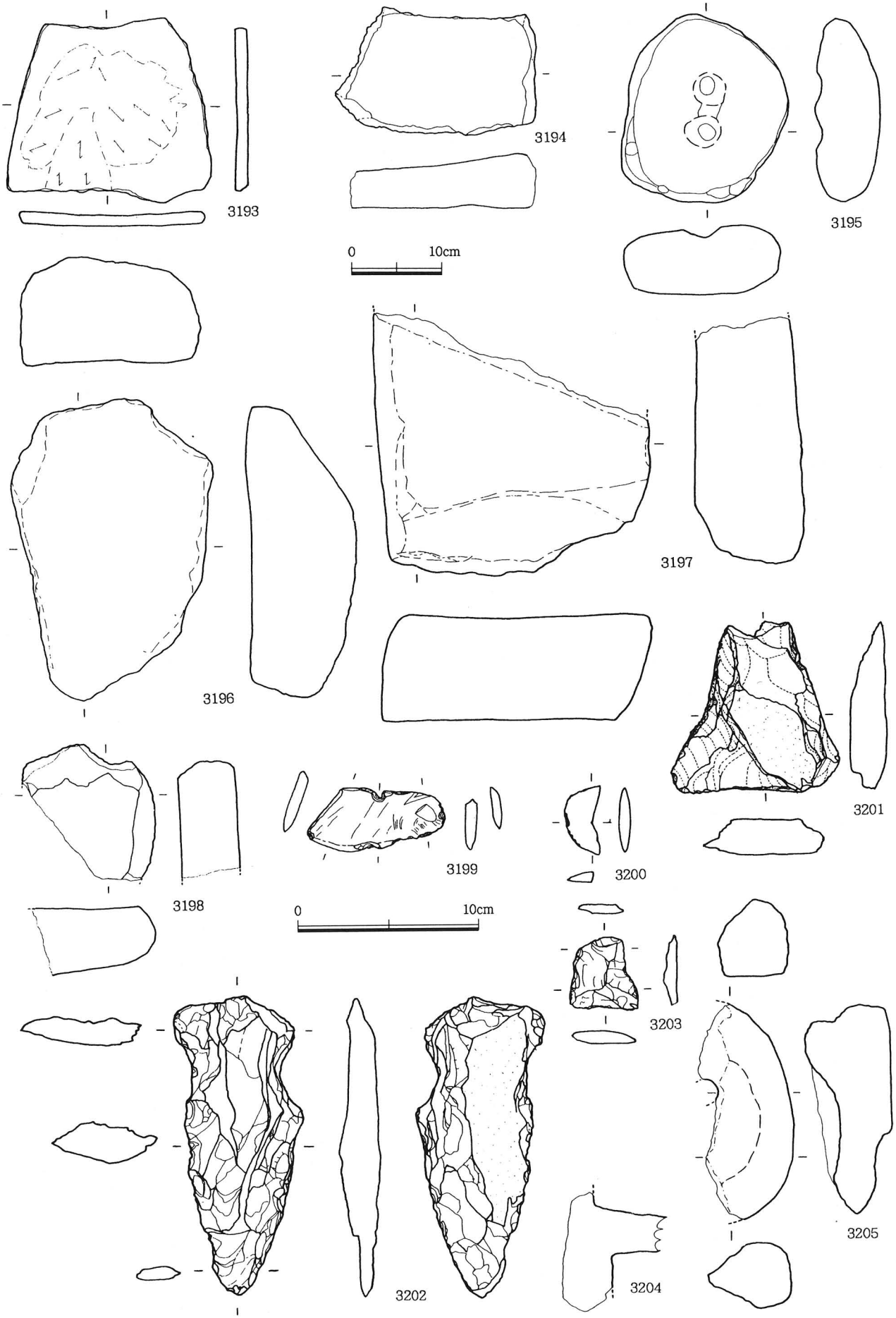
第155図　調査区出土石器実測図（18）　すり石（その６）



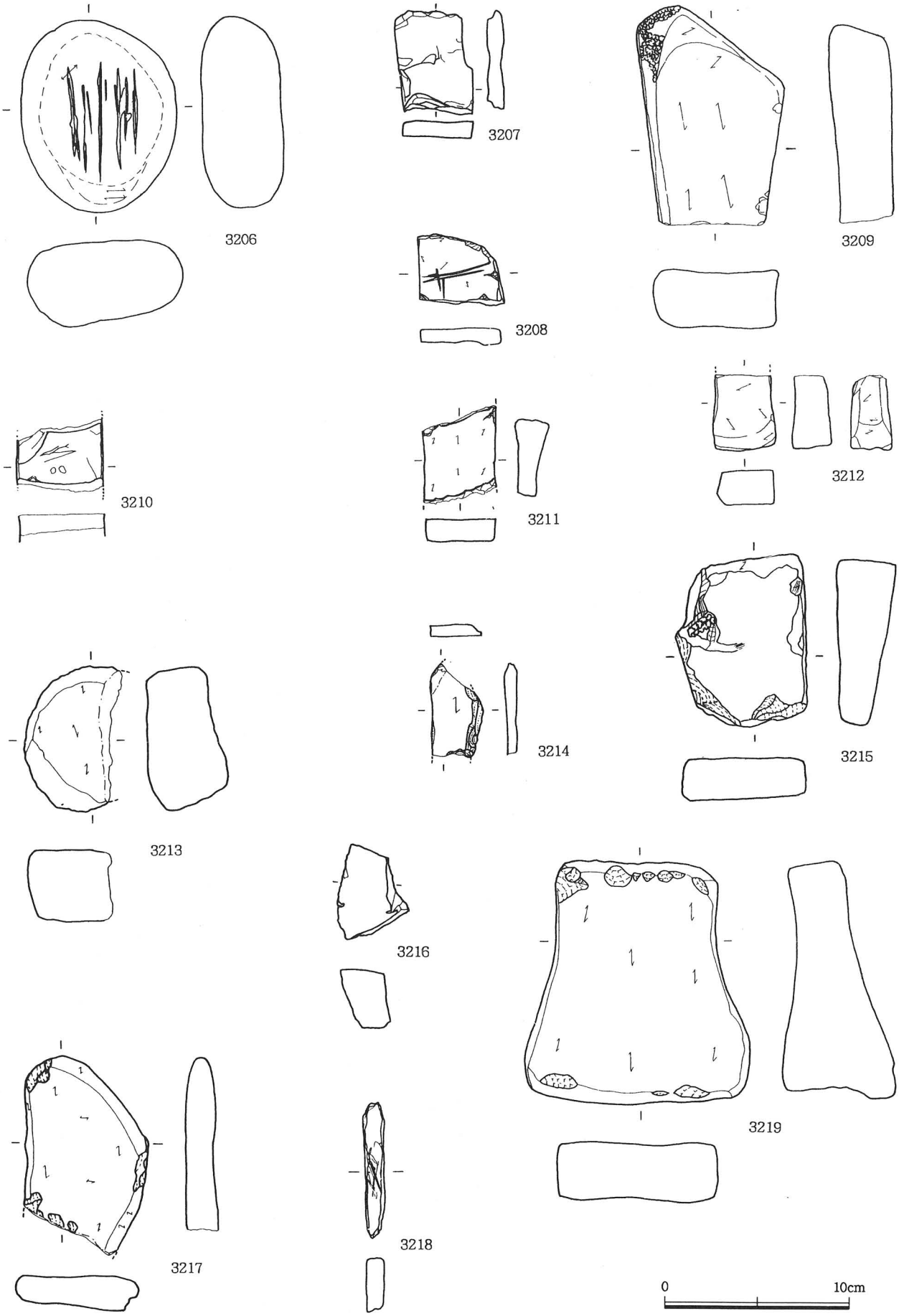
第156図　調査区出土石器実測図（19）　石皿（その１）



第157図　調査区出土石器実測図（20）　石Ⅲ（その２）



第158図　調査区出土石器実測図（21）　砥石・台石・石包丁・石鏃・石鍋・石臼　3203は1：3,
3206・3207・3215は1：6



第159図　調査区出土石器実測図（22）　砥石

9．まとめ

縄文時代中期末、阿高式土器を有する集団が居住を開始し、後期まで竪穴住居で定住生活を営んでいる。晩期～古墳時代前期は、明瞭な遺構が検出されない。この間、南縁の段丘崖が浸食されてⅣ層が約１ｍ堆積する。

古墳時代後期、谷水（SX-01）を利用して集落が営まれる。生業形態は不明であるが、市内でも屈指の須恵器出土量である。

平安時代になると、掘立柱建物に移行すると思われ、竪穴住居は無い。ただ、床面に縦横に小溝を有する工房址と推定される建物２軒が検出された。飲料・生業用水路として５号溝が掘削されたと考えられるが、12世紀末頃には埋没する。直径１ｍ前後の円形土坑も点在し、５号溝の掘削などを考慮すると、相当数の人口が予想される。

鎌倉時代、４号溝を新たに掘削・幹線用排水路とし、３号溝ほか11号・13号・16号・17号といった南北の小溝、８号溝ほか９号・12号・14号といった東西の小溝によって何らかの区画整備が行なわれている。ただし、掘立柱建物や円形土坑は多数構築されている。

室町時代、２号溝を新たに掘削・幹線用排水路とし、15号溝のほか、20～23号溝といった小溝が掘削されている。15世紀末には２号溝も埋没し、19号溝が掘削される。

近世中頃、19号溝が埋没すると再掘削され、19世紀に埋没する。23号溝の南側には18～19世紀の柱穴などがある。

19号溝が埋没すると明治５～６年頃、台地南縁・現在の用水路が掘削される。

これら５・４・２・19号溝は、すべて東南部の台地南縁に集結している。つまり、小池から導水するには一筋の傾斜変換線を通るしか無いのである。加えて、小池と田代地区の間には谷があるため、築堤の原形は中世～古代にまで遡る可能性がある。

古代～近世における台地の利用形態は、幹線水路の前面（北側）が耕作地で、後面が居住地となっていた。近代以降、家屋は全て台地南縁～傾斜地へ移っている。

整理作業期間が限られたため、遺物の詳細な検討ができなかったが、主要遺物についてはできる限り図化した。今後の基礎資料としたい。

Ⅳ．松山遺跡の調査

1．はじめに

工事によって削平される地区、約3,590㎡を対象とする調査で、平成６年11月28日から平成７年１月８日を充てた。遺跡は台地の北東端に立地し、畑地であった北半部は遺物包含層が良好に遺存し、南西部は水田基盤土の天地返しによる撹乱が著しい。結局、全体の７割程度、厚さ10～50cmの遺物包含層の掘り下げを行ない、遺構検出を開始した。遺構面は１枚で、円形の竪穴住居４軒と花弁状住居３軒、花弁状住居と推定されるもの１軒、原形不明住居１軒、地下式横穴墓１基のほか、土坑10基余り、柱穴・撹乱2,350基、溝状遺構１条を検出した。

2．基本的層序

層序は上から、Ⅰ層：耕作土、Ⅱ層：床土、旧耕作土、Ⅲ層：黒～黒灰色土、Ⅳ層：アカホヤ火山灰に分別した。上田代遺跡でみられた淡黄褐色系のⅣ層は、当地区までには達していないため、Ⅳ層はアカホヤ火山灰になる。遺構覆土のほとんどはⅢ層である。

3．縄文時代

調査区の北西部に遺構・遺物が集中する。

２号住居（第161～163図、図版112・113）

直径4.4ｍ前後の円形を呈し、深さは25cmである。柱穴は、直径18～32cm・深さ12～55cmのものが環状に配列する。中央pitは、長軸108cm・短軸57cm・深さ76cmである。

出土遺物としては、縄文土器のほか石鏃２点、切り目石錘・すり石・十字型石器（5.5×6.1cm）が各１点ある。

３号住居（第164図、図版113）

直径3.8ｍの略円形を呈し、深さは19cmであるが、上部20cm前後を削失した。柱穴は、直径20～34cm・深さ17～35cmのものが散在、中央pitは長軸45cm、短軸23cm・深さ49cmである。出土遺物は少ないが、南縁において台付鉢２点が出土した。

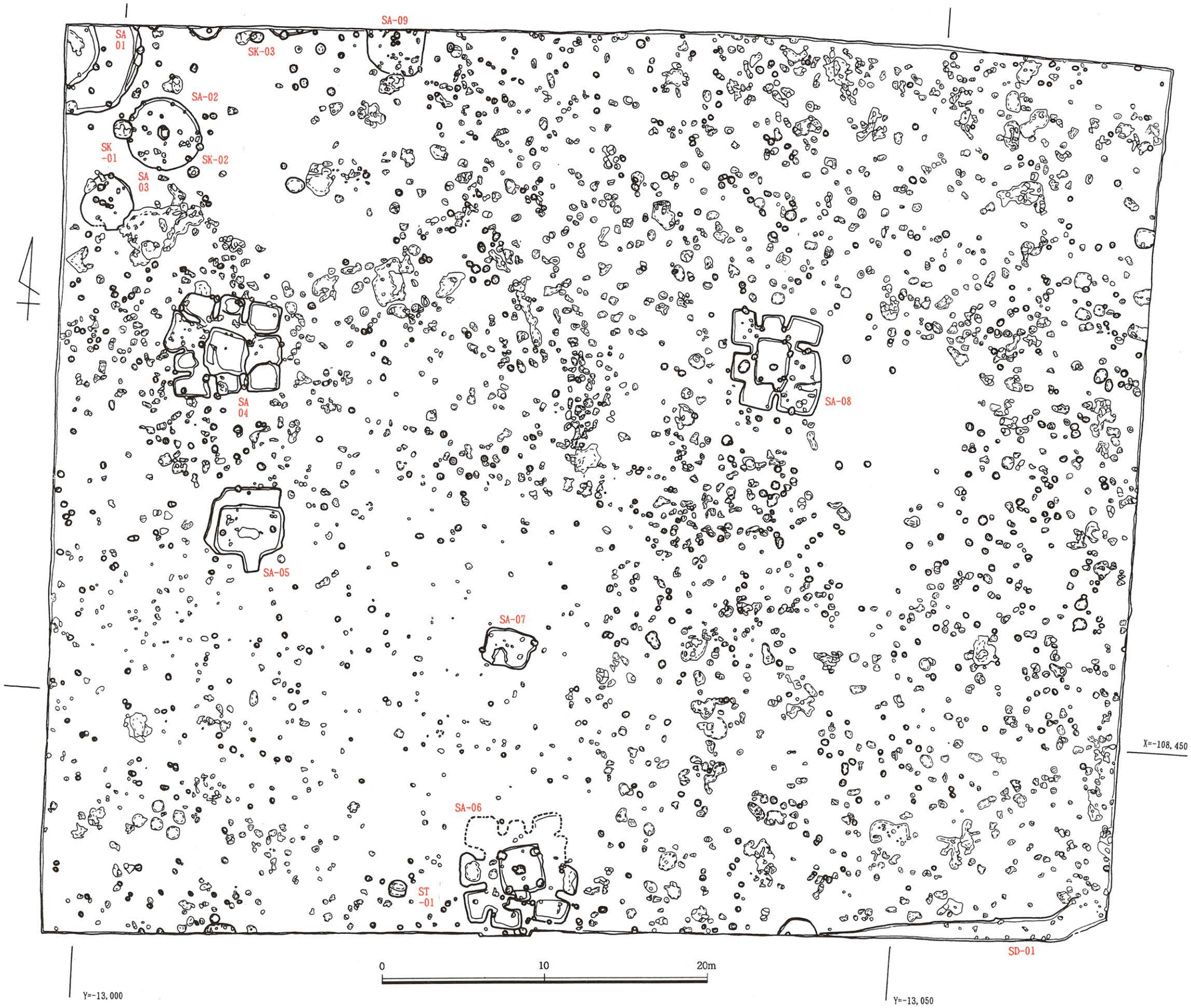
９号住居（第165図、図版113）

直径3.9ｍの略円形を呈すると思われ、深さは６～10cmである。柱穴は、直径13～34cm・深さ16～43cmのものが中央寄りにある。出土遺物は、少量の土器片がある。

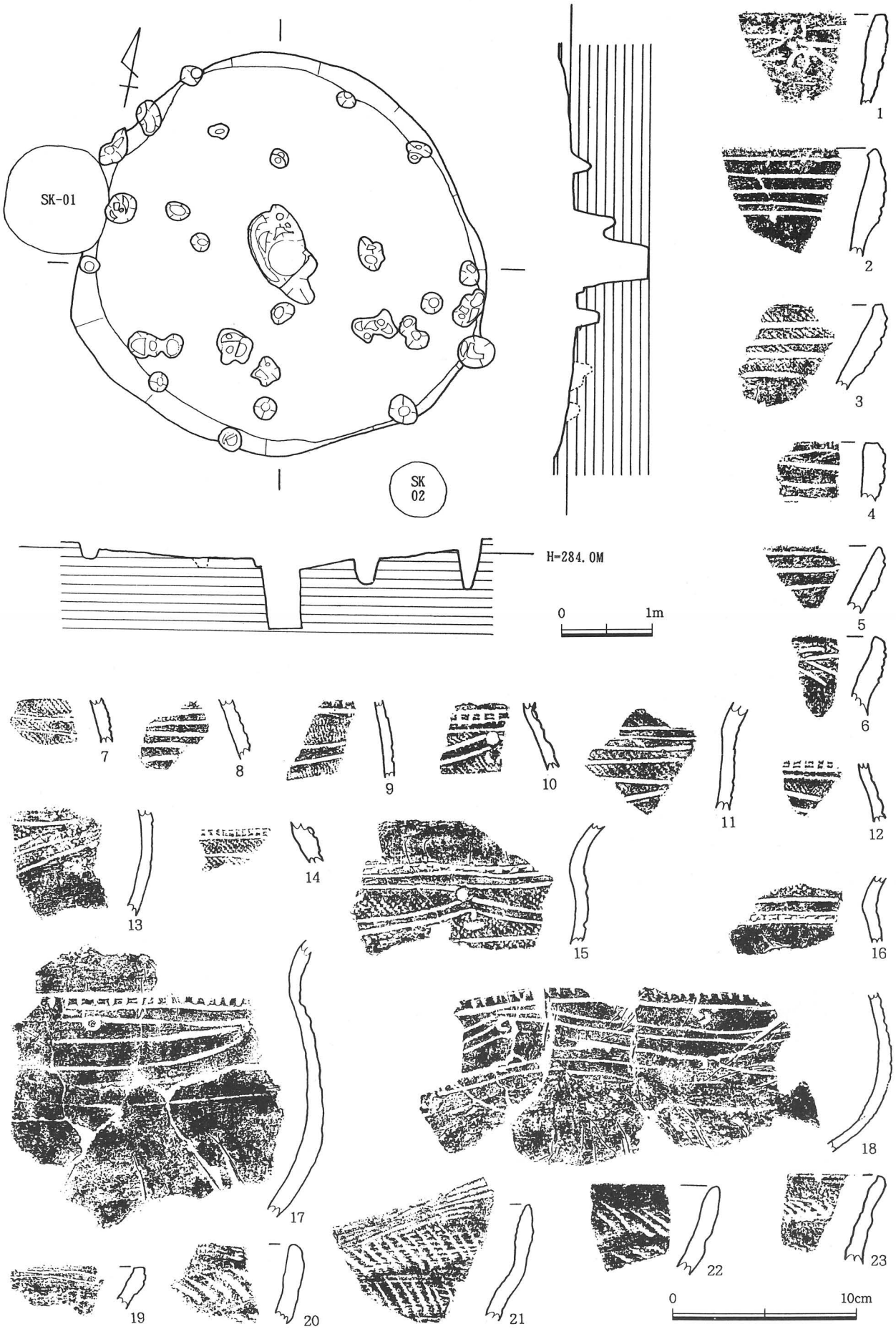
遺物包含層出土遺物（第180～187・192～196図、図版126～136）

縄文時代後期を主とする土器片が約6,000点と、原石・石核・石器・剥片が約1,300点、炭化クリ（栗）が約30個出土した。

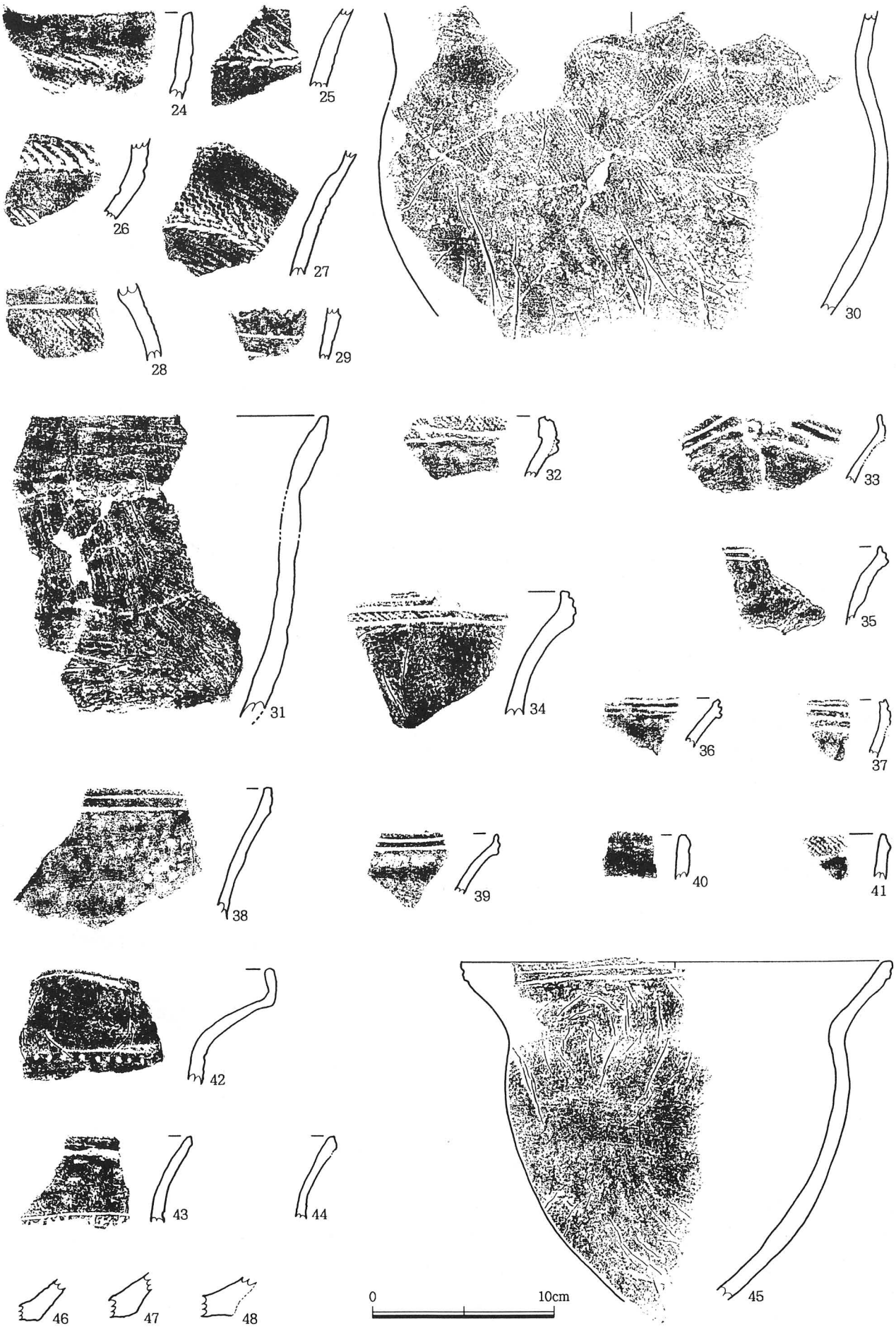
縄文土器はⅣ層上層の漸移層を主として曽畑式土器（第180図、図版126）が出土したが、中期の遺物を



第160図　松山遺跡　遺構分布図　細線は撹乱



第161図　２号住居および出土遺物実測図（１）



第162図　２号住居出土遺物実測図（２）

欠く。後期は西平式土器を主とし、若干の丸尾式土器が混在する。

打製石鏃（第192図、図版139）

黒曜石・チャート・安山岩製で、16点出土。

石匙（第192図、図版139）

チャート製で３点出土。

石錘（第194・195図、図版140）

小型の切り目石錘26個と、大型の打欠石錘９個が出土。

すり石（第195・196図、図版139）

小型１、中型８、大型１点が出土しており、敲き石兼用のものが多い。

敲き石（第193・194図、図版139）

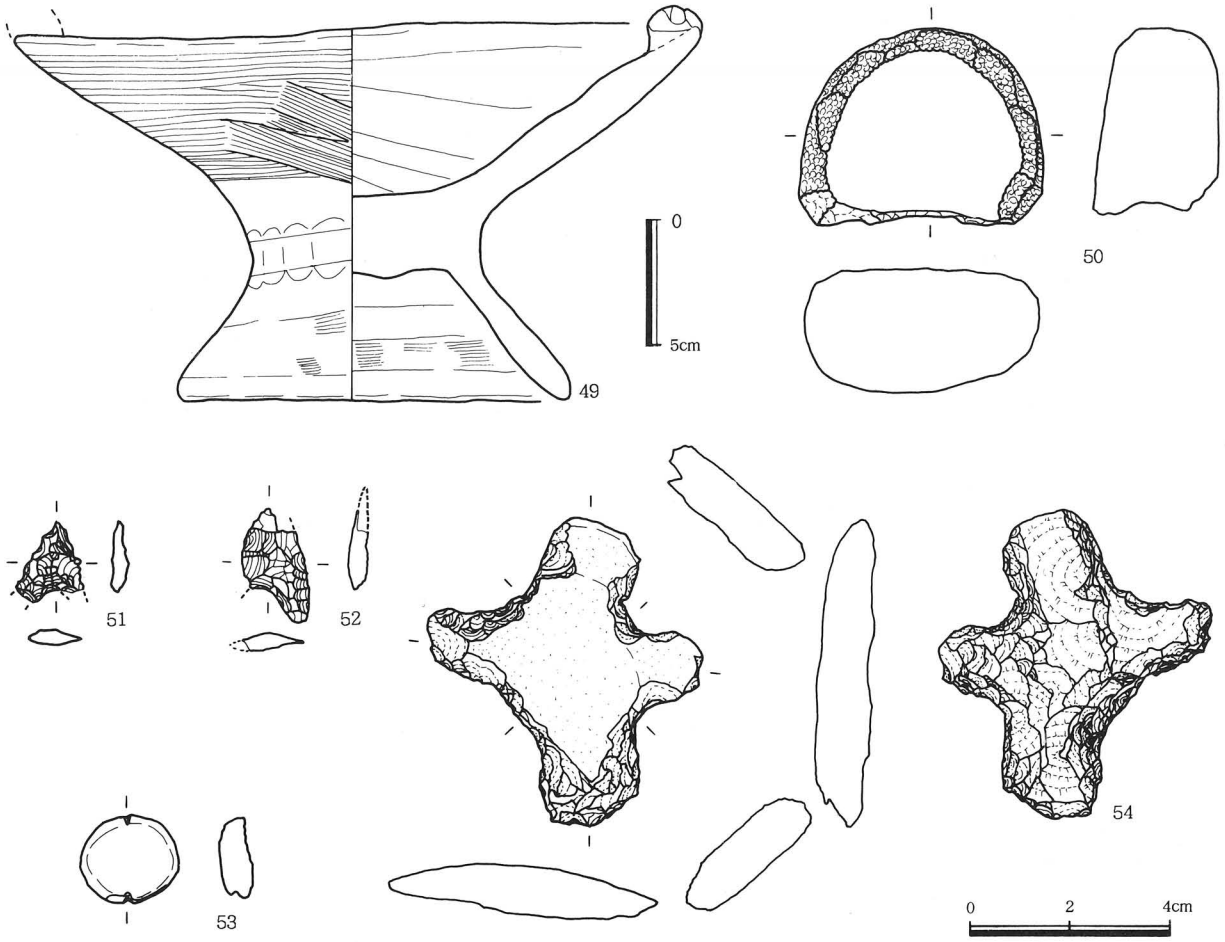
大小12点出土、石英塊が多い。また、石斧転用品も１点ある。

石皿（第196図、図版141）

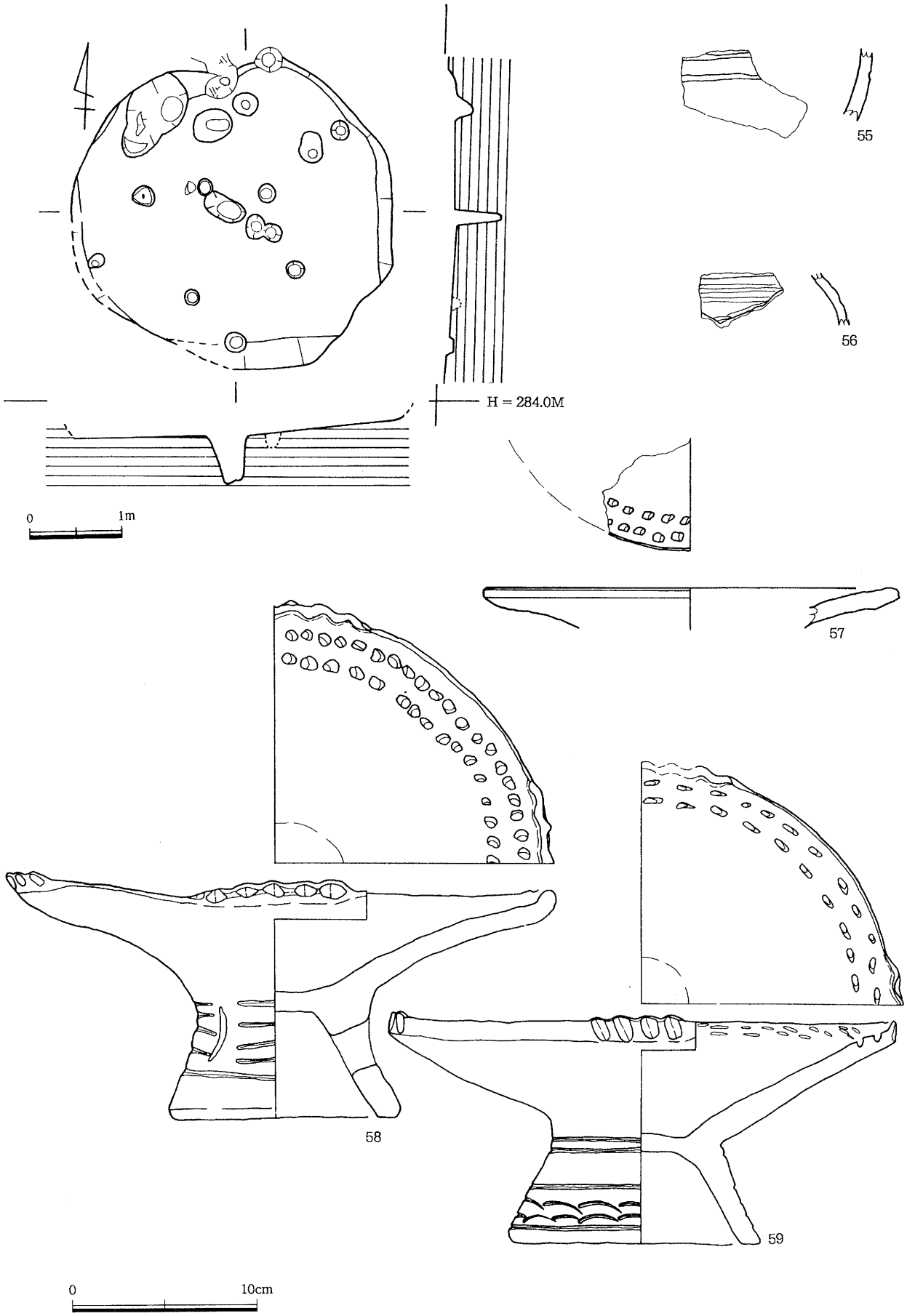
破片が４点出土している。

十字型石器（第192図、図版139）

２点出土し、**533**の抉り部は使用による磨滅が顕著である。



第163図　２号住居出土遺物実測図（３）



第164図　３号住居および出土遺物実測図

石鏃（第192図、図版140）

大型の基部と、小型１点が出土した。

スクレイパー・刃器（第192・193図、図版141）

円形～不定形のものが12点出土している。

礫器（第193図、図版141）

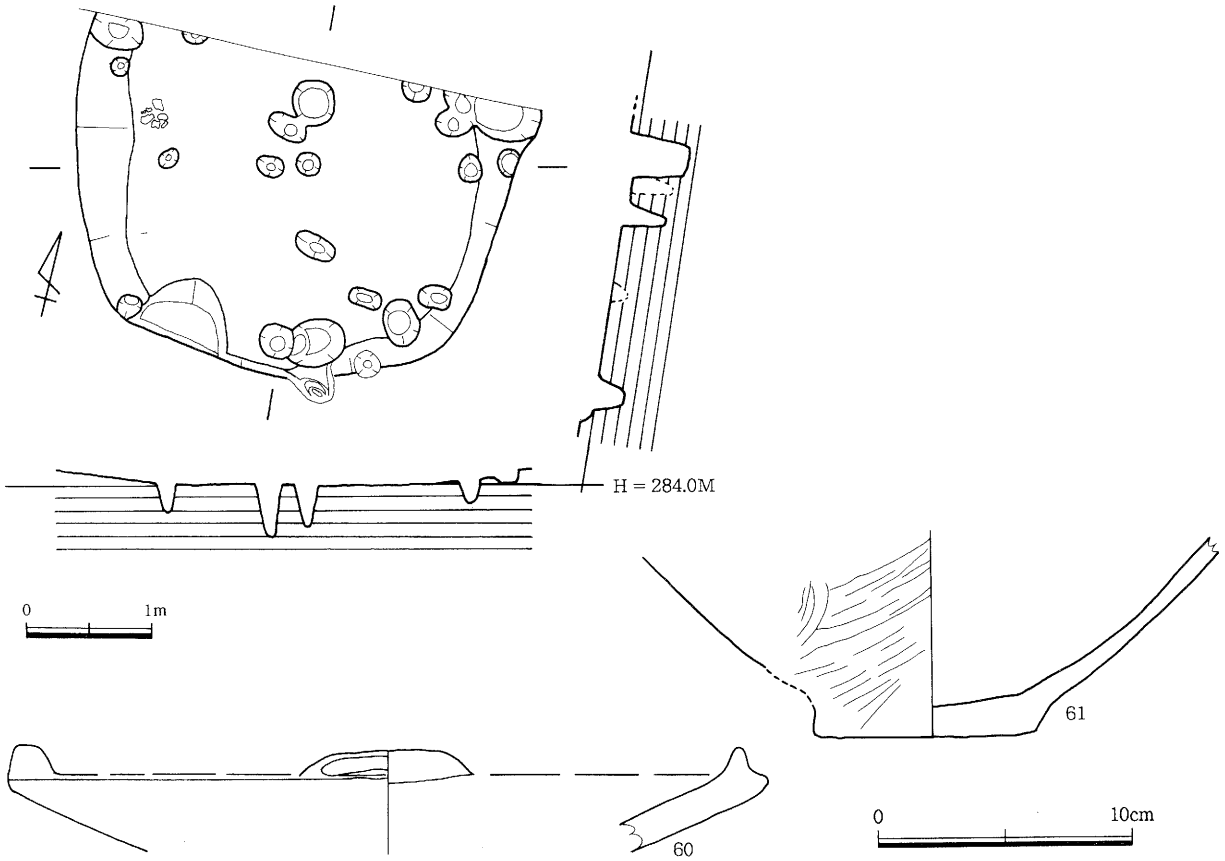
不定形のものが４点出土している。

４．弥生時代

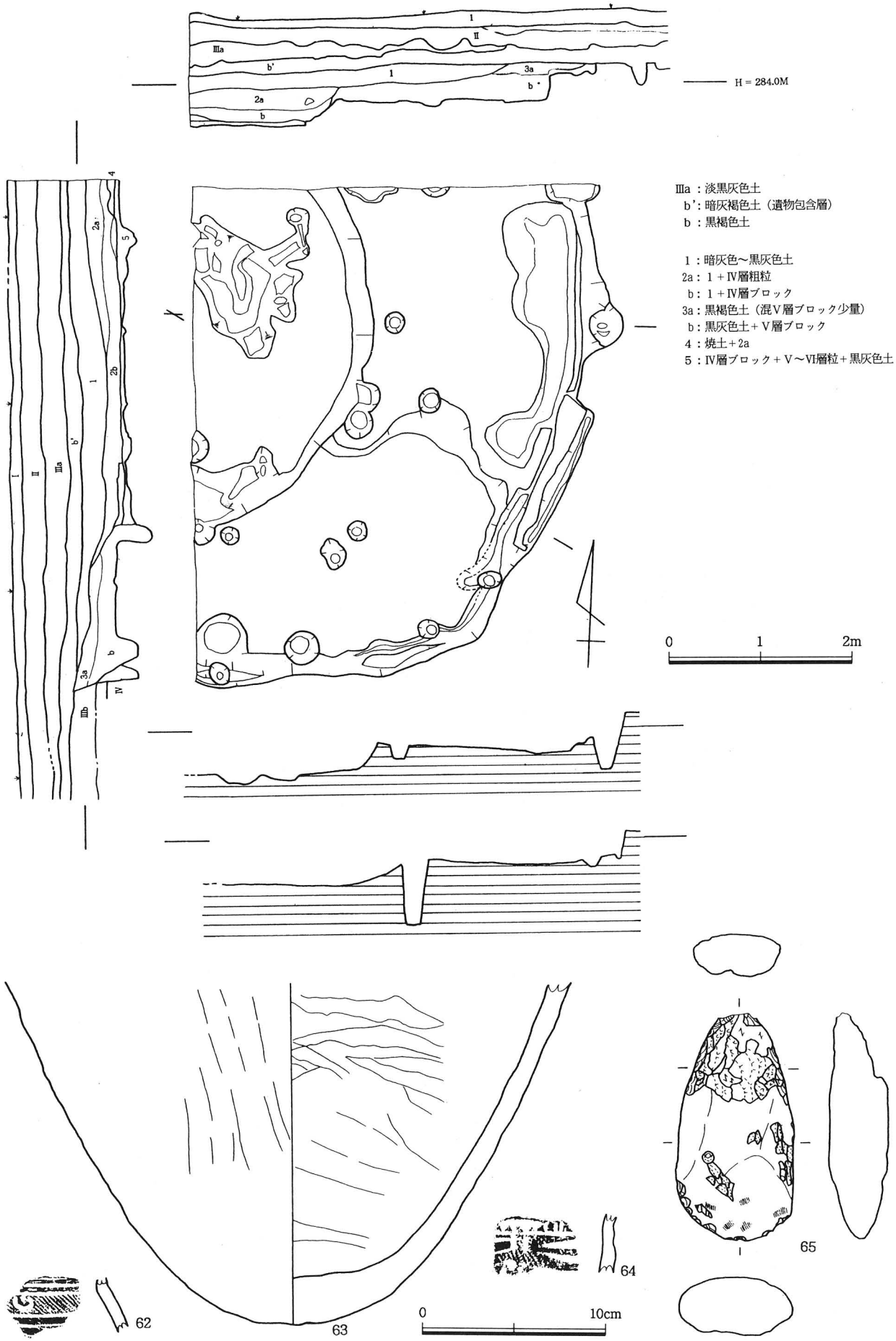
調査区全体に遺構・遺物が広がっている。遺構は、円形の竪穴住居１軒、花弁状住居３軒、花弁状住居と推定されるもの１軒、原形不明住居１軒、土坑10基余りのほか、柱穴と断定してもの580基余りがある。

１号住居（第166図、図版112・120）

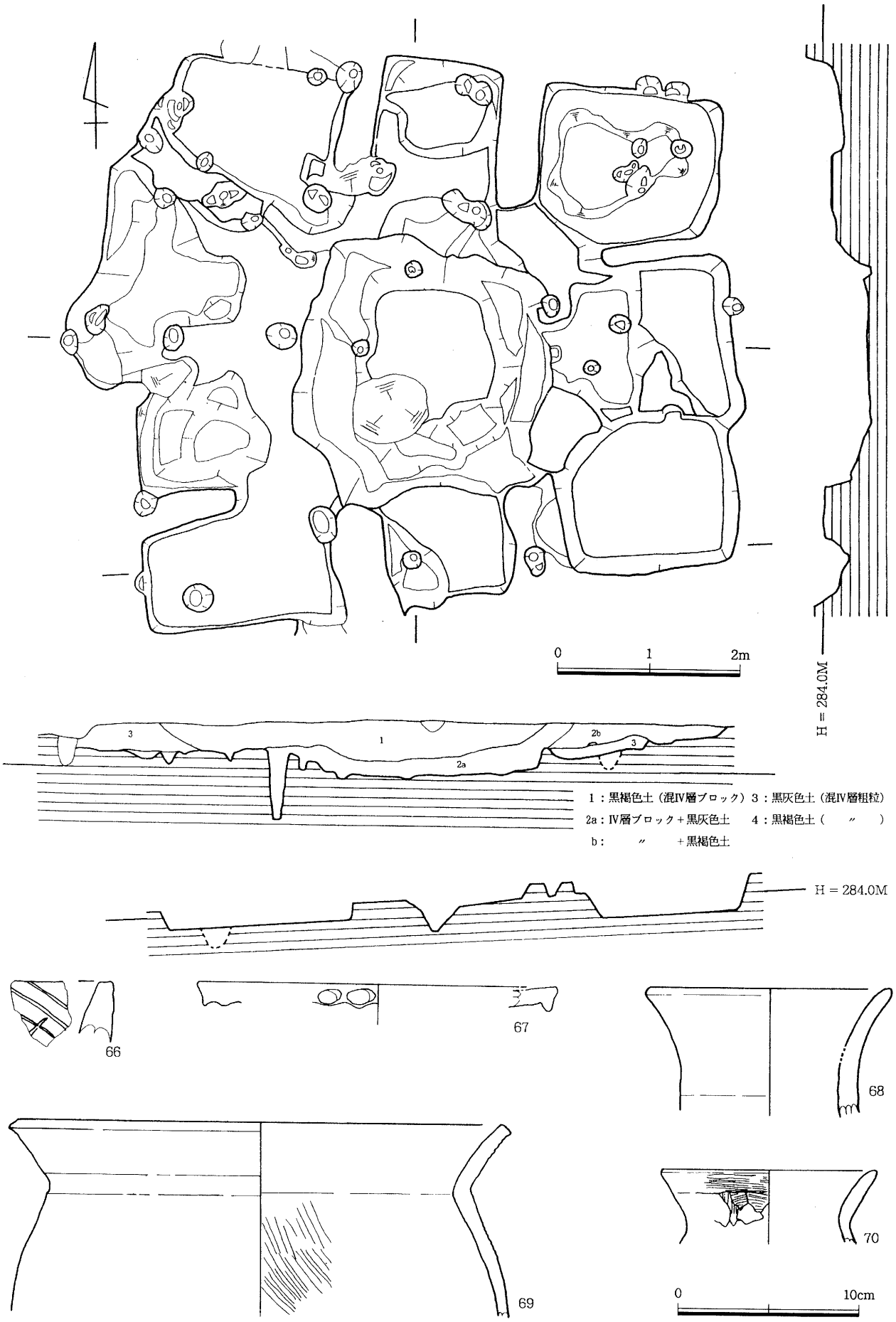
調査区の北西隅に⅓程度が検出され、直径８ｍ位の円形を呈し、中央床面の深さは60cmである。東壁には間仕切りの名残りがあり、突出部が完全に除去されていない。掘り肩から30cm下に幅1.3～2.2ｍのテラス（ベッド状遺構）があり、周壁沿いには幅18～30cm・深さ２～８cmの溝が断続的に巡る。テラスの



第165図　９号住居および出土遺物実測図



第166図　1号住居および出土遺物実測図



第167図　4号住居および出土遺物実測図（1）

東側と南側・中央床面には、５cm前後の貼り床が施されている。柱穴は、直径22～36cm・深さ８～53cmで、外壁沿いとテラス内肩部に巡る。

出土遺物は少なく、縄文土器・弥生土器・蛇紋岩製石斧がある。

４号住居（第167・168図、図版114・122・123）

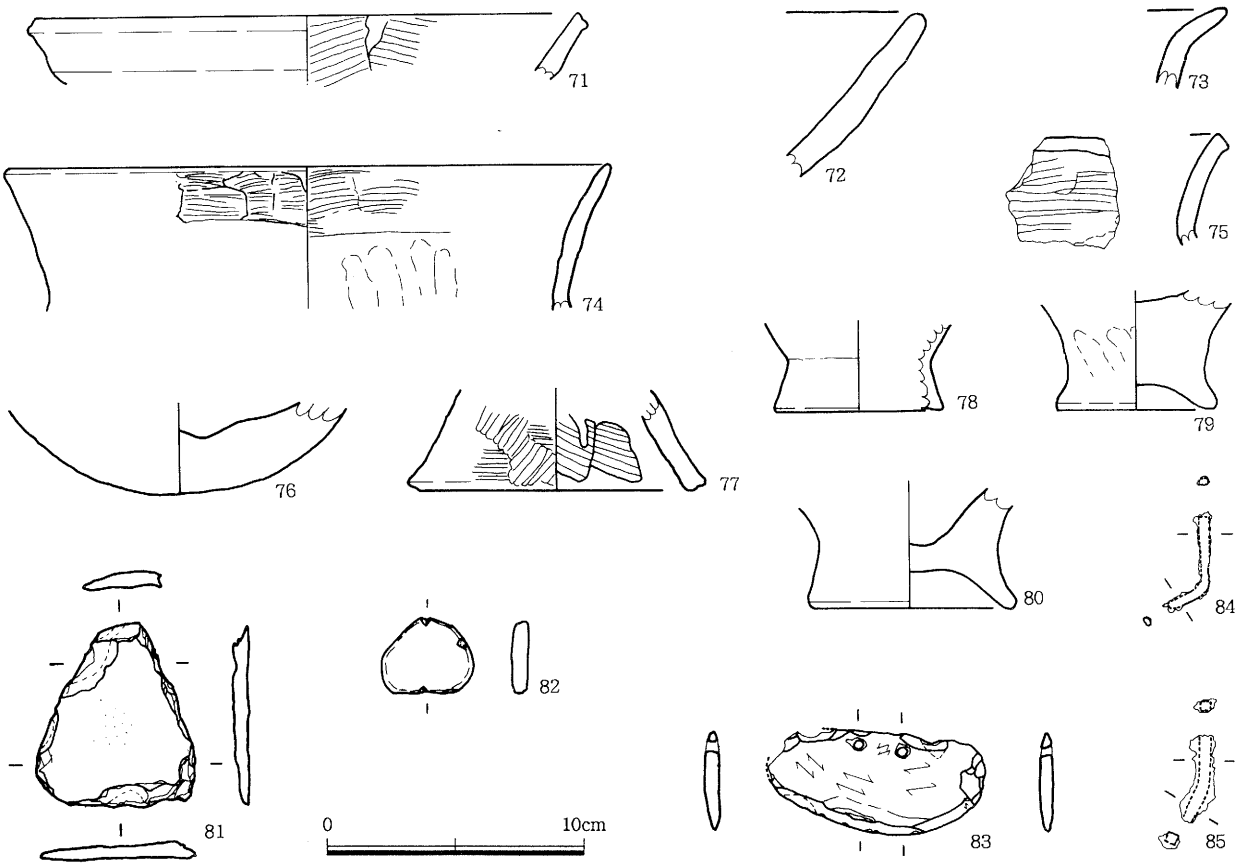
東西6.5m・南北５～6.2mの、台形を基調とする花弁状住居で、西側のみ３ヶ所の間仕切りがある。各部屋は25～40cmの深さにあるが、南辺中央部のみ15cm前後と浅く小規模なことから入口と想定される。柱穴は、直径17～30cm・深さ９～82cmで、中央寄りの２基が主柱穴と思われる。

出土遺物は縄文土器２点のほか、弥生土器壷・甕類、石鏃・石包丁・石鍬・石錘のほか、直径３～４mm・長さ3.7cmでくの字に曲がった釣針状鉄器が出土している。

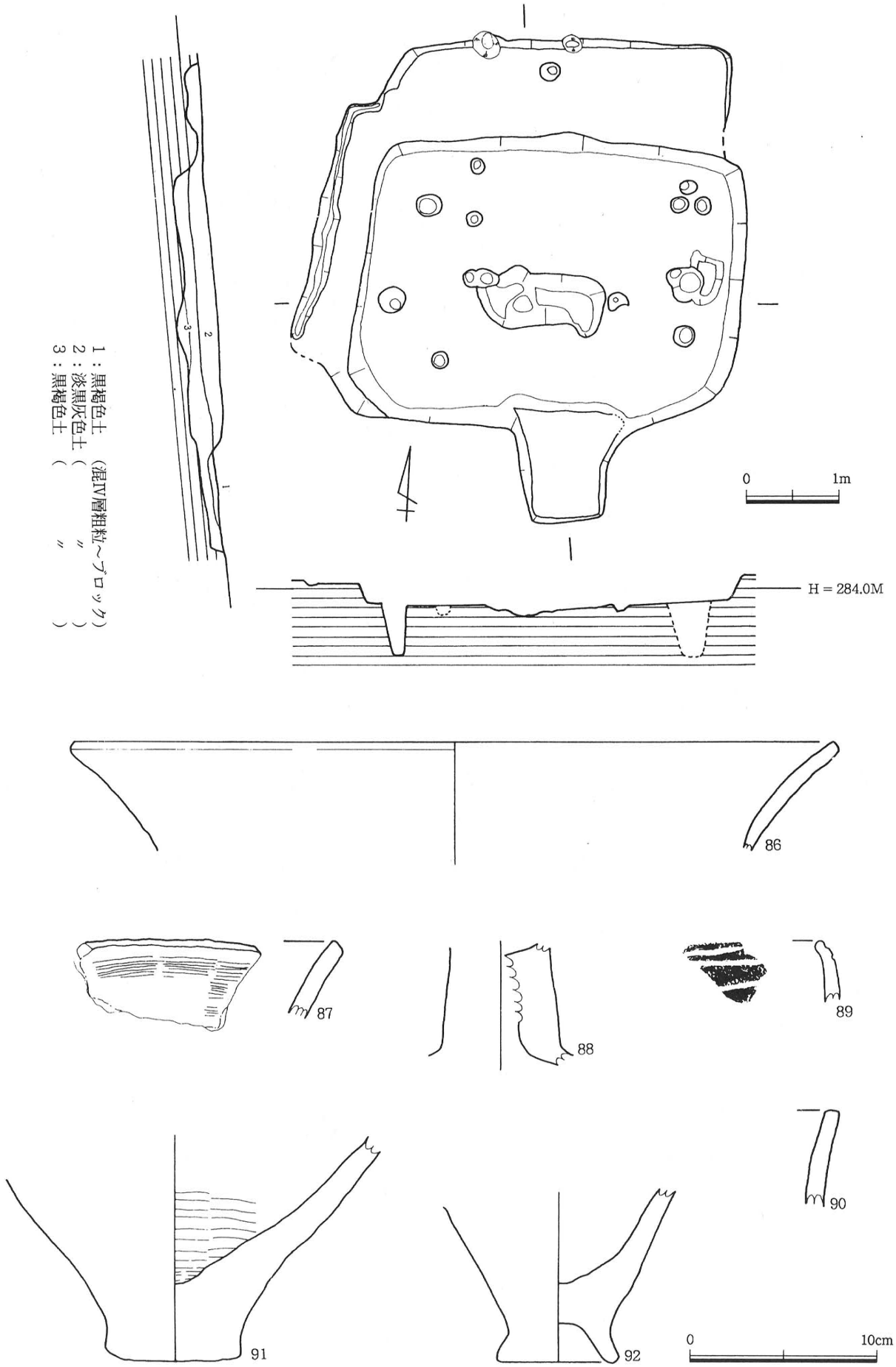
５号住居（第169・170図、図版115・123）

東西４m・南北3.04mの長方形の南辺に、幅0.8～1.4m・長さ1.18m・深さ９cmの張り出しを持つ。また、西面に幅30～40cm、北面に幅１～1.4mのベッド状遺構が遺存し、中央部の深さは37cmである。中央西の直径27cm・深さ52cmの柱穴と、東の直径34cm・深さ56cmの柱穴が主柱穴で、他の柱穴は直径14～22cm、深さ５～25cmの小規模なものである。中央pitは、長さ113cm・幅56cm・深さ６mである。削平を受け、原形は不明であるが、花弁状住居の可能性が高い。

出土遺物は、縄文土器１点のほか、弥生土器、すり石、砥石がある。



第168図　４号住居出土遺物実測図（２）



第169図　５号住居および出土遺物実測図（１）

6号住居（第171・172図、図版116・124）

７ｍ四方を基調とする花弁状住居であるが、北半部の削平が著しい。南辺中央の間仕切りも判然としないが、２段目掘り肩との間に突出部があり、入口的機能が想定される。南半部の部屋は、深さ20cm前後である。２段目はさらに20cm掘り下げられ、四隅に直径38～50cm・深さ40～69cmの柱穴を配置する。その他、直径16～30cm・深さ12～33cmの柱穴が散在する。中央pitは、長さ63cm・幅50cm・深さ12cmである。西側中央の部屋の西～南壁には、幅６cm・深さ３～９cmの壁溝が巡る。

出土遺物は、縄文土器１点と、若干の弥生土器、砥石がある。

7号住居（第173図、図版124）

東西2.98ｍ、南北2.2ｍの長方形で、深さ10cm。花弁状住居の２段目と思われる。

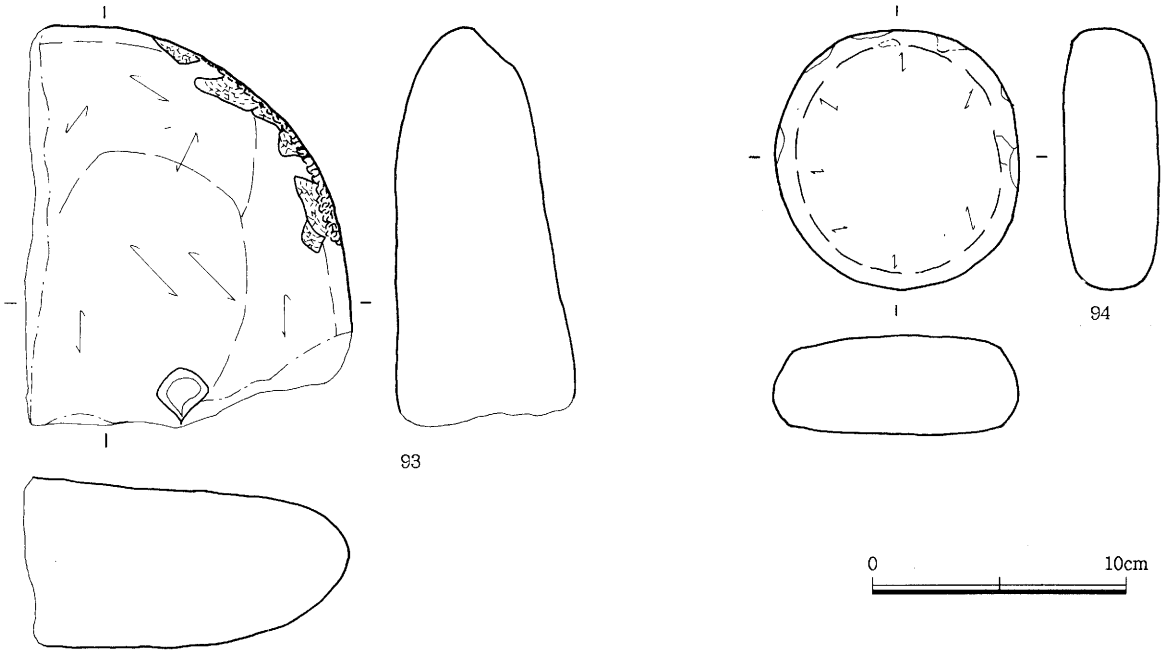
柱穴は、直径24～28cm・深さ３～10cmの４隅のものが主柱穴と思われ、直径13～18cm・深さ４～６cmのものが中央寄りにある。中央には、直径21cm・深さ９cmの柱穴がある。

出土遺物は、極く少量の弥生土器がある。

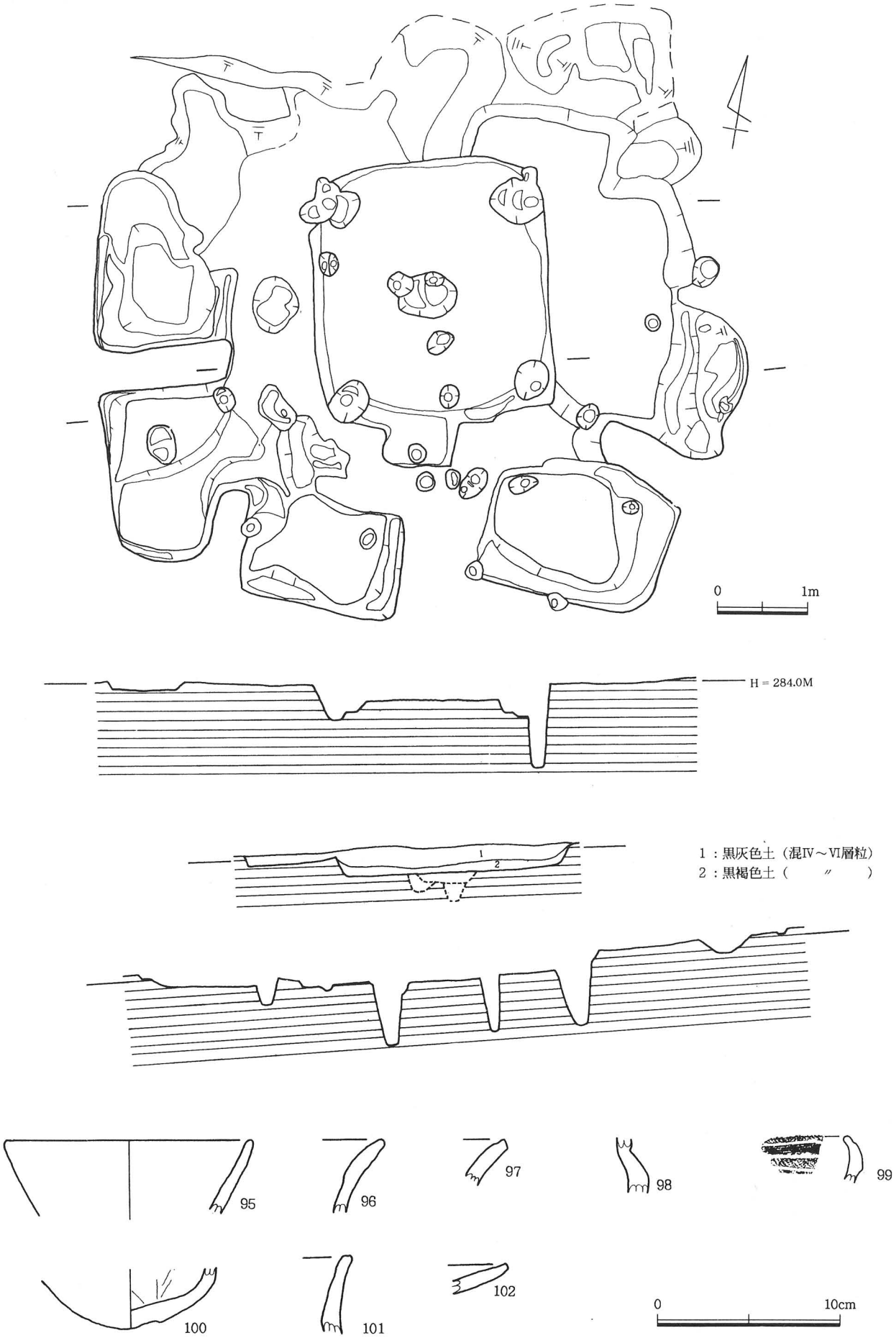
8号住居（第174・175図、図版117・124）

東西5.4ｍ、南北5.8ｍの長方形を基調とする花弁状住居で、10～25cm掘り下げた部屋がある。幅６～18cm・深さ２～４cmの壁溝は、断続的に巡る。中央は、東西２ｍ・南北2.78ｍの長方形で深さ40cmの掘り込みがあり、４隅には直径10～26cm・深さ７～19cmの柱穴があるものの、中央北寄りの左右の柱穴（直径20～28cm・深さ40cmと直径30～40cm・深さ44cm）が主柱穴と思われる。また、東南部には張り出しがあり、突出部と接している。覆土中層には大量の焼土と炭が入っていた。

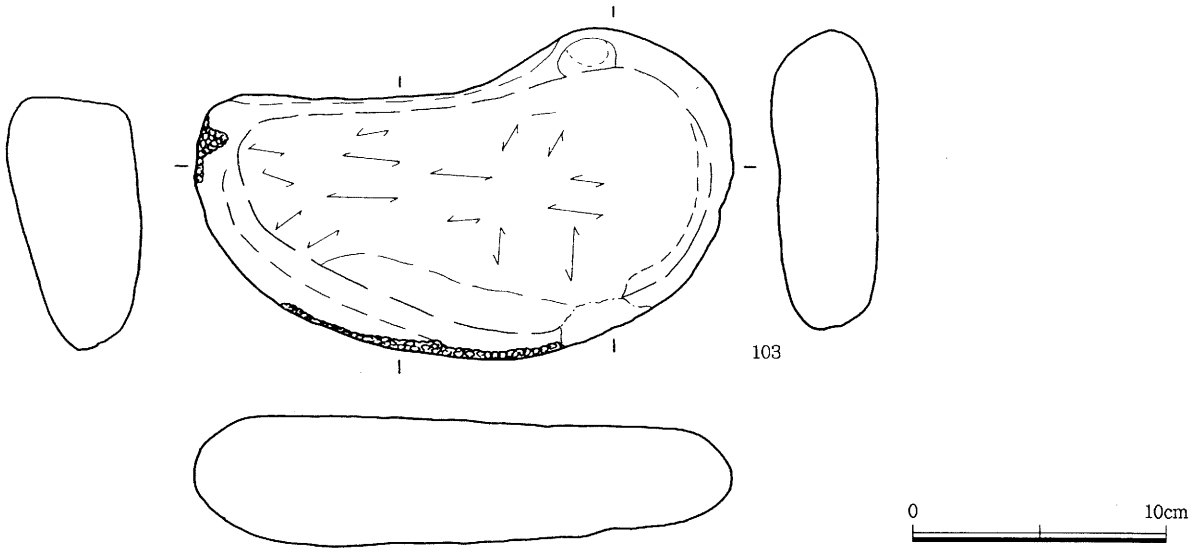
その他、直径17～34cm・深さ８～43cmの柱穴が、南東寄りに点在する。出土遺物は中央部下層～床面に多く出土し、長頸壷などの壷甕類と砥石、磨製石鏃が出土している。



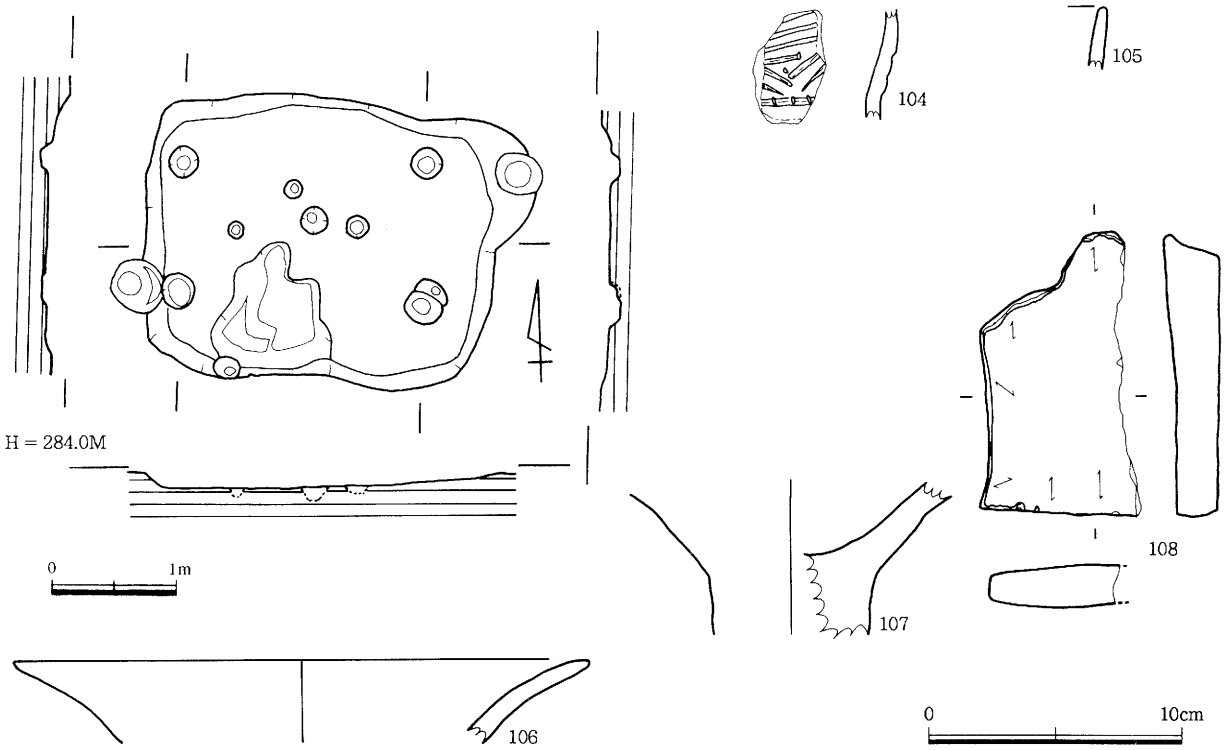
第170図　５号住居出土遺物実測図（２）



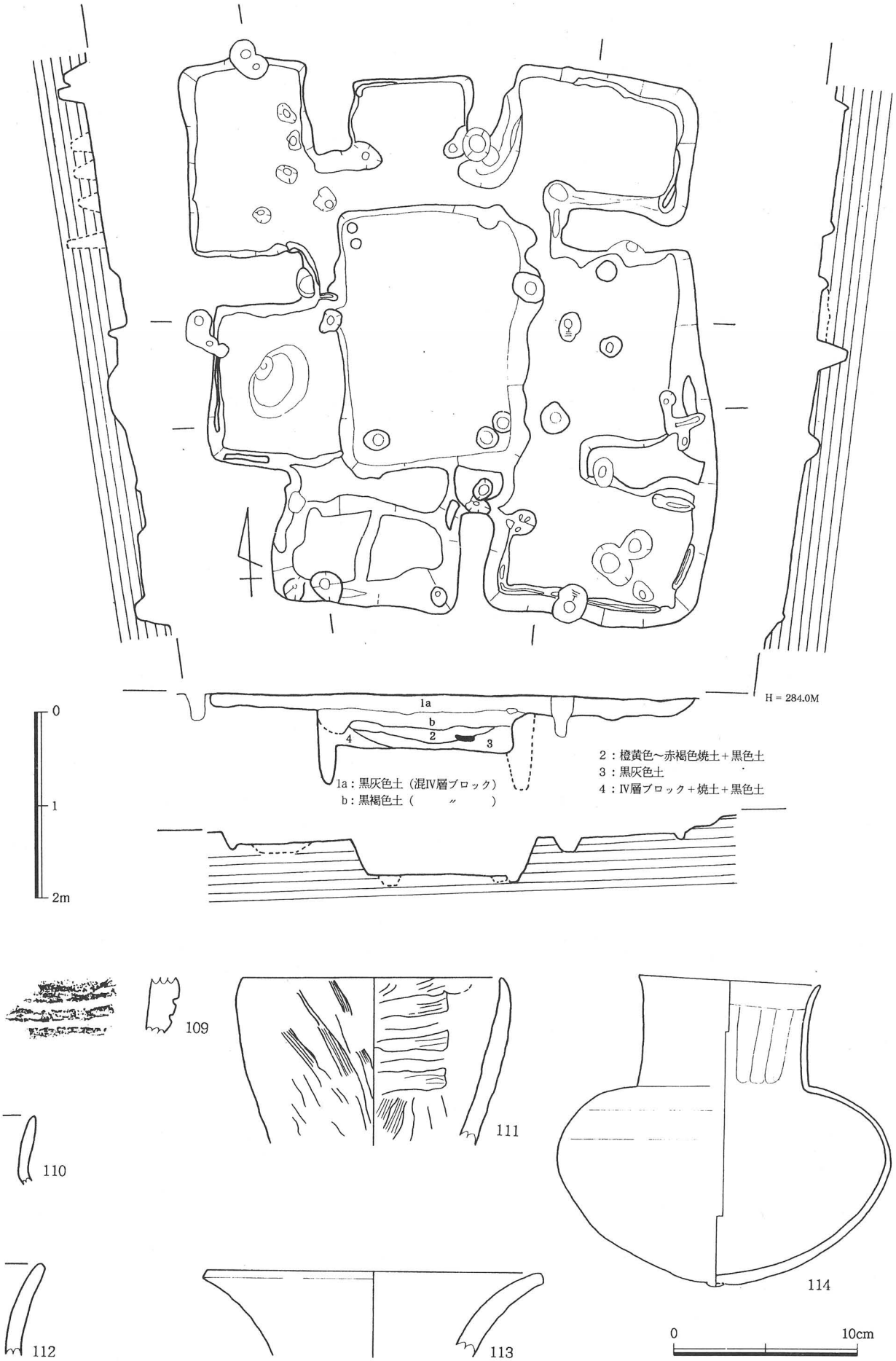
第171図　６号住居および出土遺物実測図（１）



第172図　6号住居および出土遺物実測図（2）



第173図　7号住居および出土遺物実測図



第174図　8号住居および出土遺物実測図（1）

1号土坑（第176・177図、図版119・125）

直径1.15～1.2mの円形を呈し、深さは10cmである。上面（上層）には、石皿を含む多量の縄文土器と弥生土器が集積していたが、下層においては少量の土器片と鉄鏃1点のみである。

2号土坑（第178図、図版119・125）

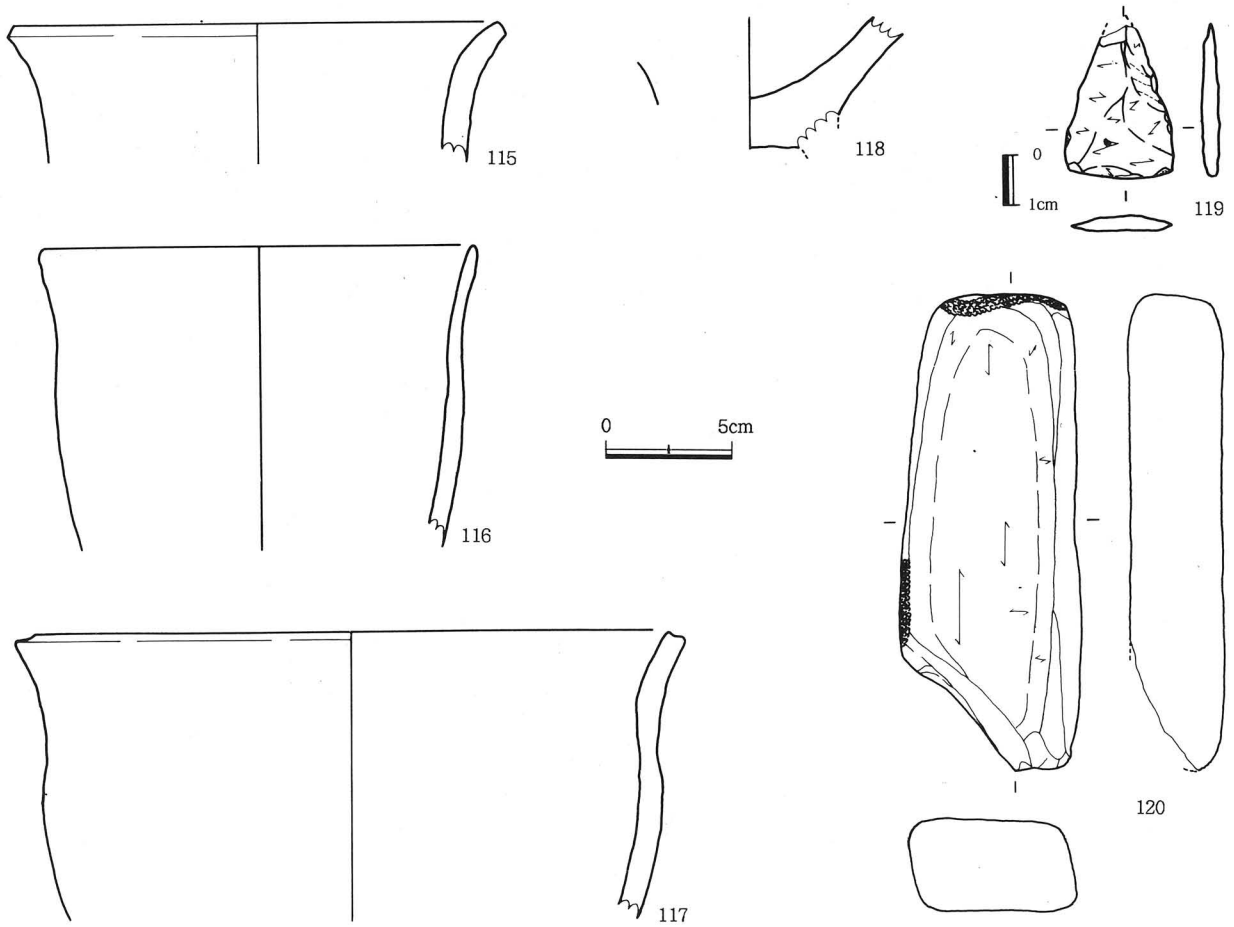
直径55～60cm、深さ12～18cmの2段掘りで、完形の坩が出土した。

3号土坑（第178図、図版119・125）

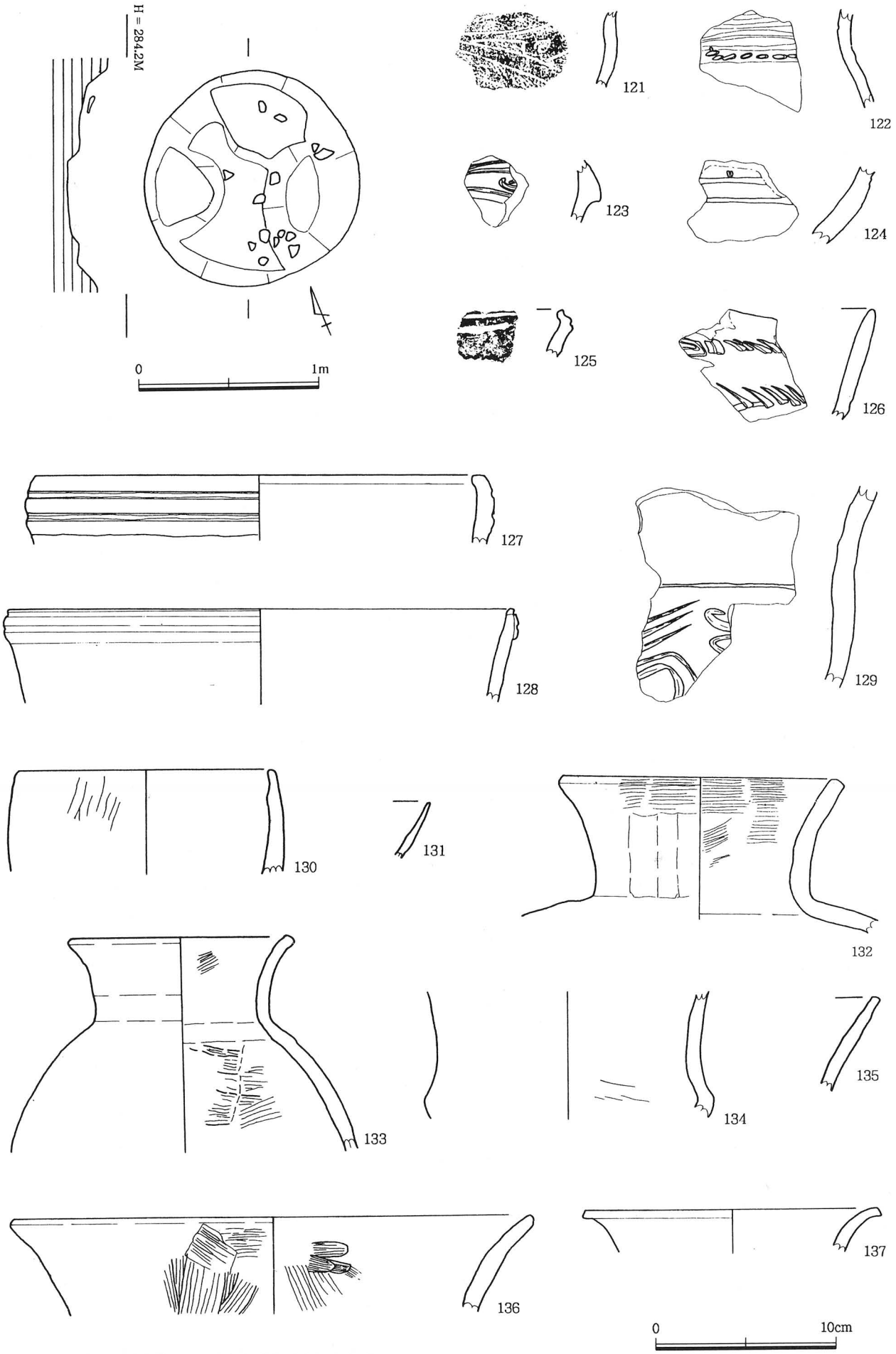
直径64cmの略円形、深さ16～18cmの土坑で、縄文土器の底部と小型の鉢が出土した。

遺物包含層出土遺物（第188～191図）

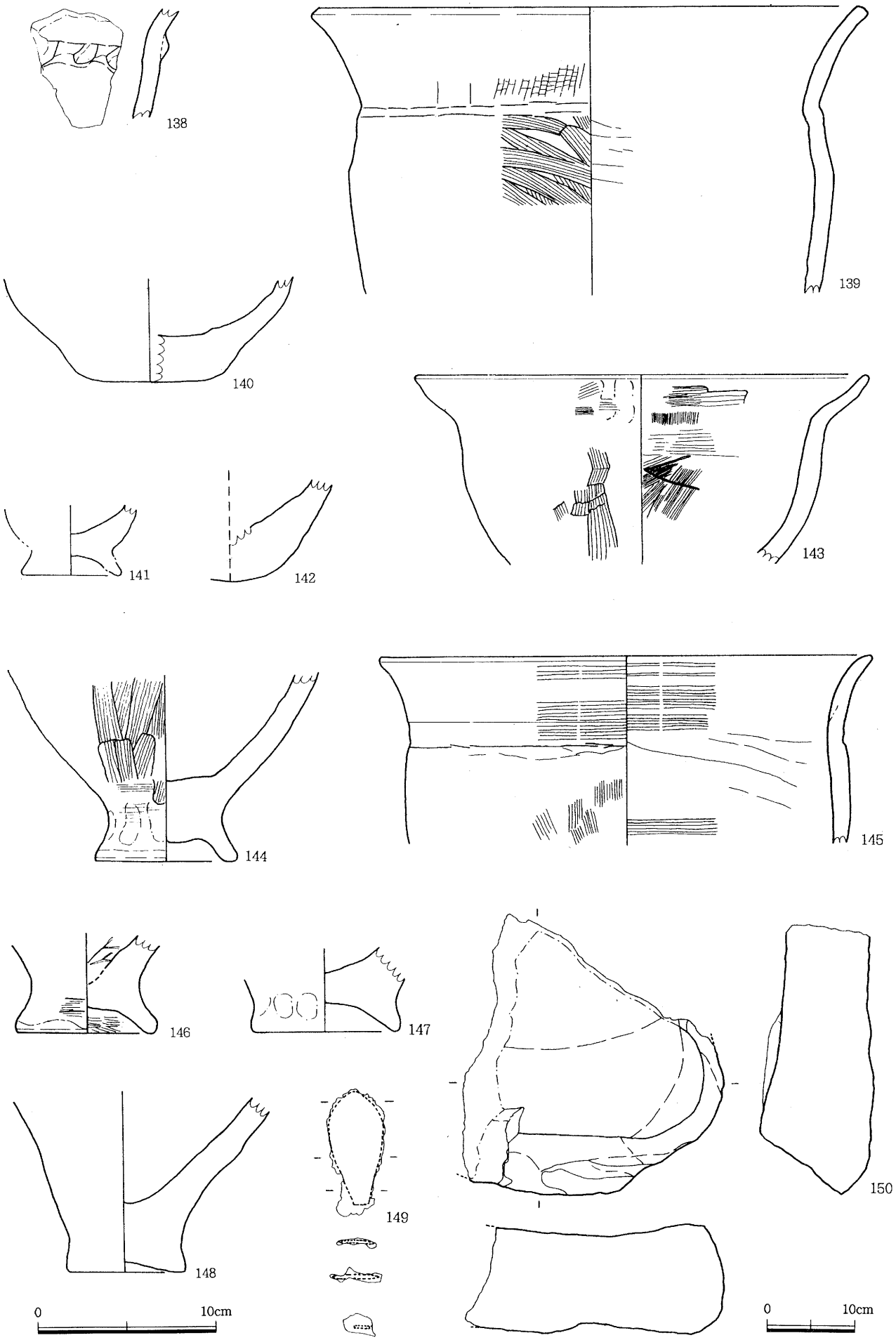
縄文土器に混ざって、多くの土器片が出土した。中には、免田式土器数点（**458～463**）がある。



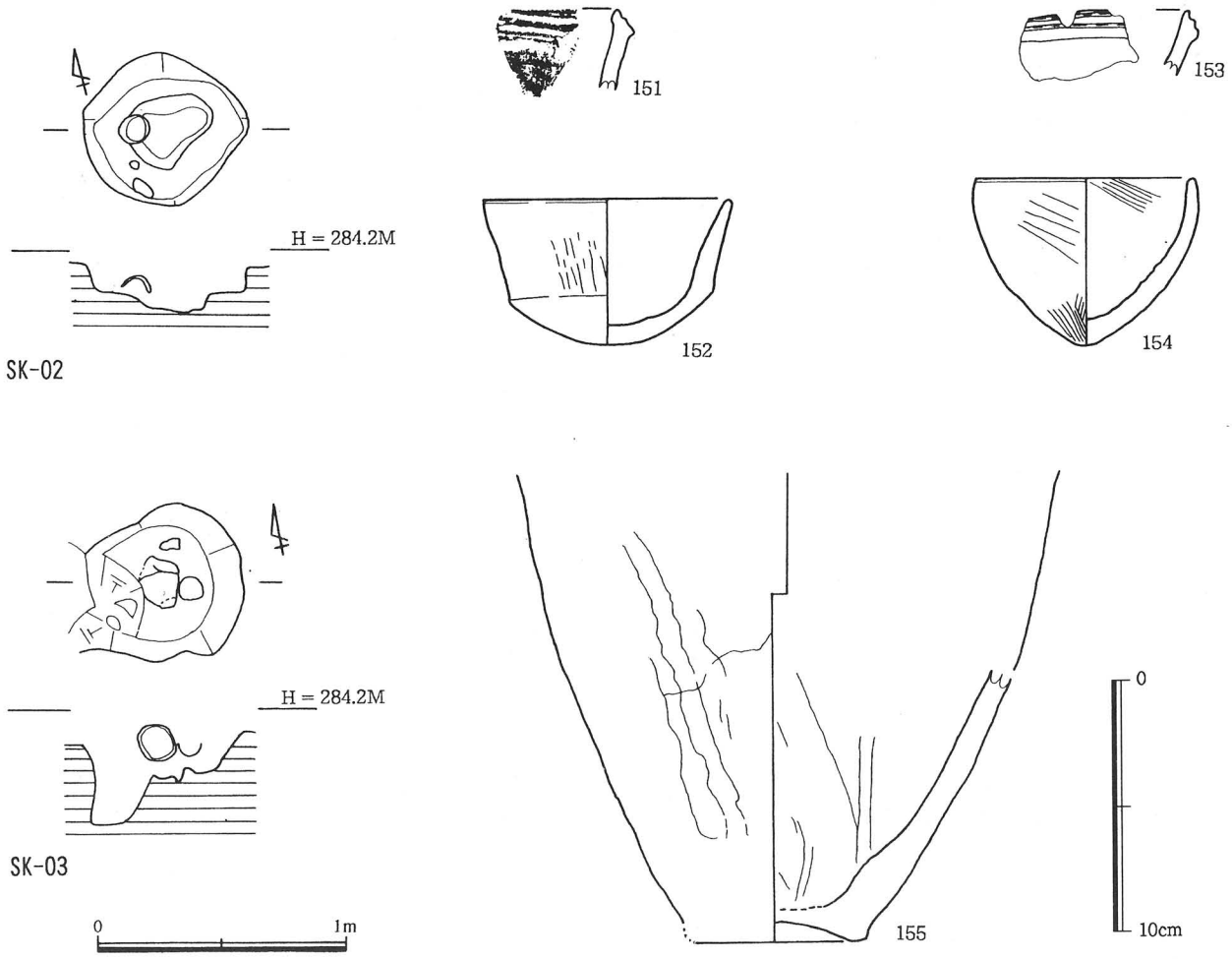
第175図　8号住居出土遺物実測図（2）



第176図　１号土坑および出土遺物実測図（１）



第177図　1号土坑出土遺物実測図（2）



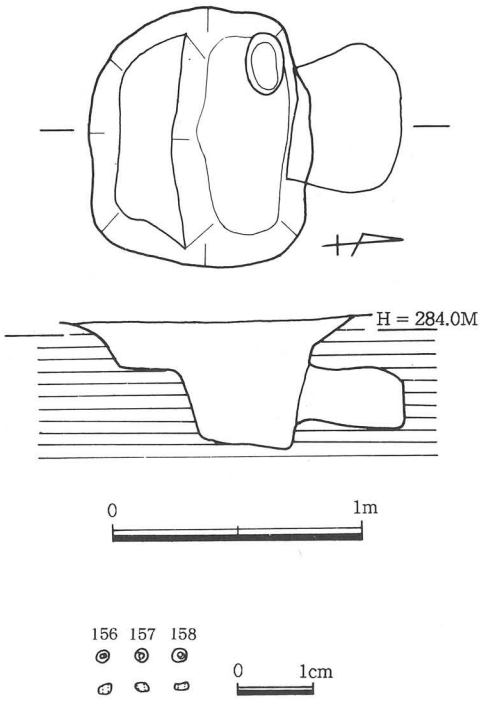
第178図　２・３号土坑および出土遺物実測図 151・152：SK-02

５．古墳時代

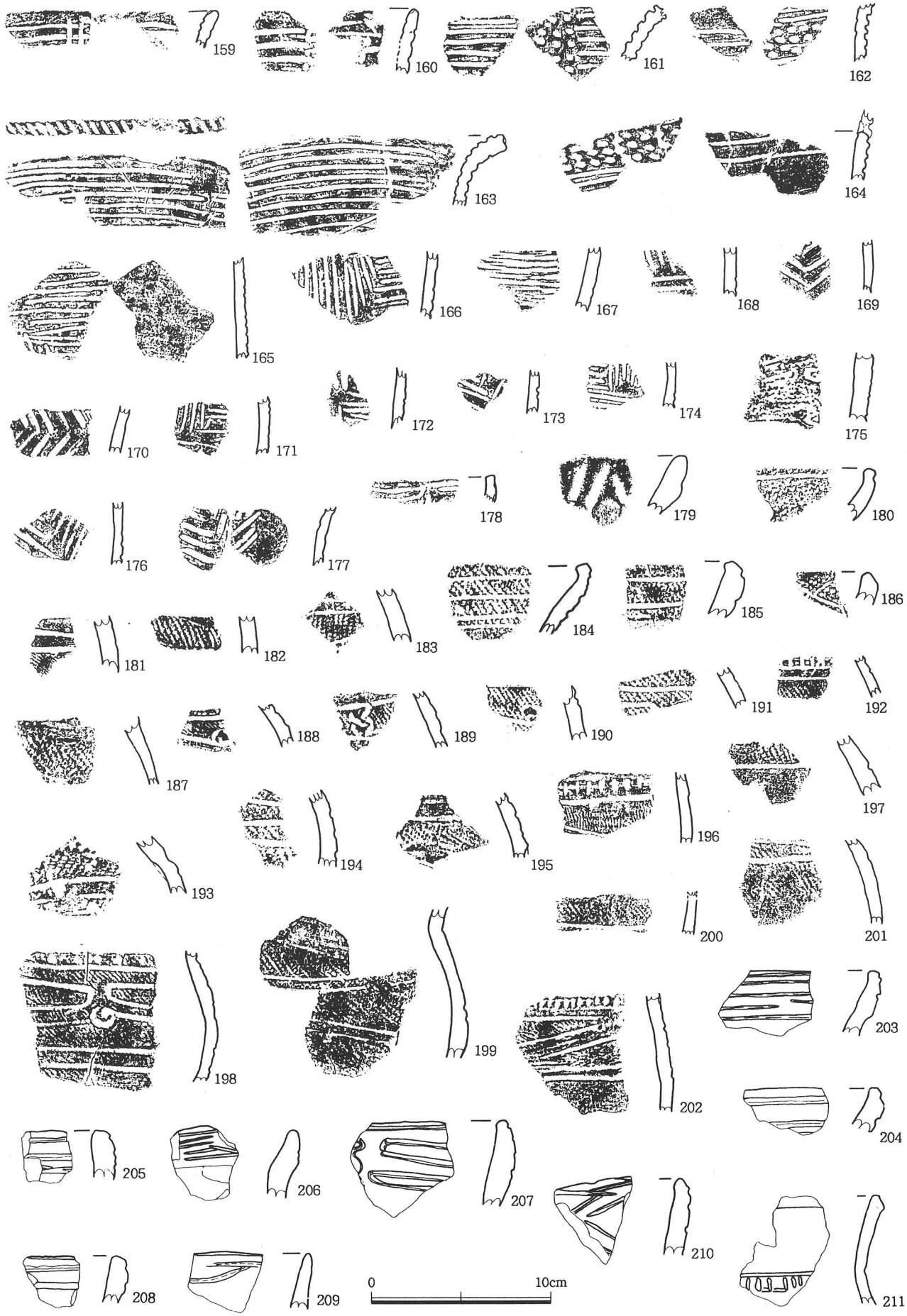
６号住居の西３ｍの地点で、地下式横穴墓１基を検出した（ST-01）。

１号地下式横穴墓（第179図、図版120）

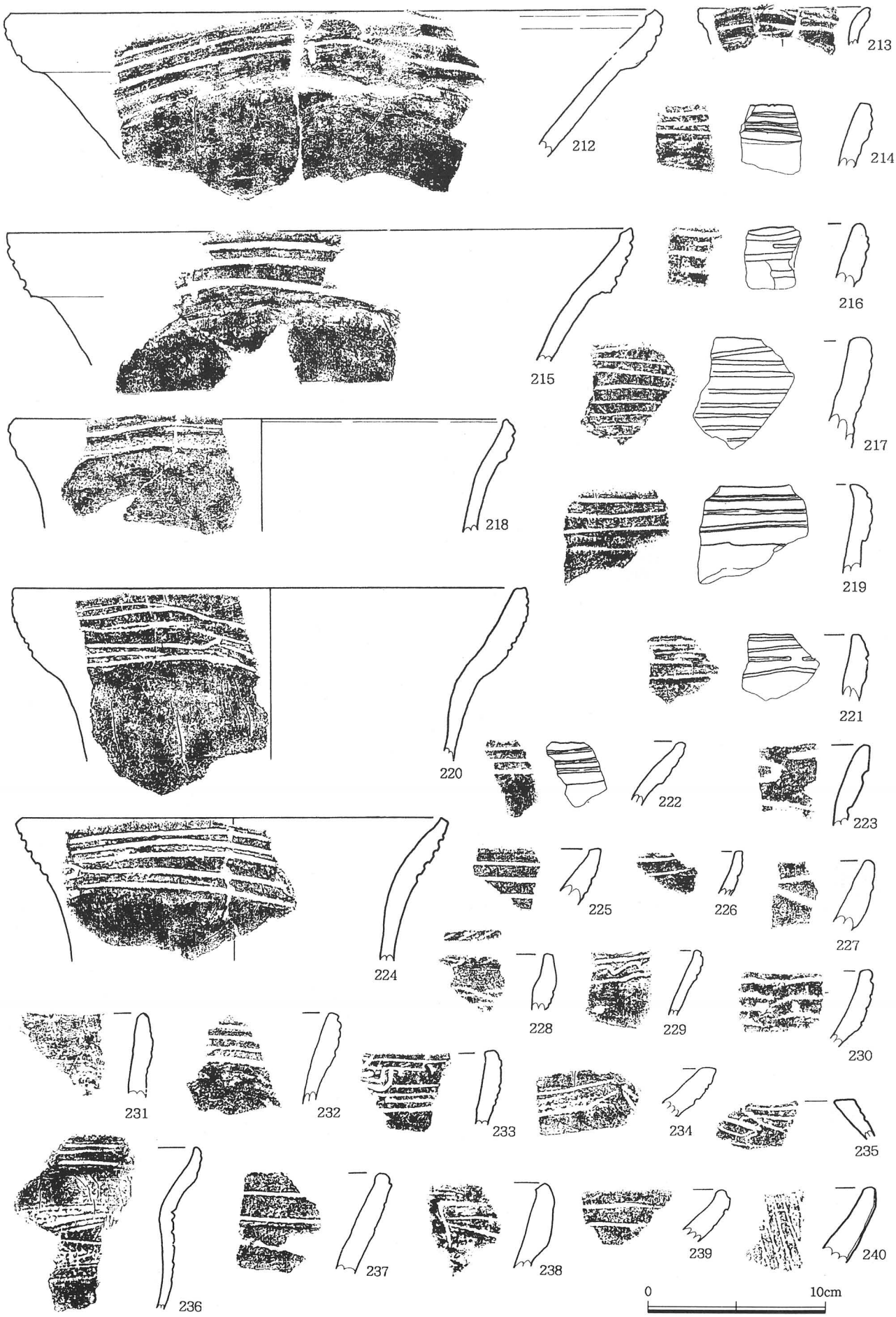
竪坑は、東西105cm・南北88cmの楕円形で、深さは15～46cmの２段掘りである。２段目底面は、長さ76cm・幅30cm内外である。覆土は、挙大のアカホヤ塊と黒色土が混じる。羨道および閉塞材は無く（板閉塞）、20cm高い玄室は平入りで、幅57cm・奥行き46cm・高さ28cmの楕円形を呈し、天井はやや円みがある。玄室内は黒色土が充填し、人骨も遺存していなかったが、床面から青色のガラス玉３点を検出した。追葬痕が無いことと玄室の規模から、小児単葬墓と考えられる。



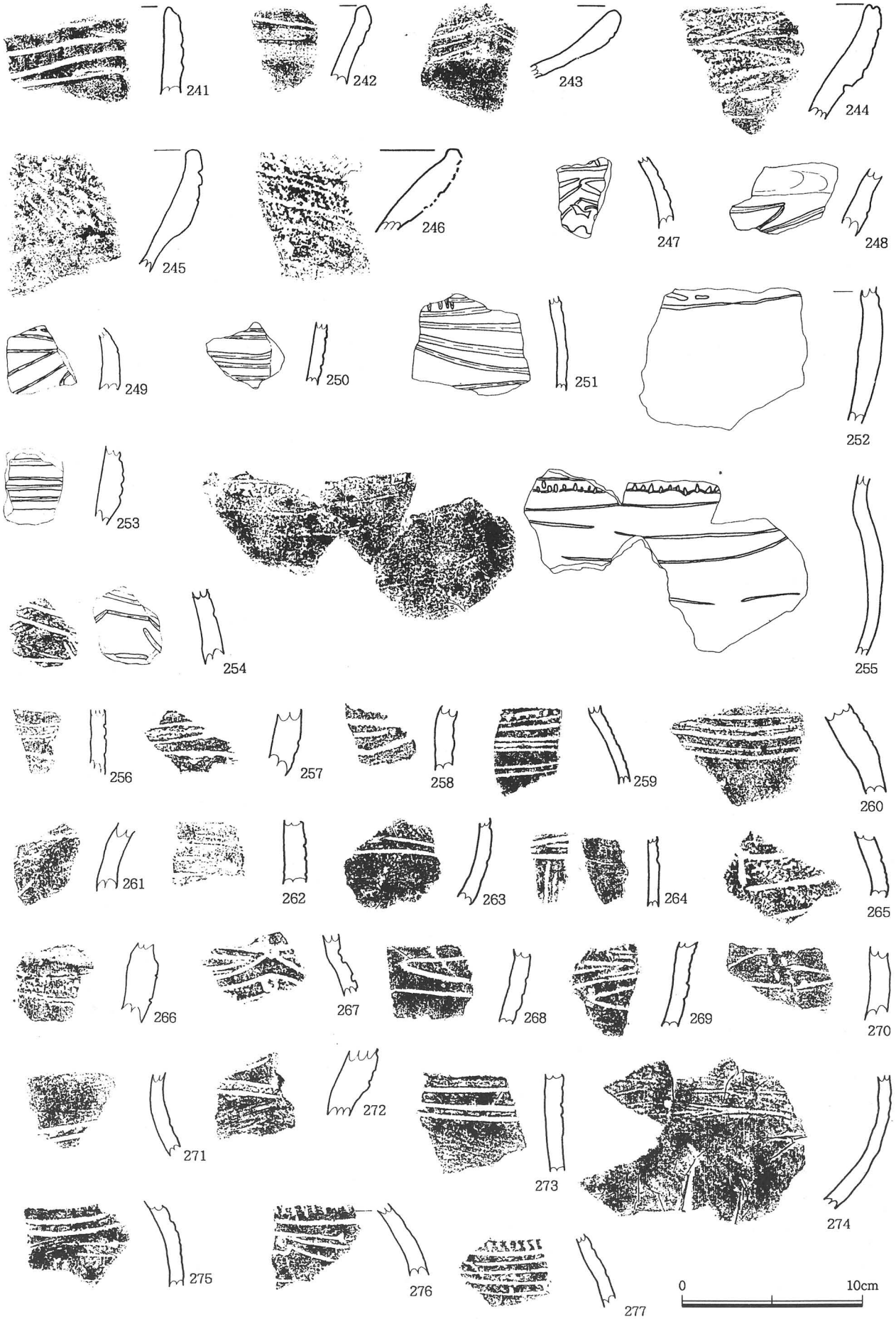
第179図　１号地下式横穴墓および出土遺物実測図



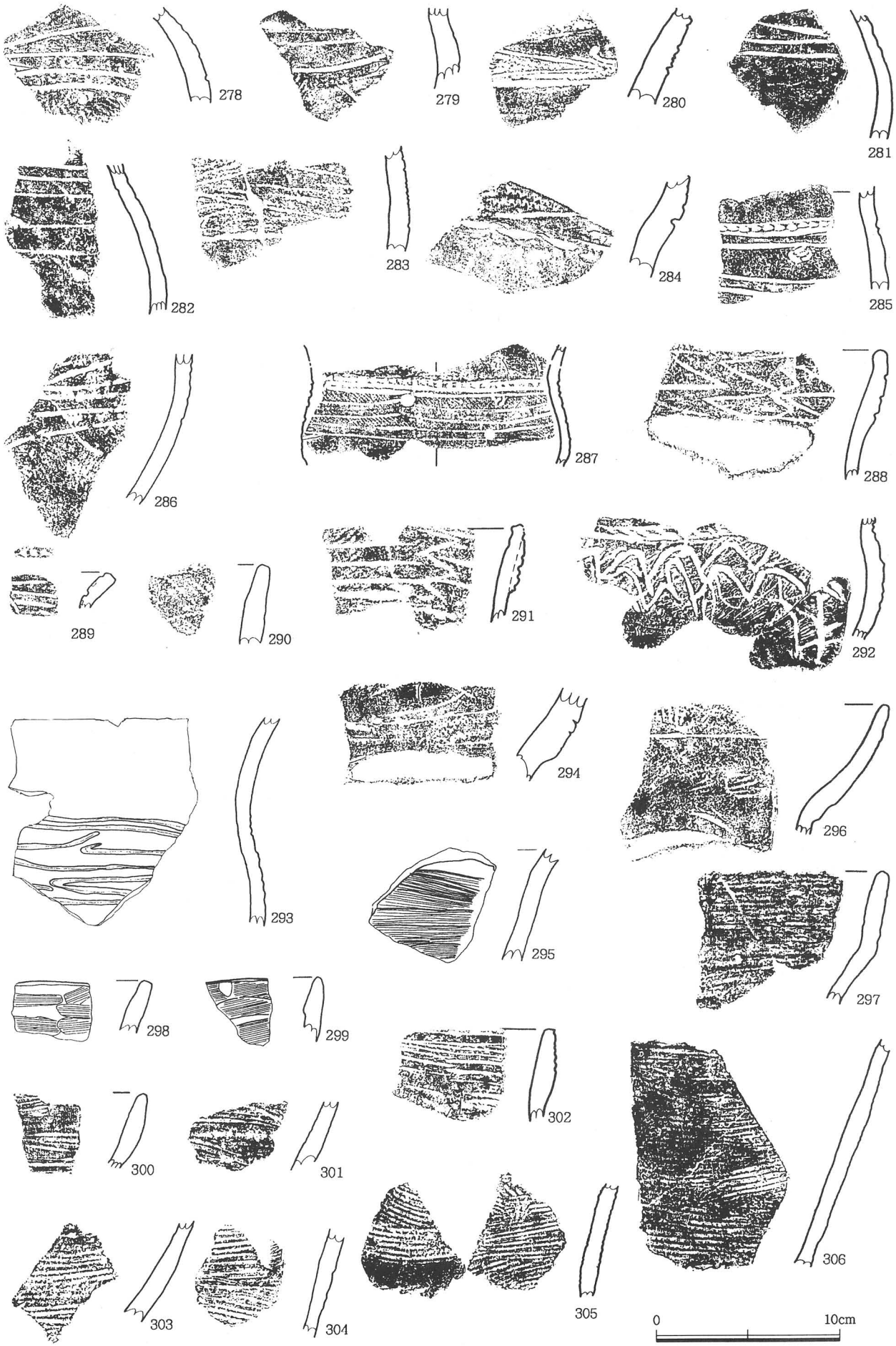
第180図　Ⅲ層出土縄文土器実測図（1）



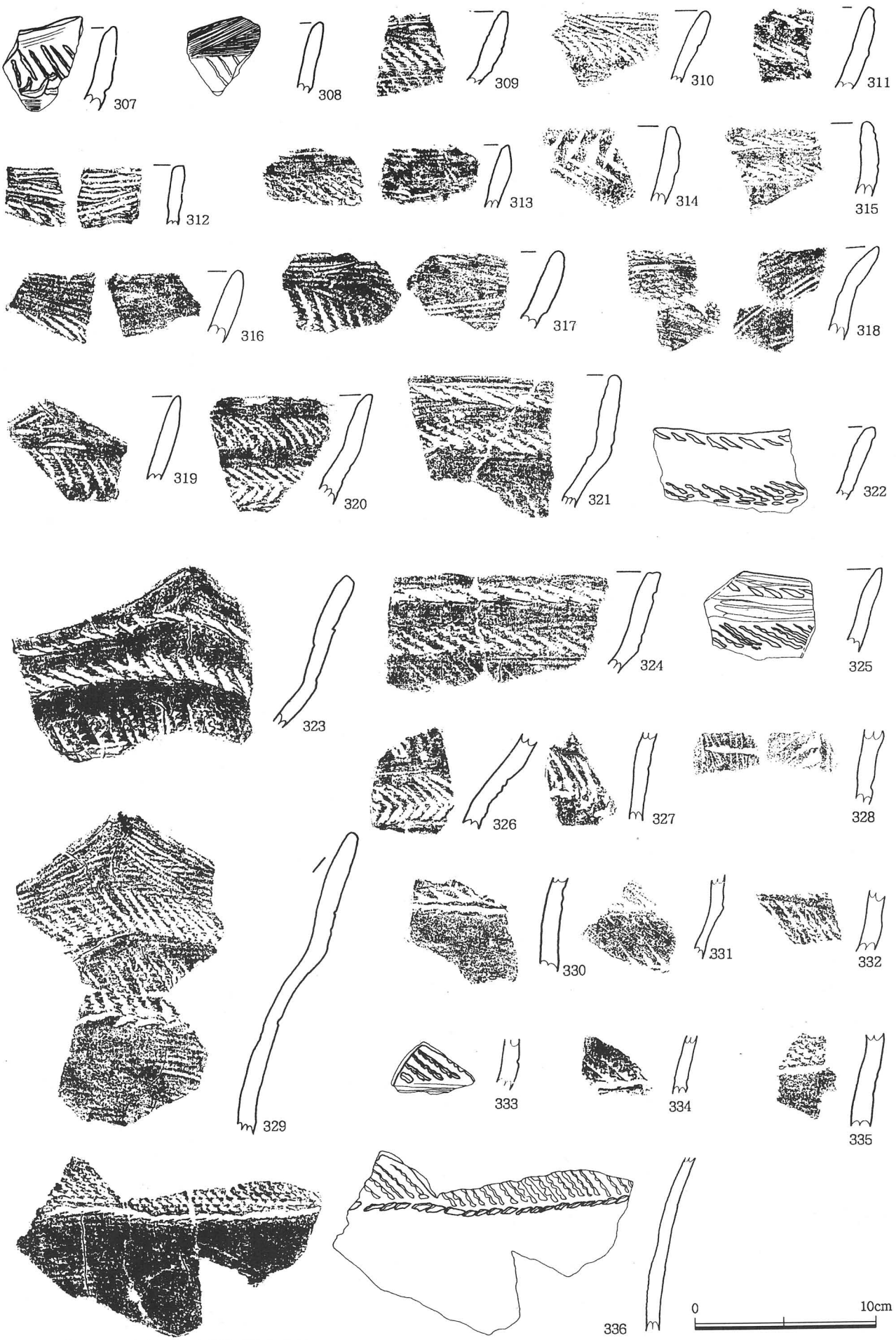
第181図　Ⅲ層出土縄文土器実測図（2）



第182図　Ⅲ層出土縄文土器実測図（3）

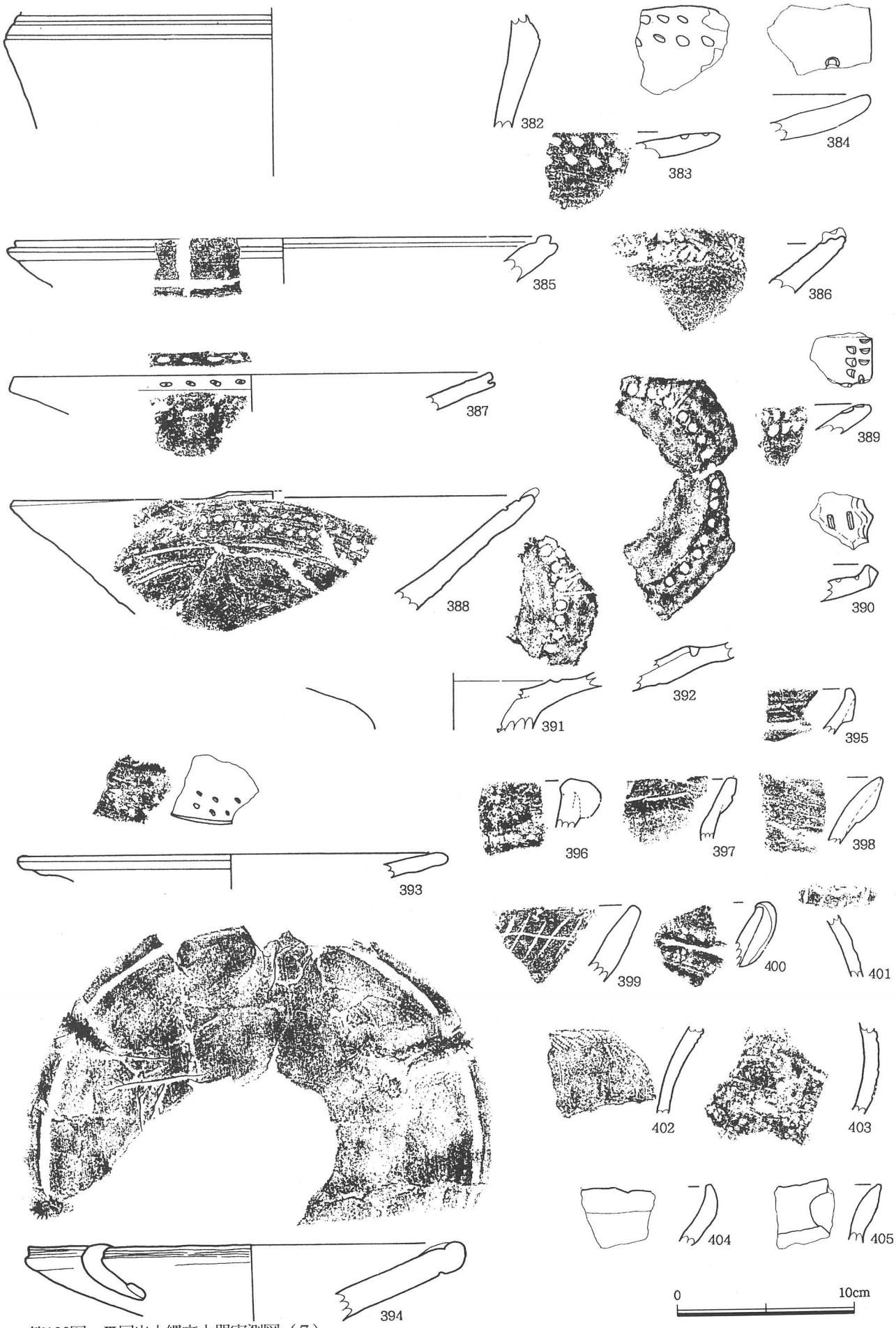


第183図　Ⅲ層出土縄文土器実測図（4）

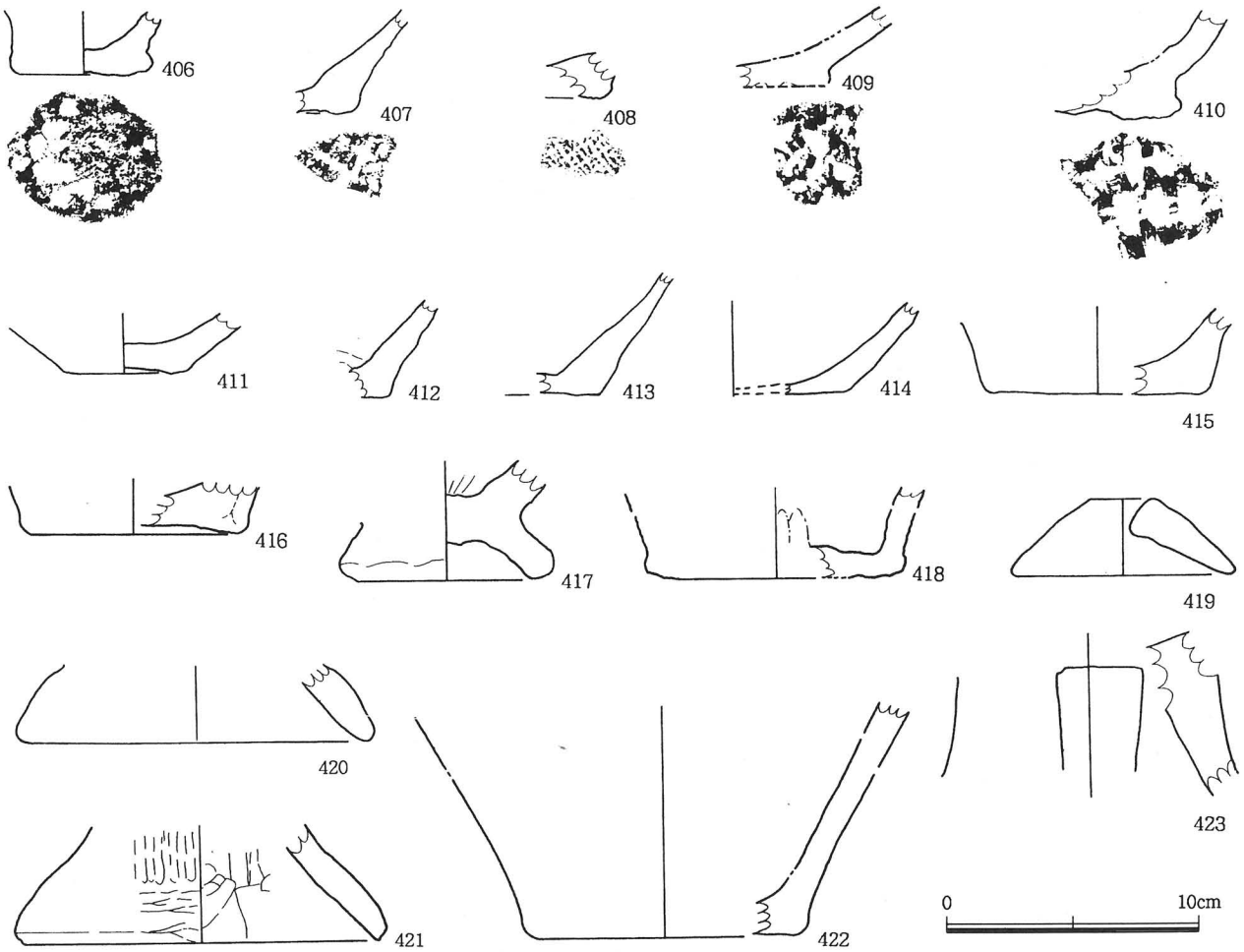


第184図　Ⅲ層出土縄文土器実測図（5）

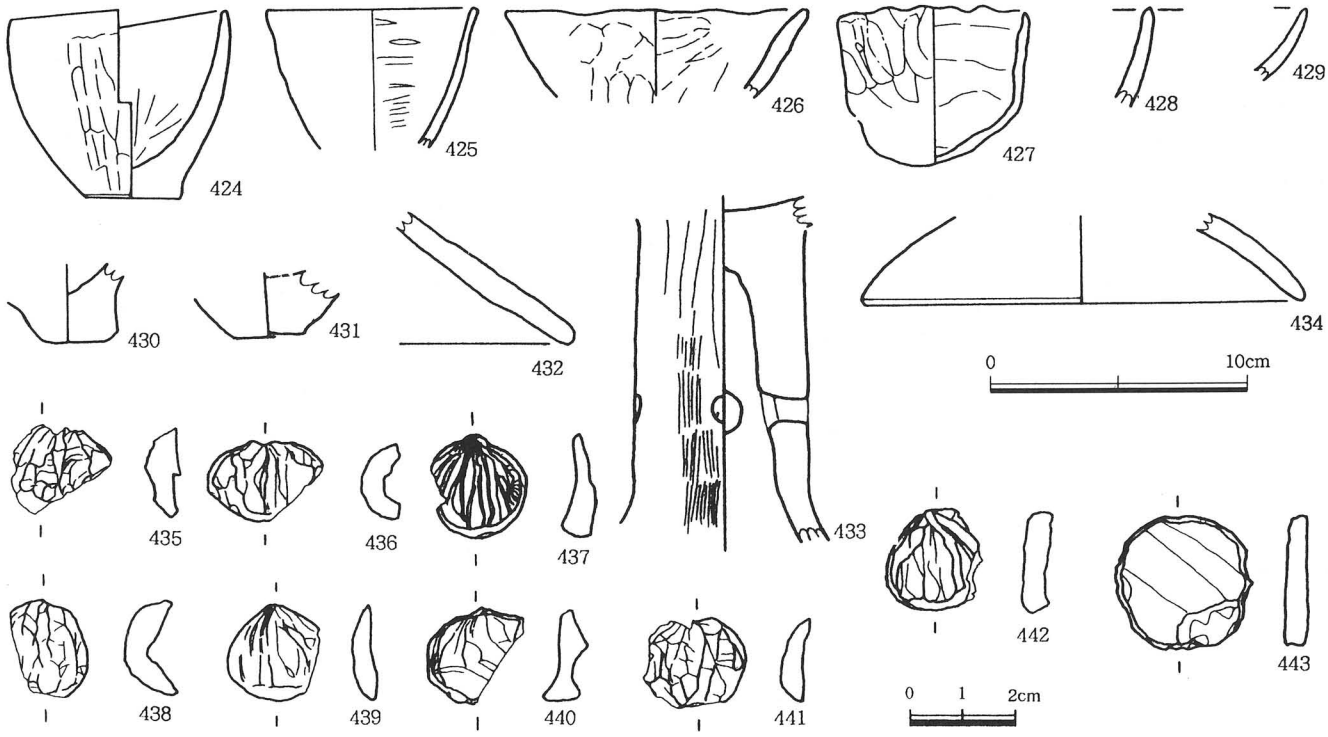
第185図　Ⅲ層出土縄文土器実測図（6）



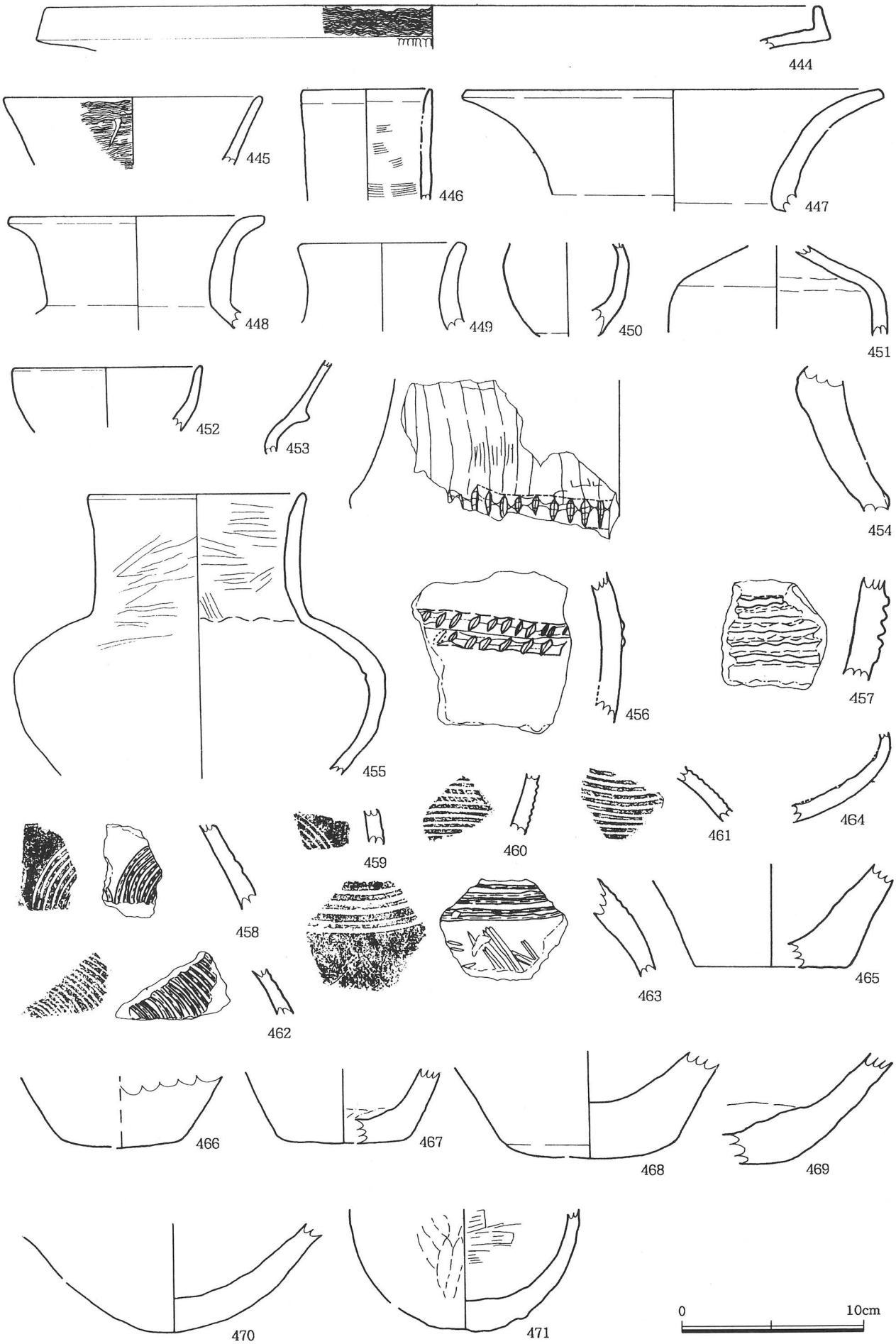
第186図　Ⅲ層出土縄文土器実測図（7）



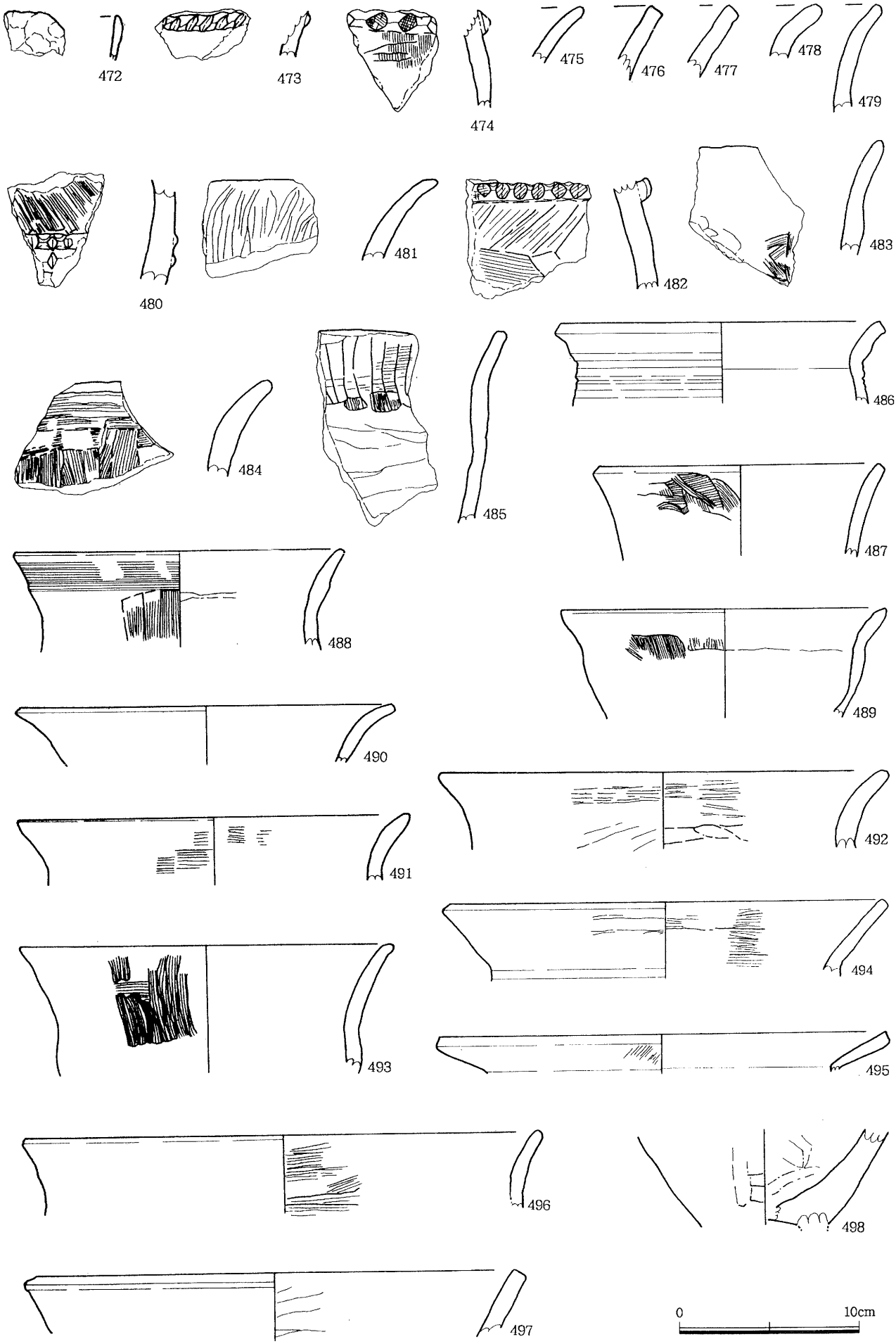
第187図　Ⅲ層出土縄文土器実測図（8）



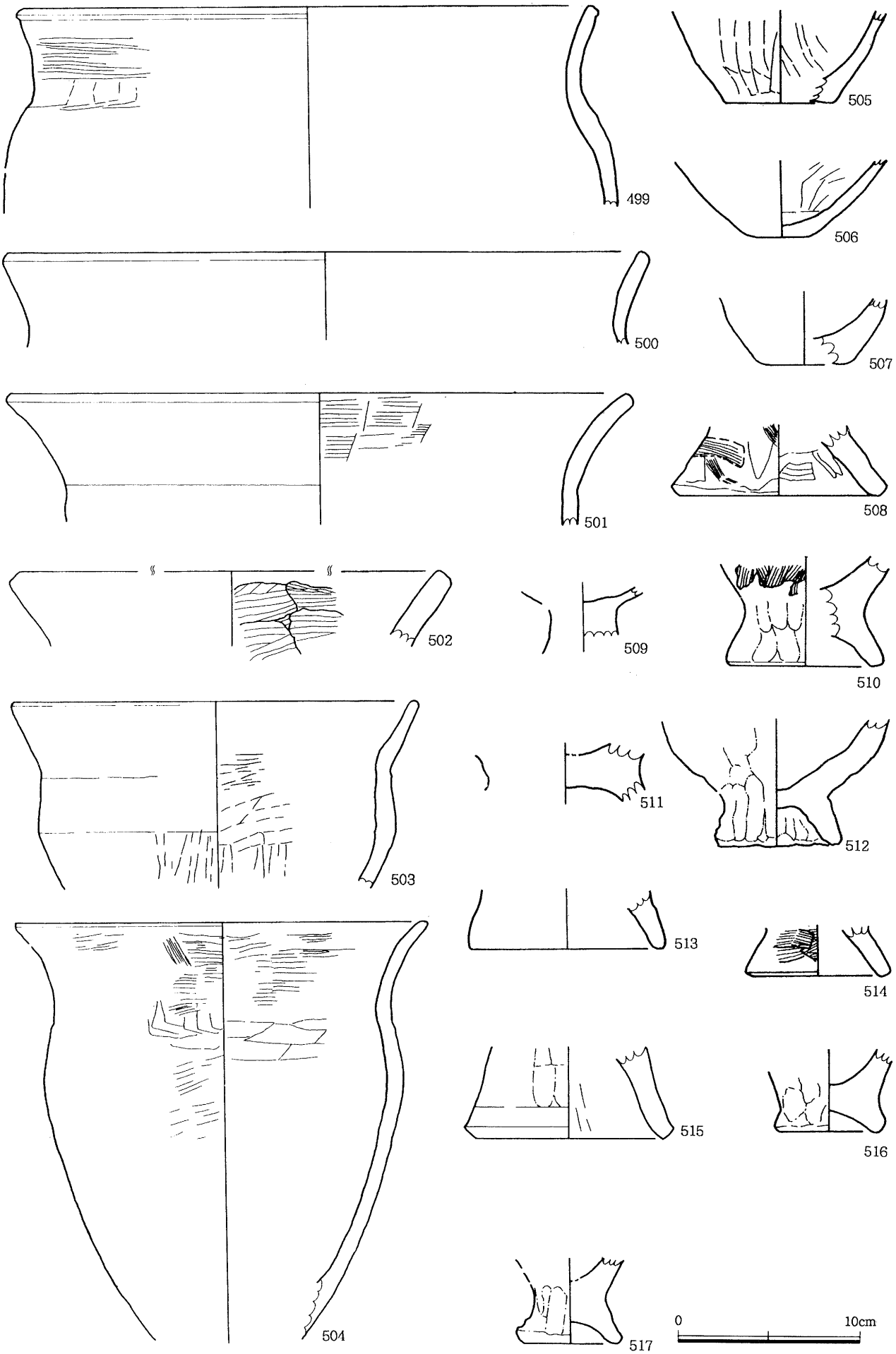
第188図　Ⅲ層出土遺物実測図（1）　小型土器・高杯・土製円盤・炭化栗



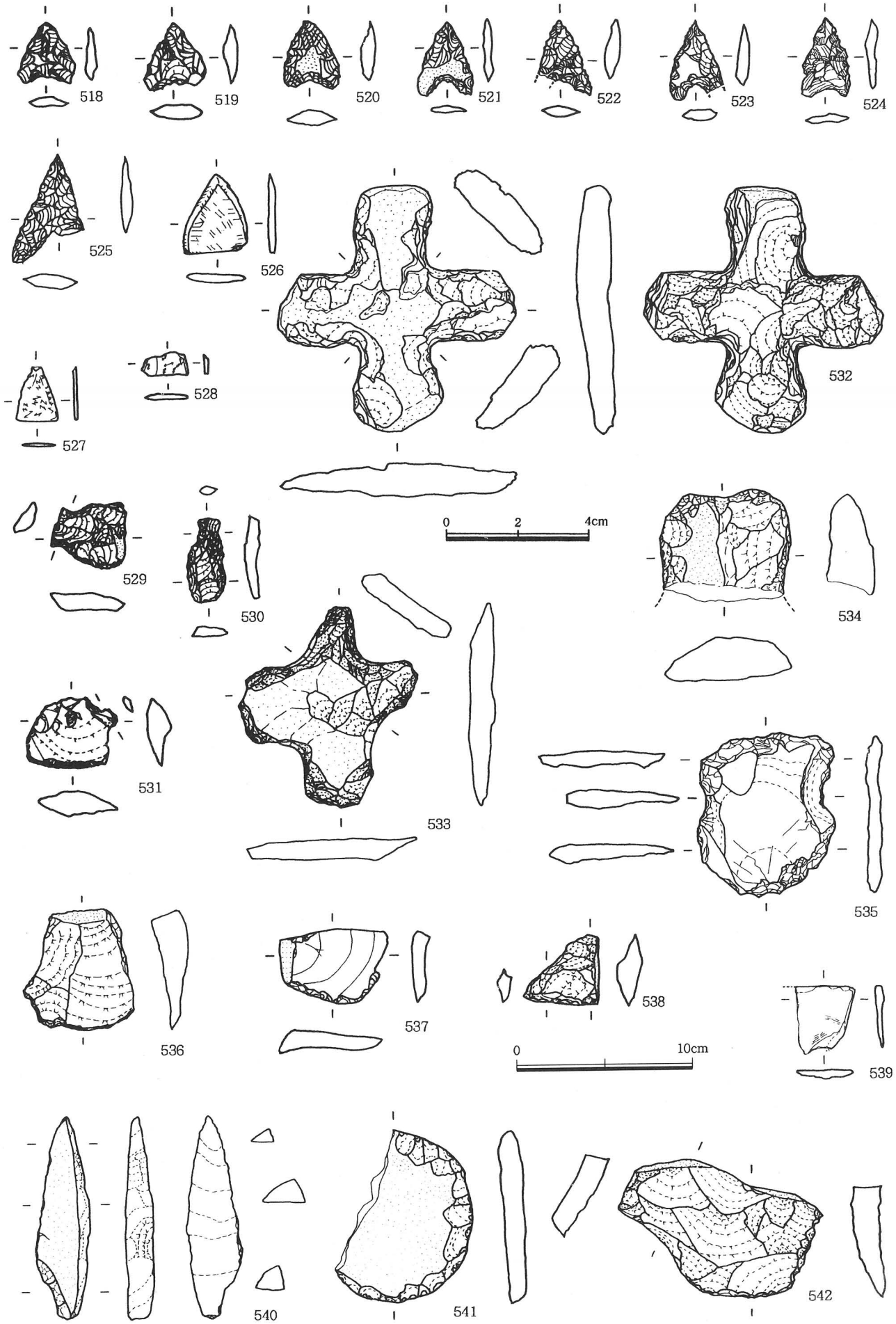
第189図　Ⅲ層出土遺物実測図（2）　弥生土器・古式土師器・壷類



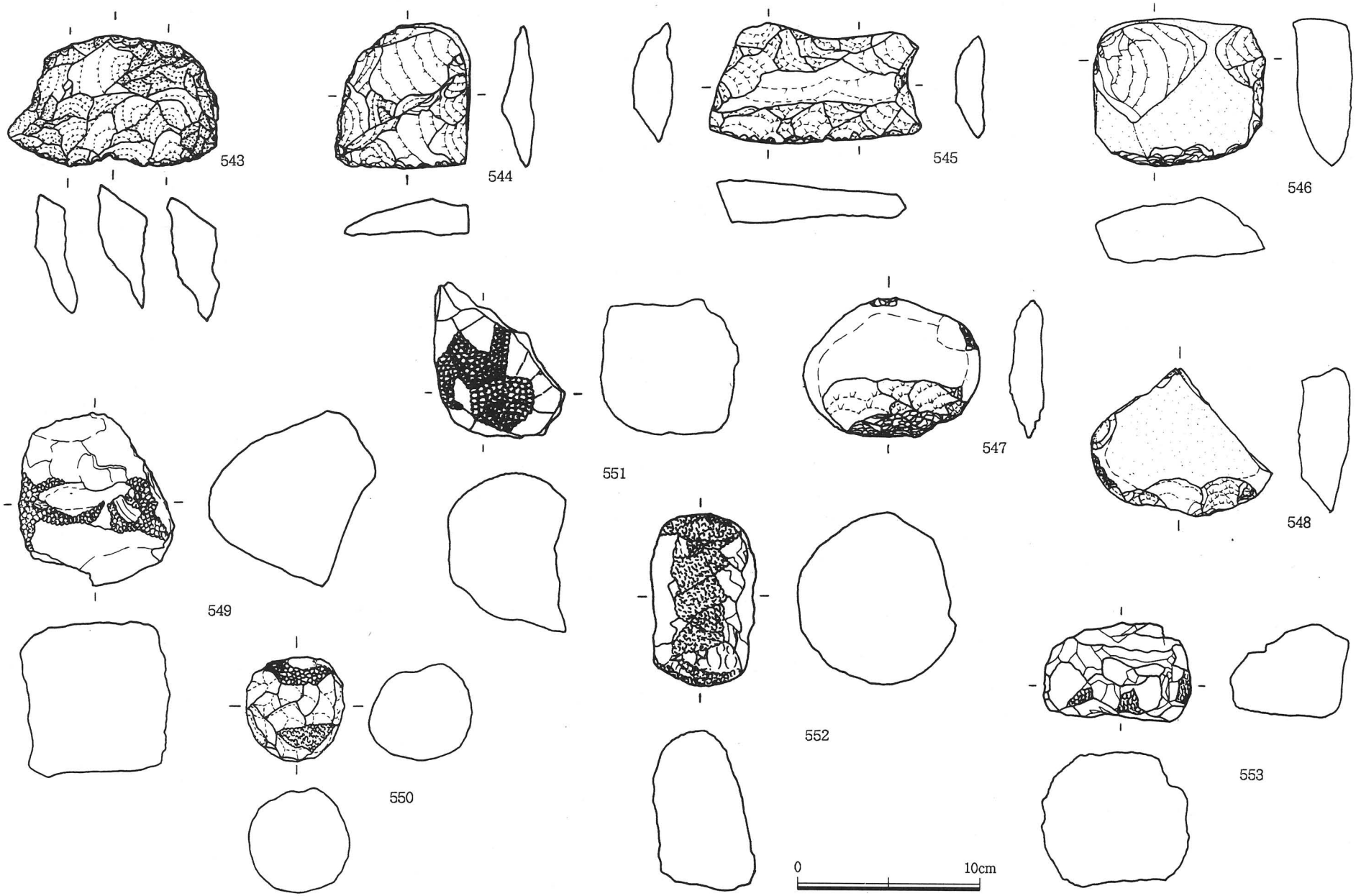
第190図　Ⅲ層出土遺物実測図（3）　弥生土器　甕類（その1）



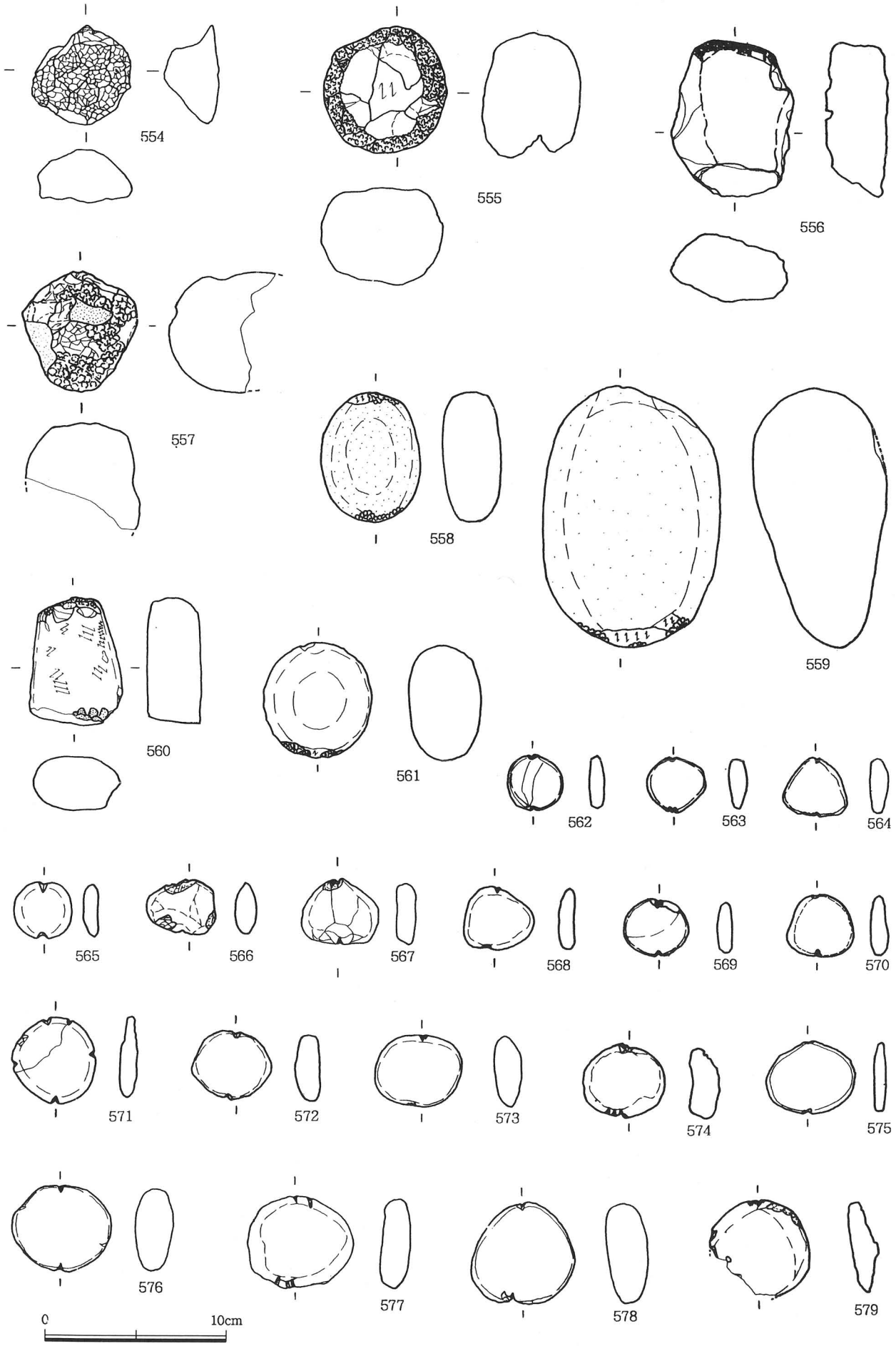
第191図　Ⅲ層出土遺物実測図（4）　弥生土器　甕類（その2）



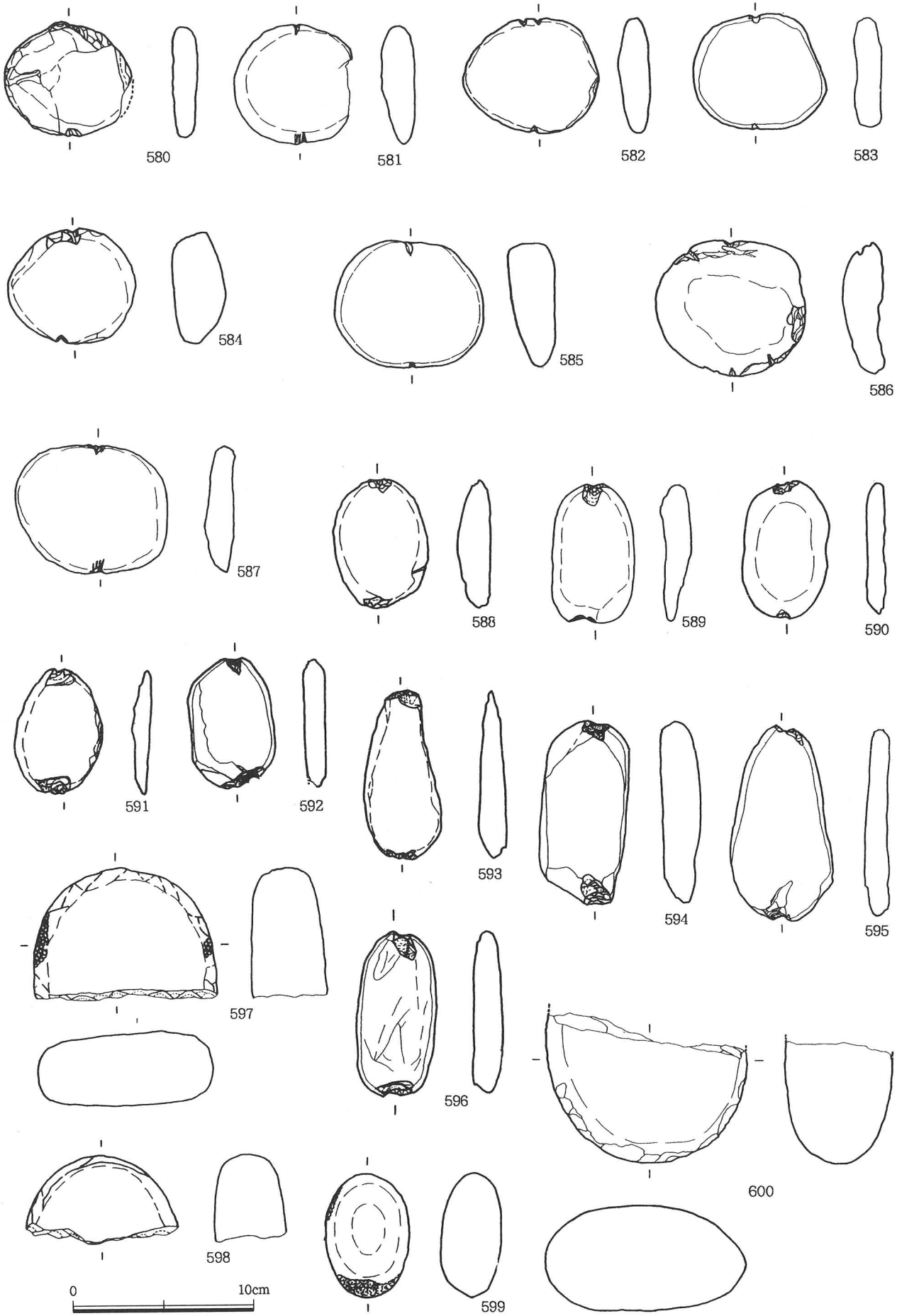
第192図　調査区出土石器実測図（1）　石鏃・十字型石器・石匙・刃器・スクレイパー・石包丁



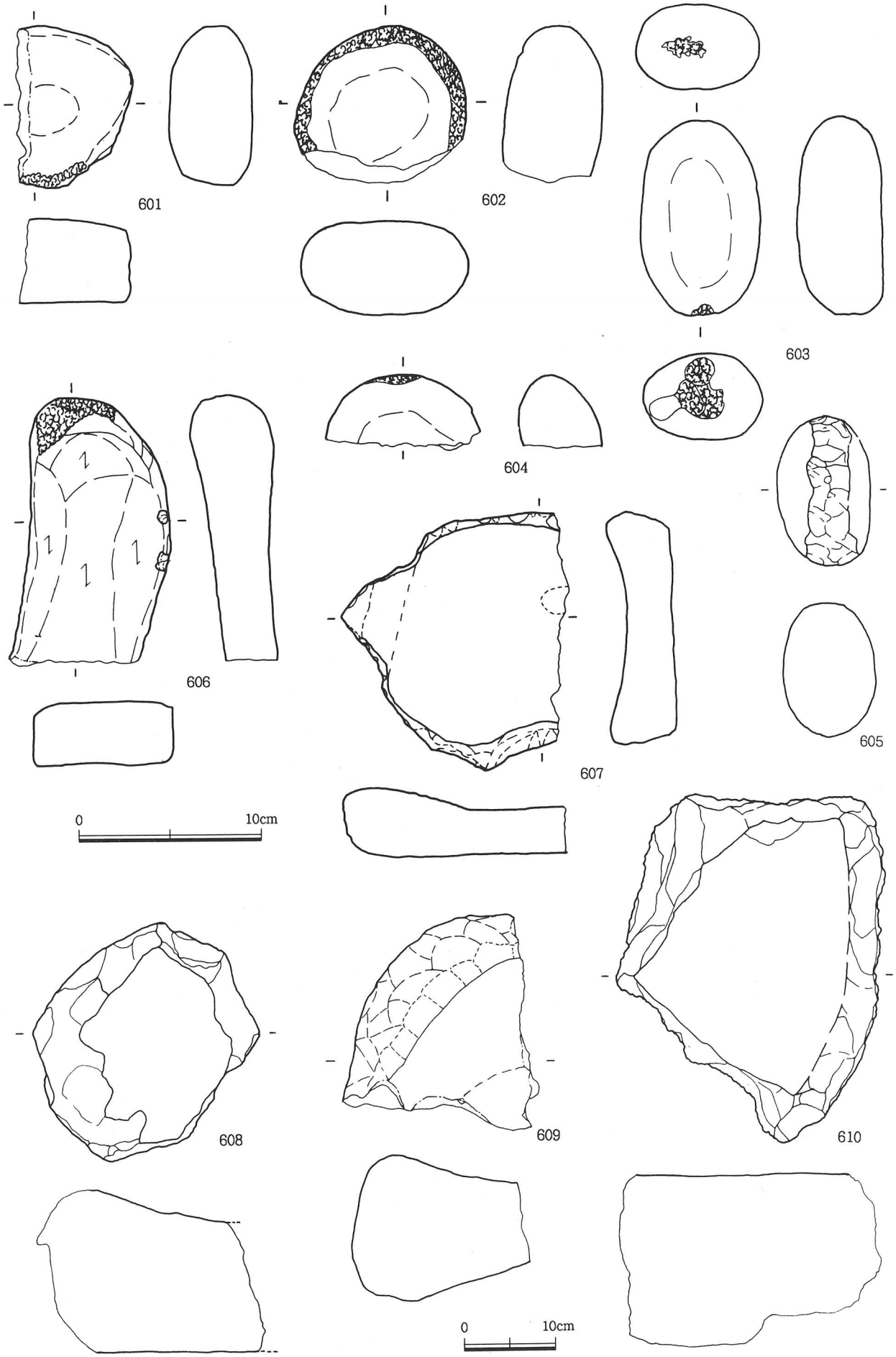
第193図　調査区出土石器実測図（2）　スクレイパー・礫器・敲き石（その1）



第194図　調査区出土石器実測図（3）　　敲き石（その2）・石錘（その1）



第195図　調査区出土石器実測図（4）　石錘（その2）・すり石（その1）



第196図　調査区出土石器実測図（5）　すり石（その2）・砥石・石皿・台石（607・609は2号住居出土）

6．平安時代～中世

調査区の東南壁沿いにおいて、幅１～1.5m以上・深さ７～16cmの溝状遺構を検出した。出土遺物としては、微細な土師器片が少量ある。

7．まとめ

１～３号住居周辺の遺物包含層は厚く、遺構覆土も黒色系であったことから遺構上部10～15cmは遺物包含層として掘り下げている。結果的に３号住居などは痕跡程度になってしまった。

当遺跡においては、縄文時代前期の曽畑式土器が若干出土した。当時の集石に使用された焼石が遺物包含層に相当量含まれている。中期は断絶するが、後期に盛行し、竪穴住居が構築される。晩期～弥生時代中期までは再度断絶があり、後期に花弁状住居を構築する集落が営まれる。集落は古墳時代前期には廃絶するが、掘立柱建物も並立していたようである。古墳時代後期には、地下式横穴墓１基（小児用）が構築されるのみで、以後、土地利用が始まるのは中世頃からである。

Ⅴ．竹之内遺跡の調査

1．はじめに

台地の西南部に広がる遺跡で、大部分が削平されてしまうことから、平成６年８月31日に調査に着手し、10月７日までにⅠ～Ⅵ区（約2,800㎡）の発掘調査を、残りのⅦ・Ⅷ区（約9,900㎡）を平成７年１月９日から２月17日まで調査した（第197～201図）。

遺構は、古墳時代と平安～近代までのものがあり、平成７年２月13日に完掘した後、自然流路２条と、基盤層（Ⅳ層、遺物包含層）の掘り下げを、Ⅷ区中央北部において実施した。

調査面は１枚で、古墳時代の竪穴住居１軒、小型の方形竪穴５基のほか掘立柱建物跡２棟を含む柱穴群や円形土坑など、平安時代以降の掘立柱建物跡100棟を含む柱穴約3,000基ほか、竪穴状遺構７基、長方形土坑、円形土坑、溝状遺構、溜井、井戸などを検出した。

2．基本的層序

層序は上から、Ⅰ層：水田耕作土、Ⅱ層：床土、Ⅲａ層：暗茶灰～淡黒灰色土、Ⅲｂ層：黒～黒灰色土、Ⅳ層：淡黄褐色土、Ⅴ層：アカホヤ火山灰に分別した。層序は上田代遺跡と同じであるがⅣｂ層の黒色系の土は存在しない。反面、層厚は同じ位である。

遺構覆土が灰色系であれば近世～近代、Ⅲａ層であれば室町時代、Ⅲｂ層であれば鎌倉時代、Ⅲｂ層＋Ⅳ層上層もしくは茶灰色系であれば７世紀頃から平安時代、さらにⅣ層近似層であれば古墳時代の遺構と分類できる。

3．縄文時代（第240図、図版157）

遺構は発見されなかったが、若干の遺物が出土している。４号自然流路から轟式系の土器（**188**）が、溝状遺構覆土やⅣａ層からは縄文時代後期を主とする土器や石鏃、石錐、石匙、石斧、すり石、石皿が出土している。

4．弥生時代（第240・241図、図版158）

遺構は検出されなかったが、点々と遺物が出土した。中期の黒髪式土器が主であるが、磨製石鏃なども出土している。

5．古墳時代

竪穴住居１軒と、掘立柱建物２棟、小型方形竪穴６基、円形土坑のほか、自然流路６条がある。

１号竪穴住居（第202図、図版147・154）

東西2.7ｍ、南北3.5～3.64ｍの隅円長方形を呈し、深さは18cmである。柱穴は、直径20～26cm、深さ５～25cmで、３隅と東部中央にある。中央pitは、長さ63cm・幅40cm・深さ８cmである。

出土遺物は若干の土師器と、長さ20～30cmの炭化材５点がある。

４号掘立柱建物跡（第203図）

梁行２間（2.73m）、桁行３間（4.55m）で、中間が狭い。主軸方位は、N71°Ｅである。平安時代までの時期幅がある。

５号掘立柱建物跡（第203図）

梁行１間（4.07m）、桁行２～３間（4.24m）と推定され、主軸方位は、S82°Ｅである。平安時代までの時期幅がある。

１号土坑（**SK-01**、第204図、図版147・154）

東西1.7m、南北1.36mの隅円長方形で、深さ30cmである。中央やや西寄りに、直径20cm・深さ５cmの柱穴状掘り込みがある。その東側には、須恵器の台付鉢が付せた状態で検出された。

２号土坑（第204図、図版148）

一辺1.7mの隅円方形の南東辺中央に、長さ86cm・最大幅66cmの入口的スロープが付設されている。深さは30cmで、柱穴は無い。

３号土坑（第204図）

長軸２m、短軸1.6mの不定形で、南西部に長さ104cm・幅64cmのスロープが付設されている。底面の深さは30cmで、南側中央に直径18cm・深さ50cmの小柱穴があるが、後世に属する可能性もある。覆土からは、土師器の細片が出土している。

26号土坑（第204図）

長軸2.28m、短軸1.2～1.84mの長方形で、南隅に長さ40cm・幅60cmのスロープが付設されている。柱穴は無い。

27号土坑（第204図）

東西２m内外、南北2.6mの略隅丸長方形で、南辺東寄りに長さ・幅1.28mの入口的掘り込みがある。北辺部には、直径32cm・深さ38cm、直径60cm・深さ37cmの柱穴がある。

29号土坑（第204図）

東西1.56m、南北1.5～1.8mの隅丸長方形で、南辺中央に長さ63cm・幅50cmのスロープが付設されている。床面の深さは17cmで、柱穴は無い。

42号土坑（図版154）

長軸96cm、短軸72cmの楕円形で、２段掘り、深さは８～16cmである。覆土から、土師器の甕半個体分が出土している。

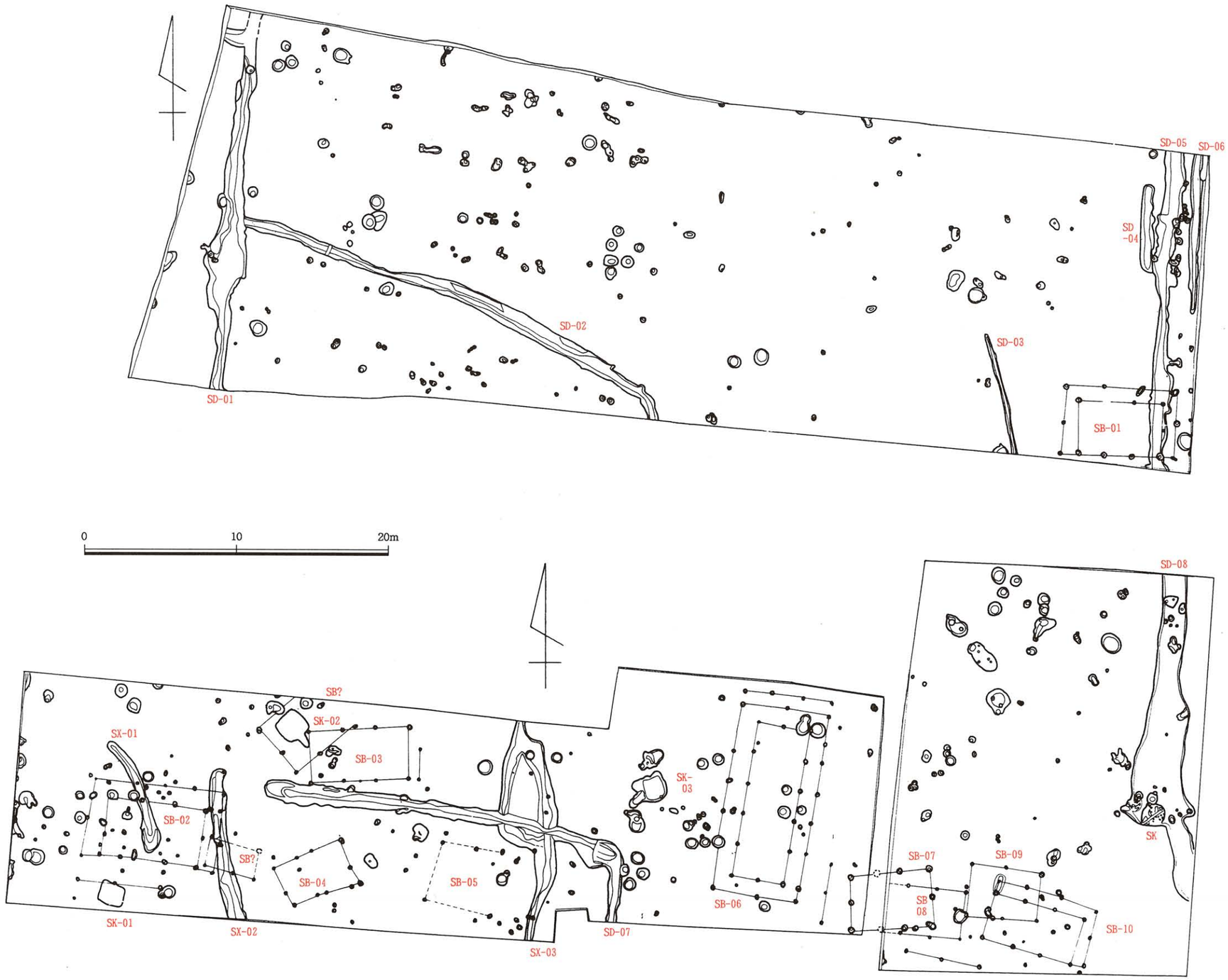
43号土坑（図版154）

長軸2.5m、短軸１～2.2mの不定形土坑で、深さは９～17cmである。覆土から、土師器の広口壷が出土している。

１号自然流路

長さ約８m・幅0.5～1.2m・深さ８cmで、彎曲している。

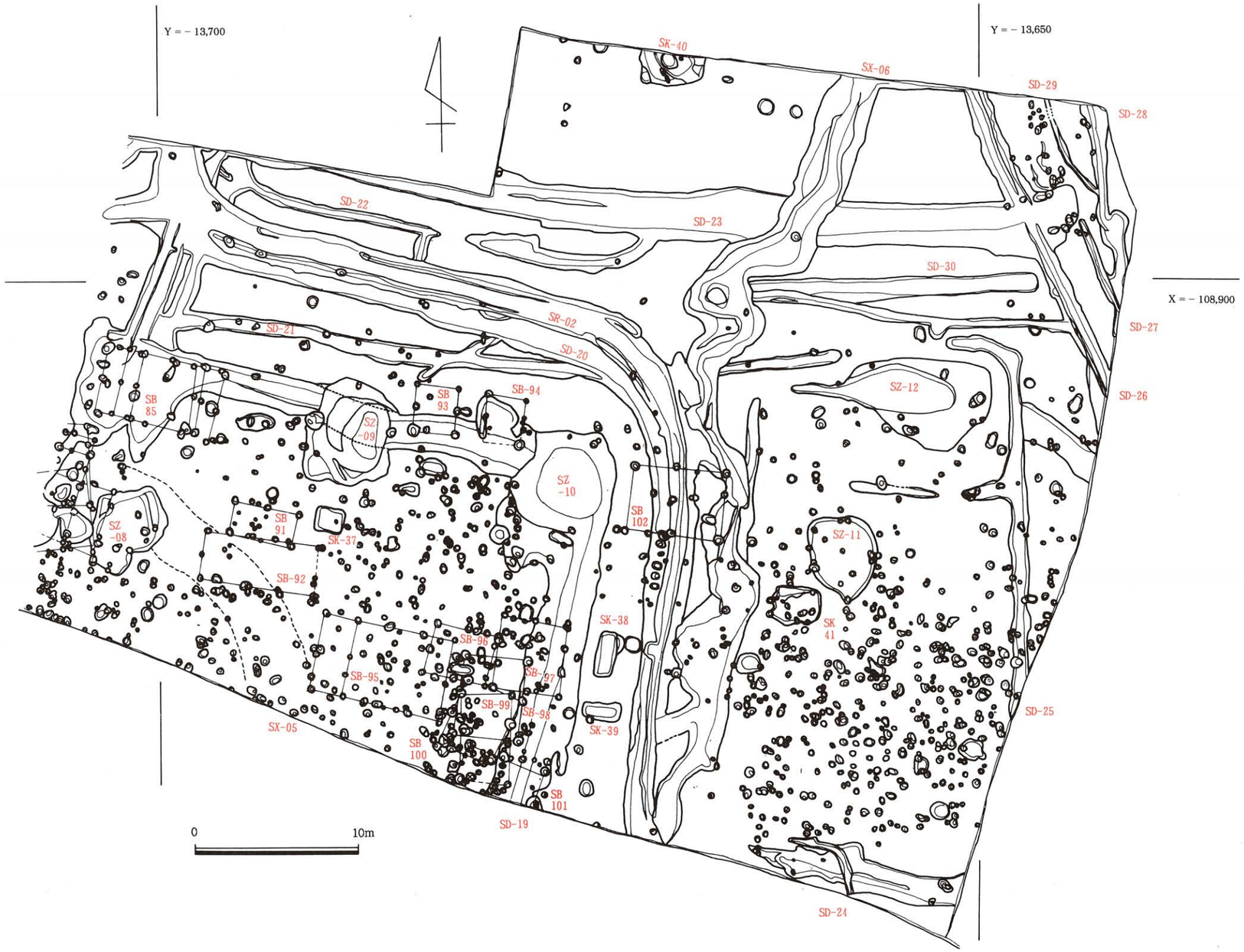
第197図　竹之内遺跡　遺構分布図　　朱色は古墳時代



第198図　Ⅰ～Ⅵ区　遺構分布図

第199図　Ⅶ区　遺構分布図

第200図　Ⅷ区西半部　遺構分布図



第201図　Ⅷ区東半部　遺構分布図

2号自然流路

幅80～125cm・深さ３～10cmである。

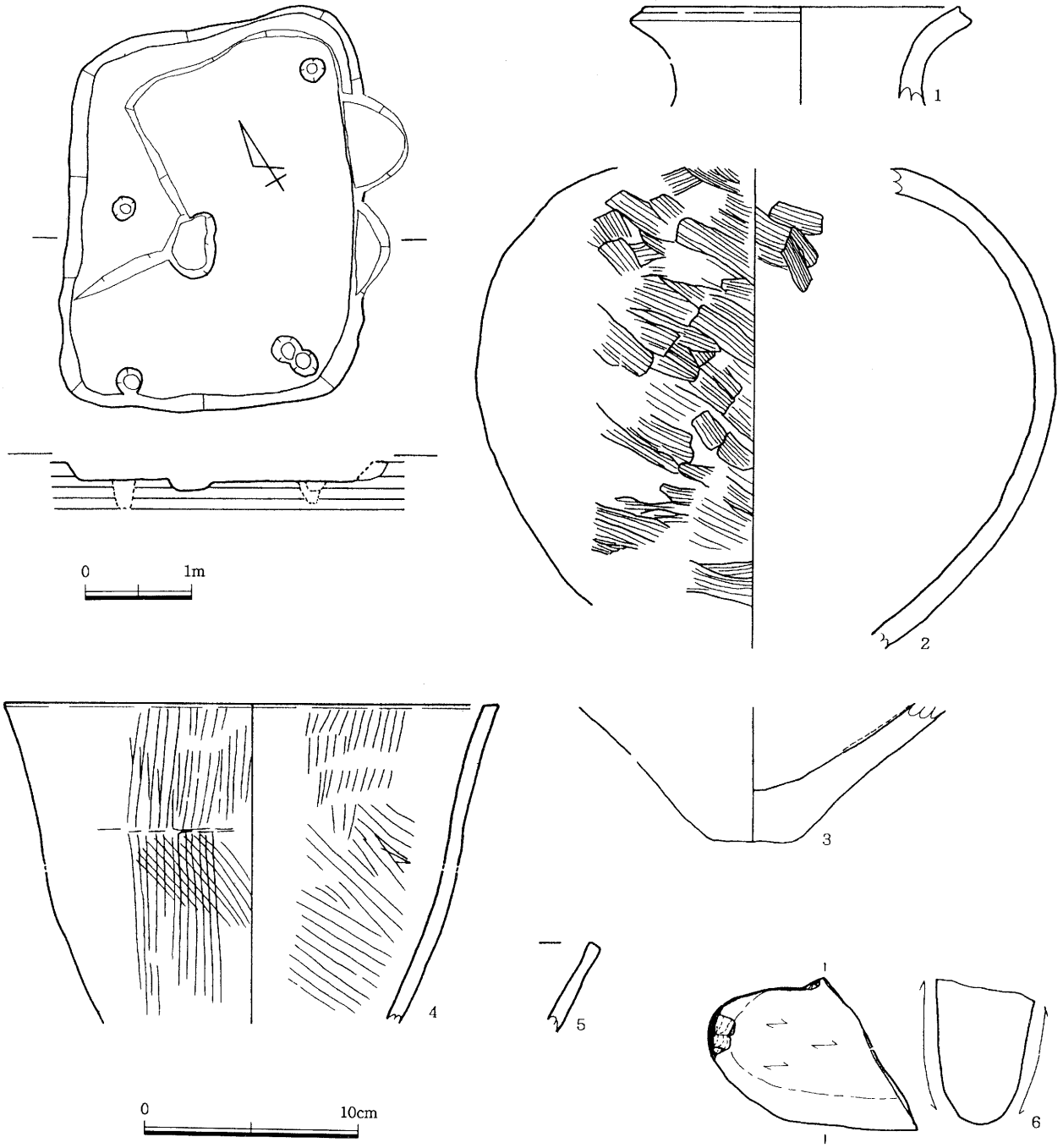
3号自然流路

幅50～137cm・深さ４～14cmで、北半部は２又に分かれている。

4号自然流路（図版153）

幅4.1～5.3m・深さ40～50cmで、中央寄り下層に粗砂・小礫が多く堆積している。覆土から、土師器片が約60点出土した。

5号自然流路



第202図　１号住居および出土遺物実測図

幅3.2～3.9m・深さ20～30cmで、若干の土師器片が出土した。

6号自然流路（第207図）

幅1.64～4.24m・深さ11～51cmで、蛇行している。覆土は粗細砂～小礫を多く含み、多量の土師器細片と若干の須恵器片を含む。

6．平安時代

平安期と断定できる遺構は無いが、6号と30～36号掘立柱建物跡は方位を同じくし、覆土から輸入陶磁器が出土していないので、平安末～鎌倉初期を想定している。

遺物はⅧ区に集中し、遺物包含層と81号掘立柱建物内の柱穴（PP）から墨書土器（第243図－273・274）が出土している。

7．中世

調査区全体に遺構が広がり、Ⅰ区東端～Ⅵ区・Ⅷ区西半部に掘立柱建物跡が集中し、66棟＋数10棟分の柱穴群の他、竪穴状遺構4条、大型土坑1基などがある。

1号掘立柱建物跡（第208図）

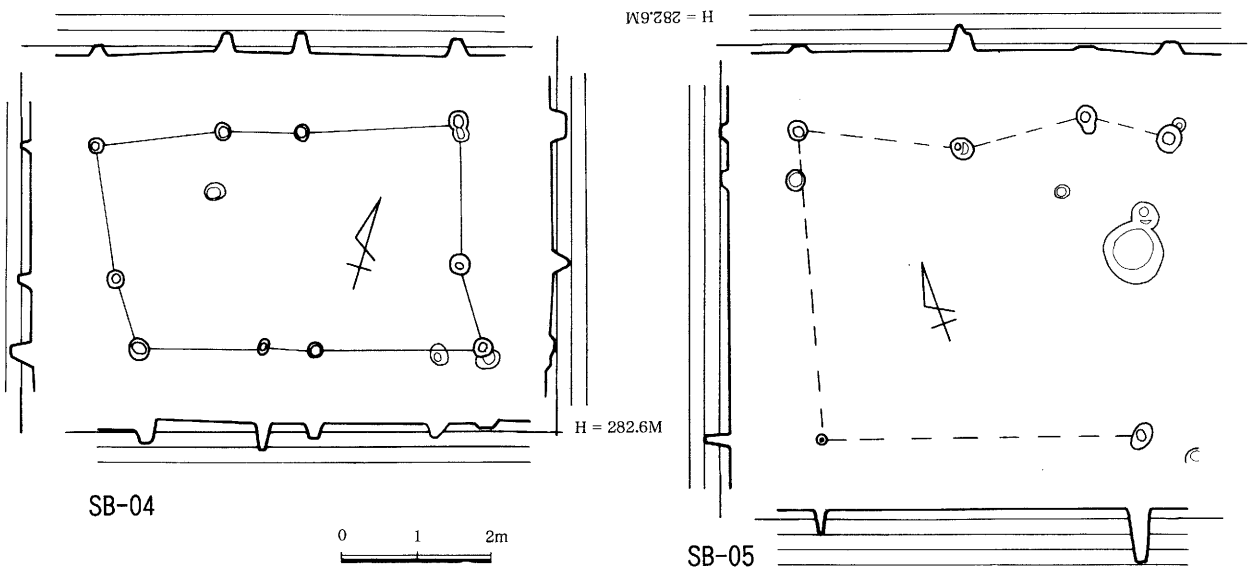
梁行1間（3.46m）、桁行3間（5.21m）で、3面（北・西・東）に廂を有する。主軸方位は、N83°Wである。

2号掘立柱建物跡（第208図）

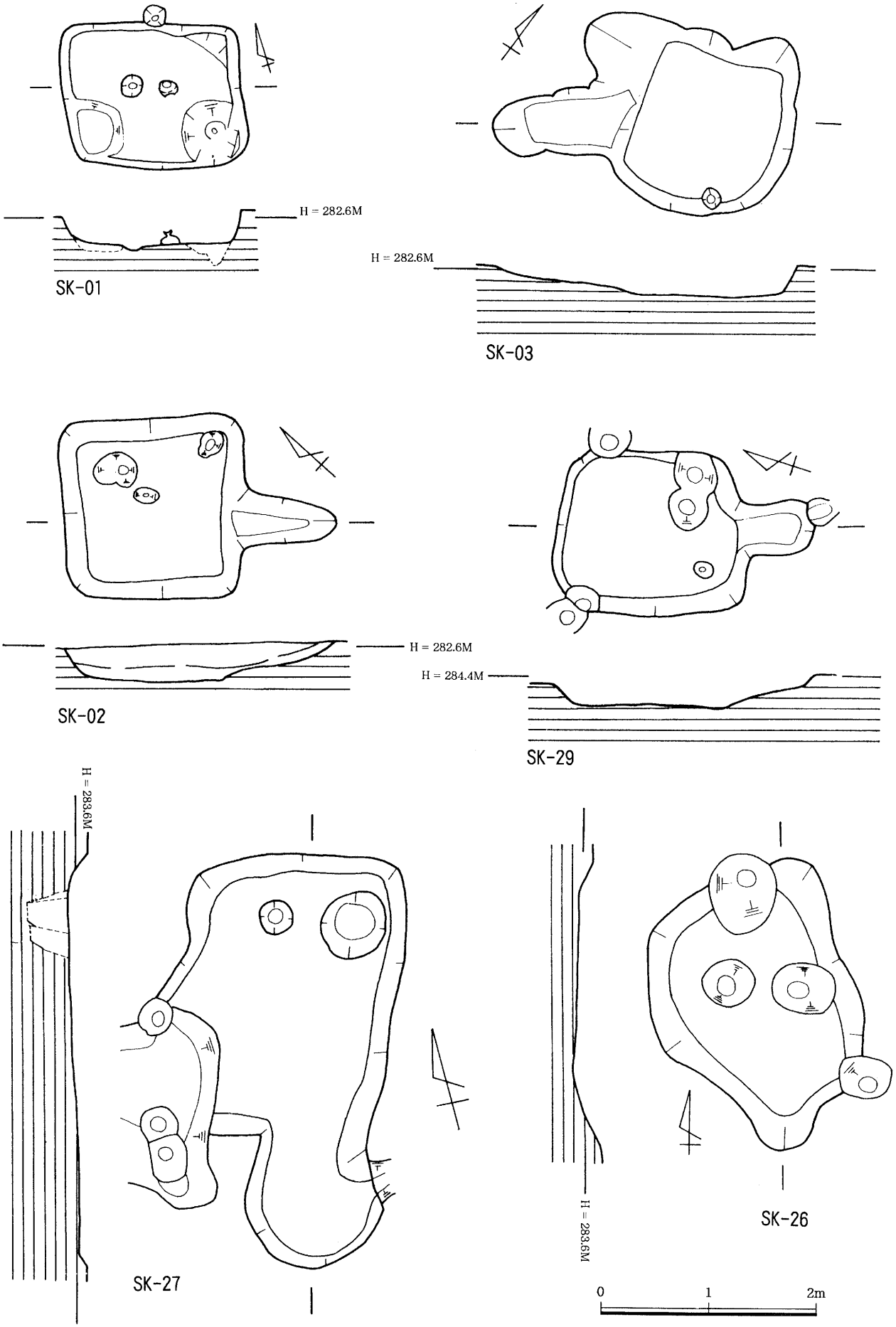
梁行2間（3.86m）、桁行3間（6.25m）で、3面（北・西・東）に廂を有する。主軸方位は、N85°Wである。

3号掘立柱建物跡（第208図）

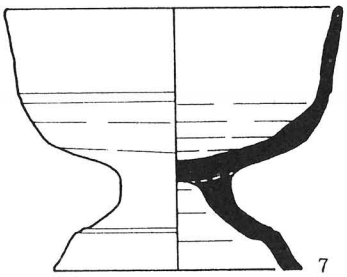
梁行1間（3.28m）、桁行3間（6.27m）で、主軸方位はN89°Eである。

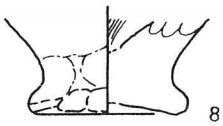


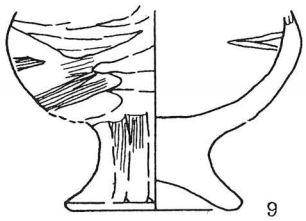
第203図　04・05号掘立柱建物跡　遺構実測図



第204図　小型方形竪穴状遺構実測図





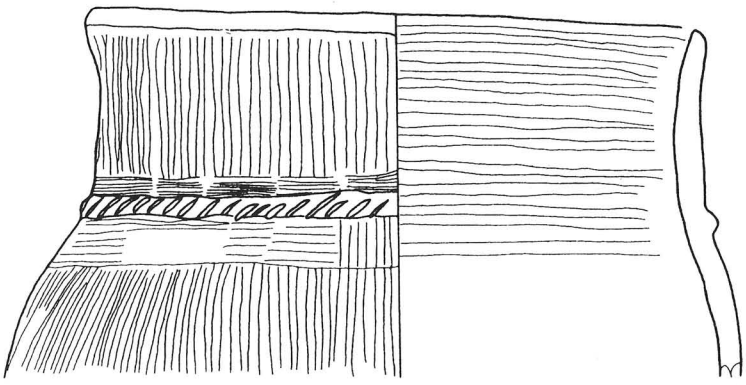


7 : SK-01

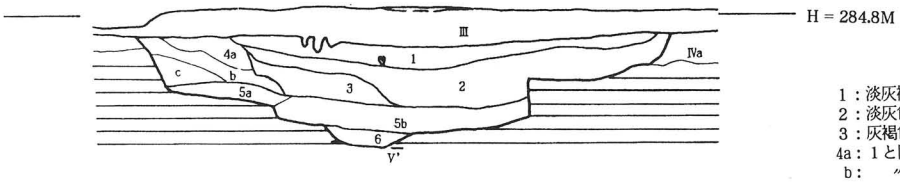
8 : SK-03

9 : SK-04

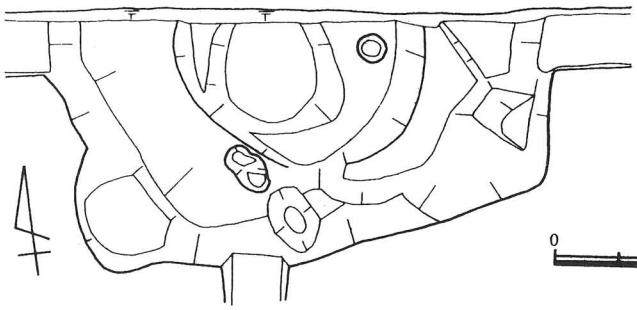
10 : SK-11

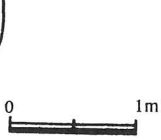


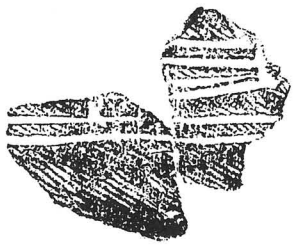
第205図　1・3・4・11号土坑出土遺物実測図

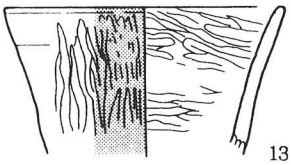


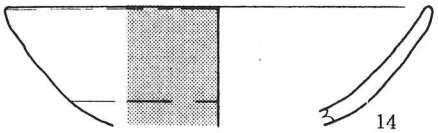
1：淡灰褐色～淡茶灰色土
2：淡灰色土＋1（やや粘質）
3：灰褐色＋暗茶灰色砂質土
4a：1と同じ
b：　〃　（混炭・焼土粒）
c：　〃
5a：淡黄灰色土（砂質）
b：淡茶灰色～淡茶褐色土（やや粘質・混炭粒）
6：淡黄灰色～淡黄色土（やや粘質）

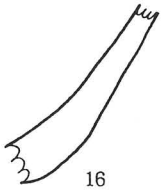




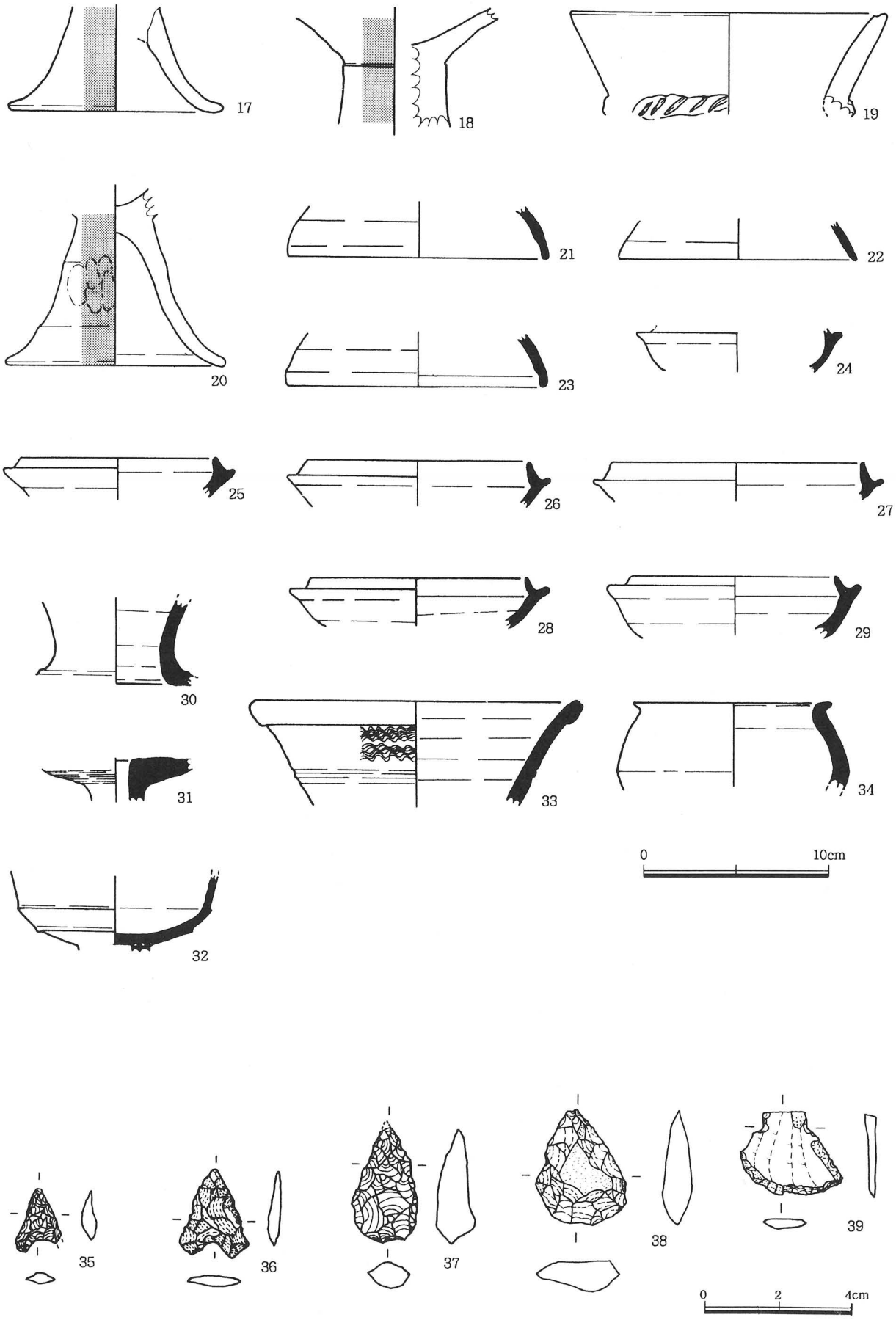




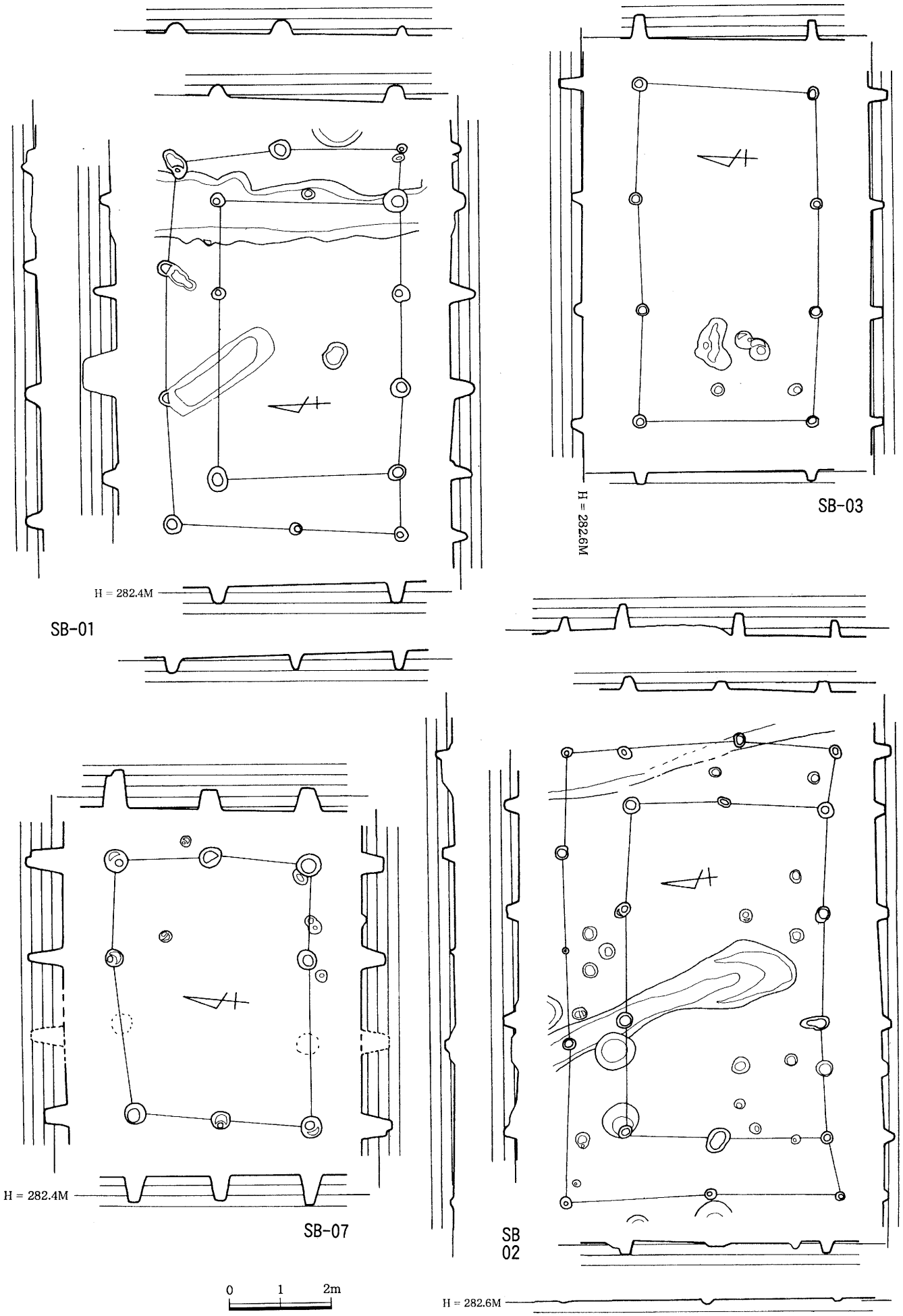




第206図　40号土坑および出土遺物実測図



第207図　6号自然流路出土遺物実測図　　土師器・須恵器・石鏃・石匙



第208図　01～03、07号掘立柱建物跡　遺構実測図

6号掘立柱建物跡（第209図）

梁行２間（3.42m）、桁下５間（10.12m）で、四面廂を有する。建物跡の中で最も桁行が長いが柱穴は直径25cm内外、柱根は10cm内外と小さい。主軸方位は、N７°Eである。北側と東南側には、付属する可能性のある柵列がある。

7号掘立柱建物跡（第208図）

梁行２間（3.39m）、桁行３間（5.20m）で、周囲の建物群の中では最も柱穴が大きく、直径35～45cmである。主軸方位は、N84°Eである。

8号掘立柱建物跡（第209図）

梁行１間（3.06m）、桁行３間（６m弱）と推定され、主軸方位はN84°Wである。北西端の柱穴から14～15世紀の陶磁器片が出土している。

9号掘立柱建物跡（第210図）

梁行１間（3.34m）、桁行２間（4.55m）で、主軸方位はN81°Wである。

10号掘立柱建物跡（第210図）

梁行１間（3.05m）、桁行３間（5.96m）で、２面（北・東）に廂を有する。主軸方位は、N73°Wである。

29号掘立柱建物跡（第214図）

梁行２間（4.43m）、桁行３間（6.53m）で、主軸方位はN11°Eである。

30号掘立柱建物跡（第214図）

梁行２間（3.96m）、桁行３間（5.93m）で、北面に廂を有する。主軸方位は、N77°Wである。

31号掘立柱建物跡（第215図）

梁行２間（５m）、桁行４間（8.15m）で、２面（北・東）に廂を有する。主軸方位は、N80°Wである。

32号掘立柱建物跡（第215図）

梁行２間（5.07m）、桁行４間（7.9m）で、３面（北・西・南）に廂を有する。主軸方位は、N78°Wである。

33号掘立柱建物跡（第214図）

梁行１間（4.02m）、桁行２間（4.36m）で、東面に廂を有する。主軸方位は、N78°Wである。

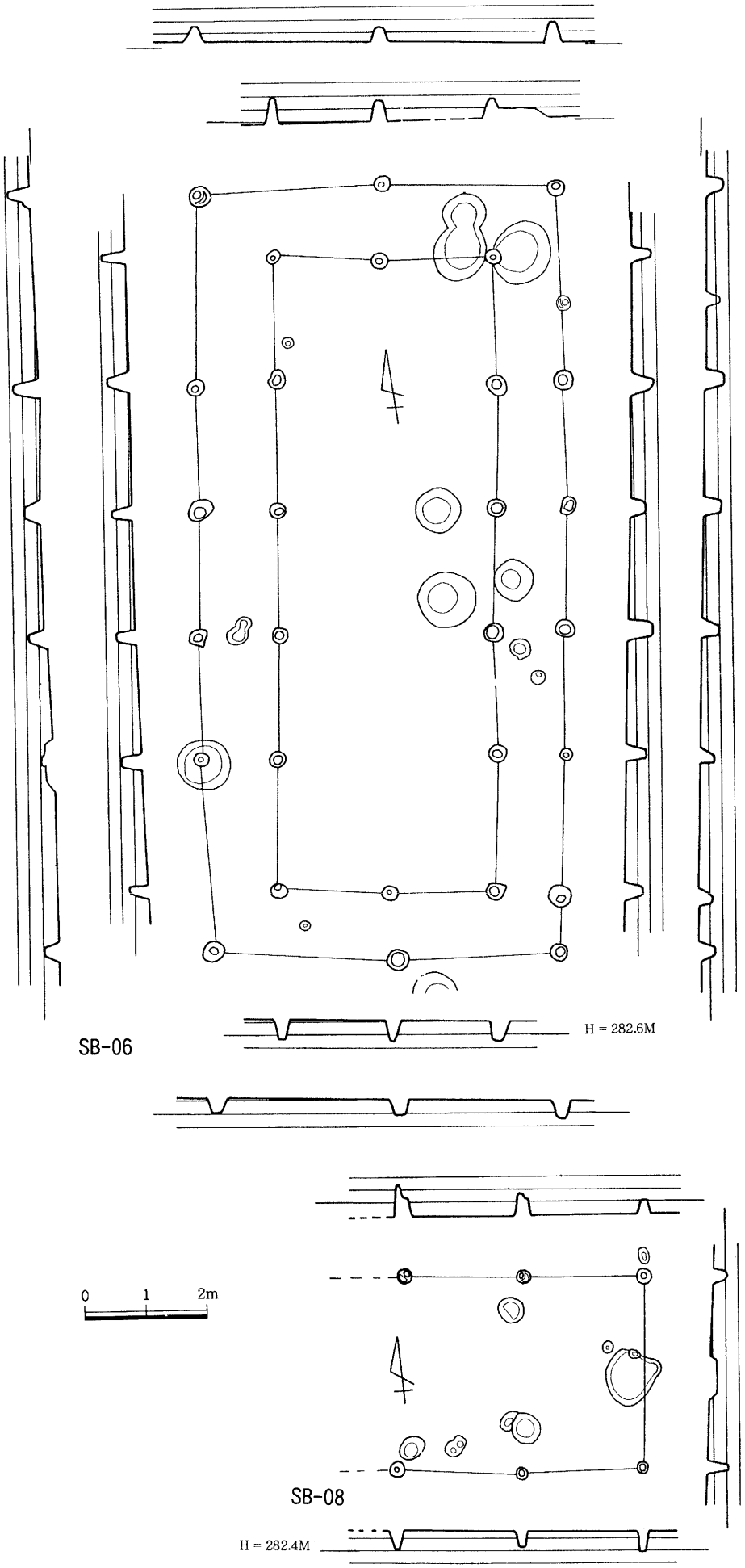
34号掘立柱建物跡（第214図）

梁行１間（2.88m）、桁行２間（3.91m）で、東面に廂を有する。主軸方位は、N14°Eである。

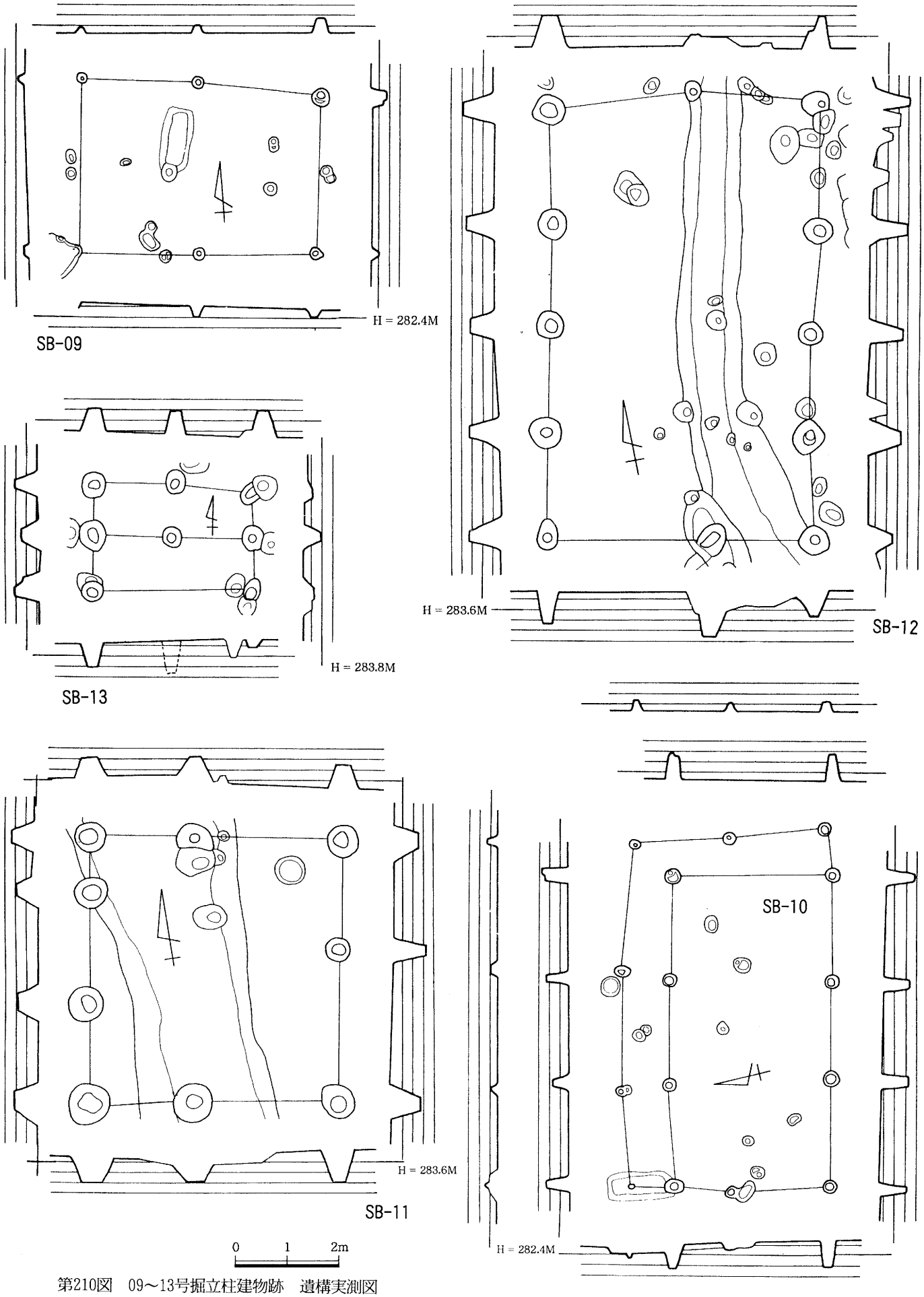
35号掘立柱建物跡（第216図）

３～４回の建て替え（A～C）があり、遺構検出時の柱穴の切り合いでは、A棟→B棟→34号→C棟の順と判断した。主軸方位は、N12°Eである。

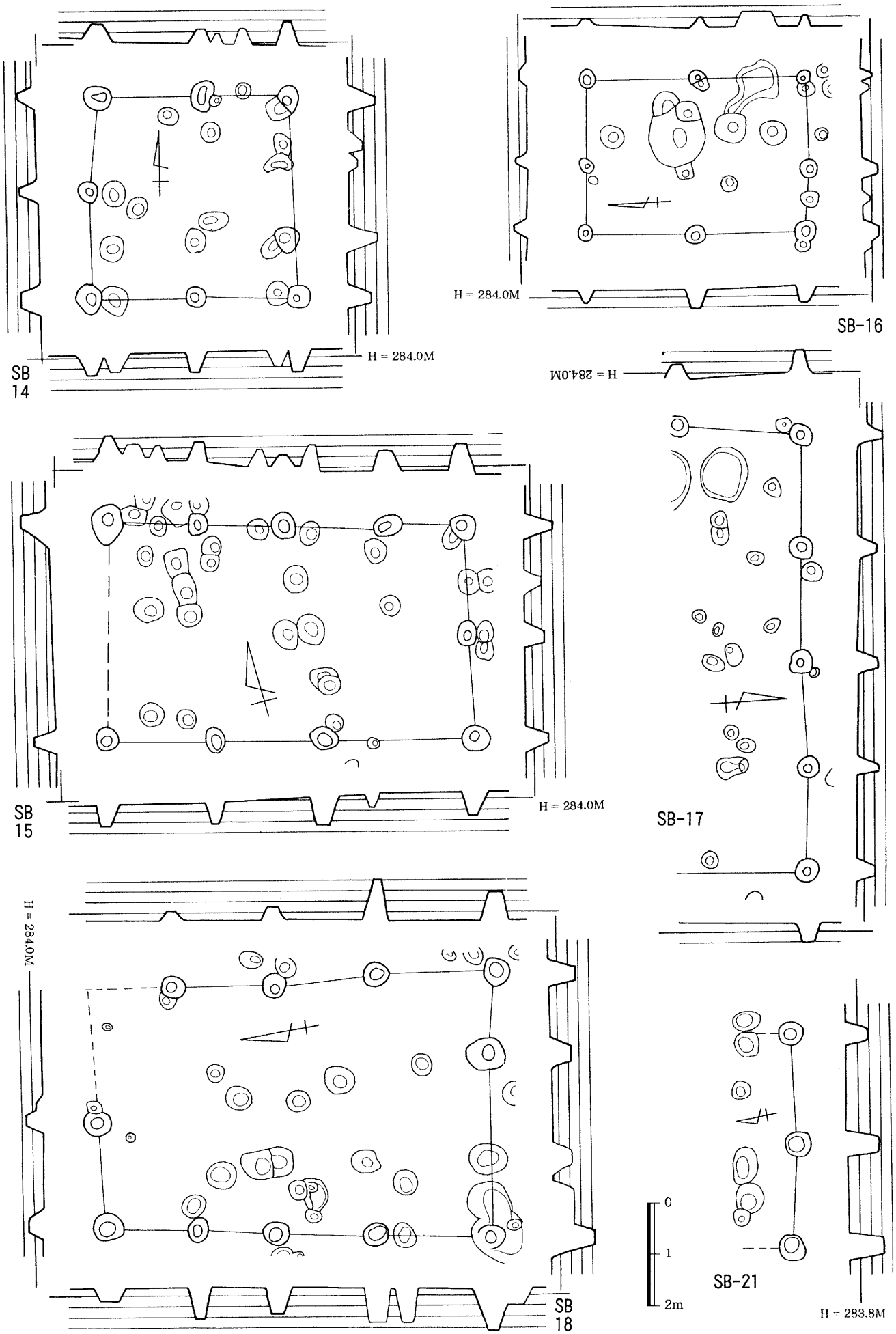
A棟は梁行１間（4.25m）、桁行２間（4.95m）と思われ、南面に廂を有する。B棟は梁行２間（4.2m）、桁行３間（6.65m）で南面に廂を有する。C棟は不明瞭であるが、梁行２間（4.4m）、桁行２間（4.25m）



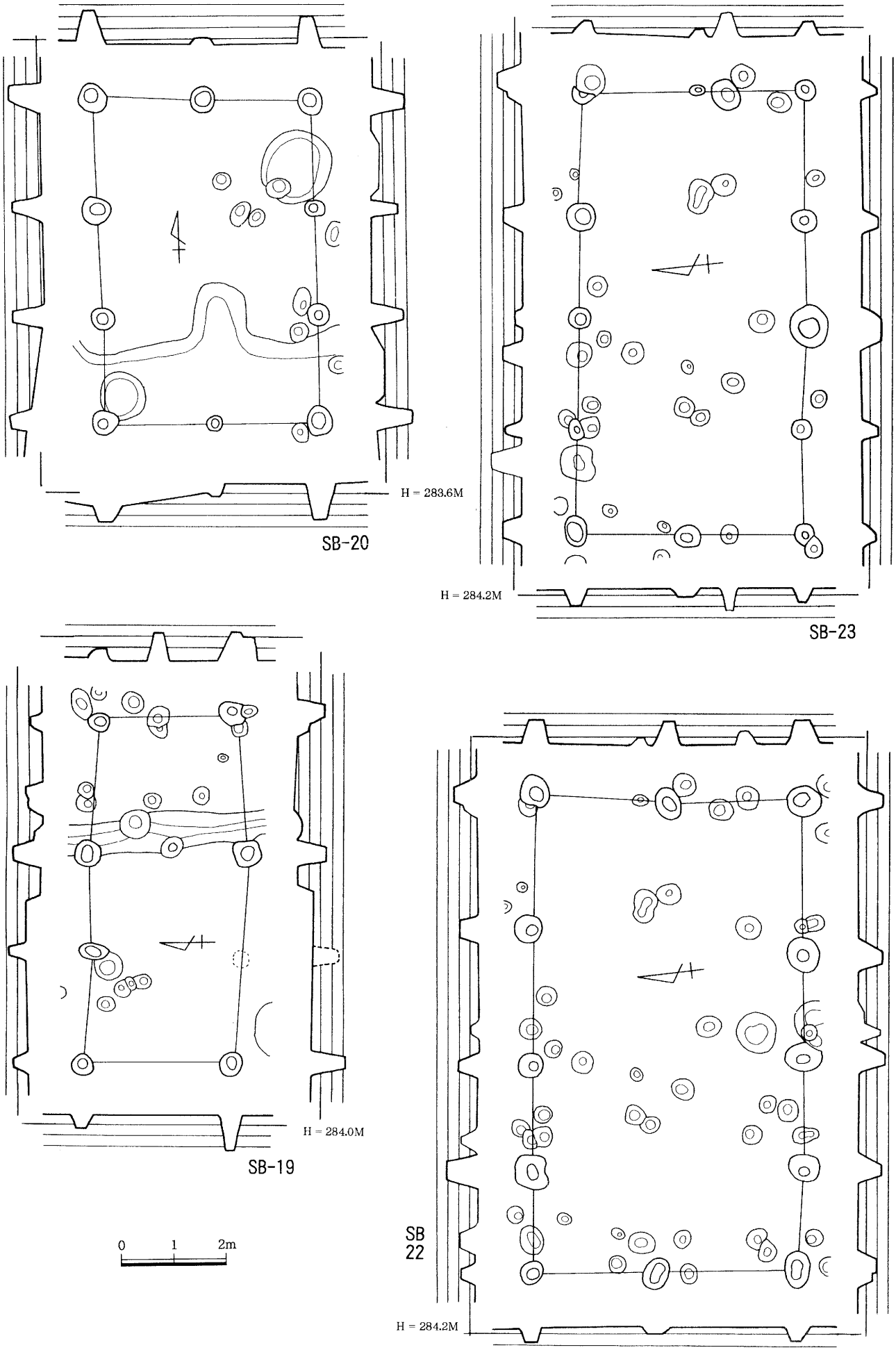
第209図　06・08号掘立柱建物跡　遺構実測図



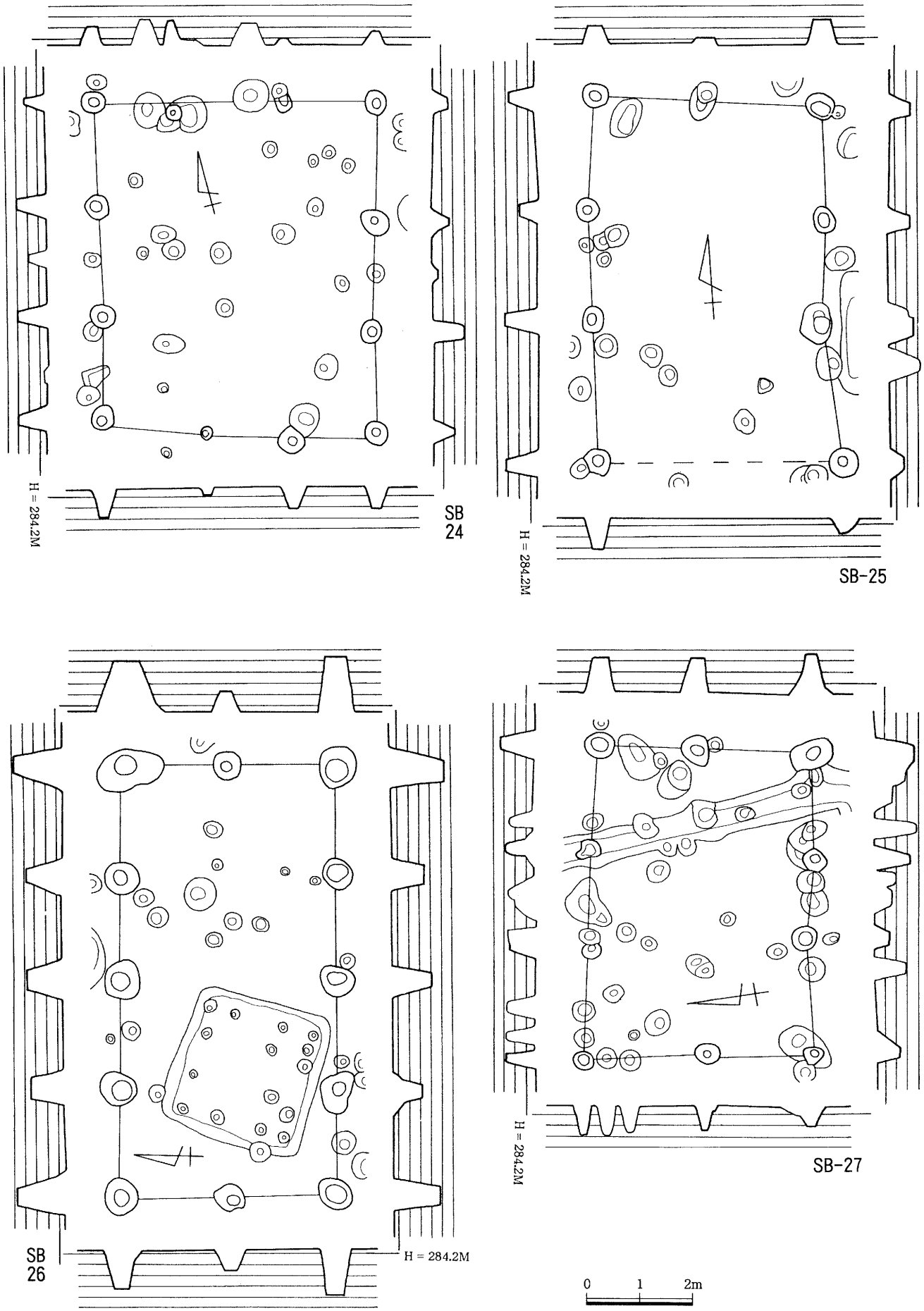
第210図　09～13号掘立柱建物跡　遺構実測図



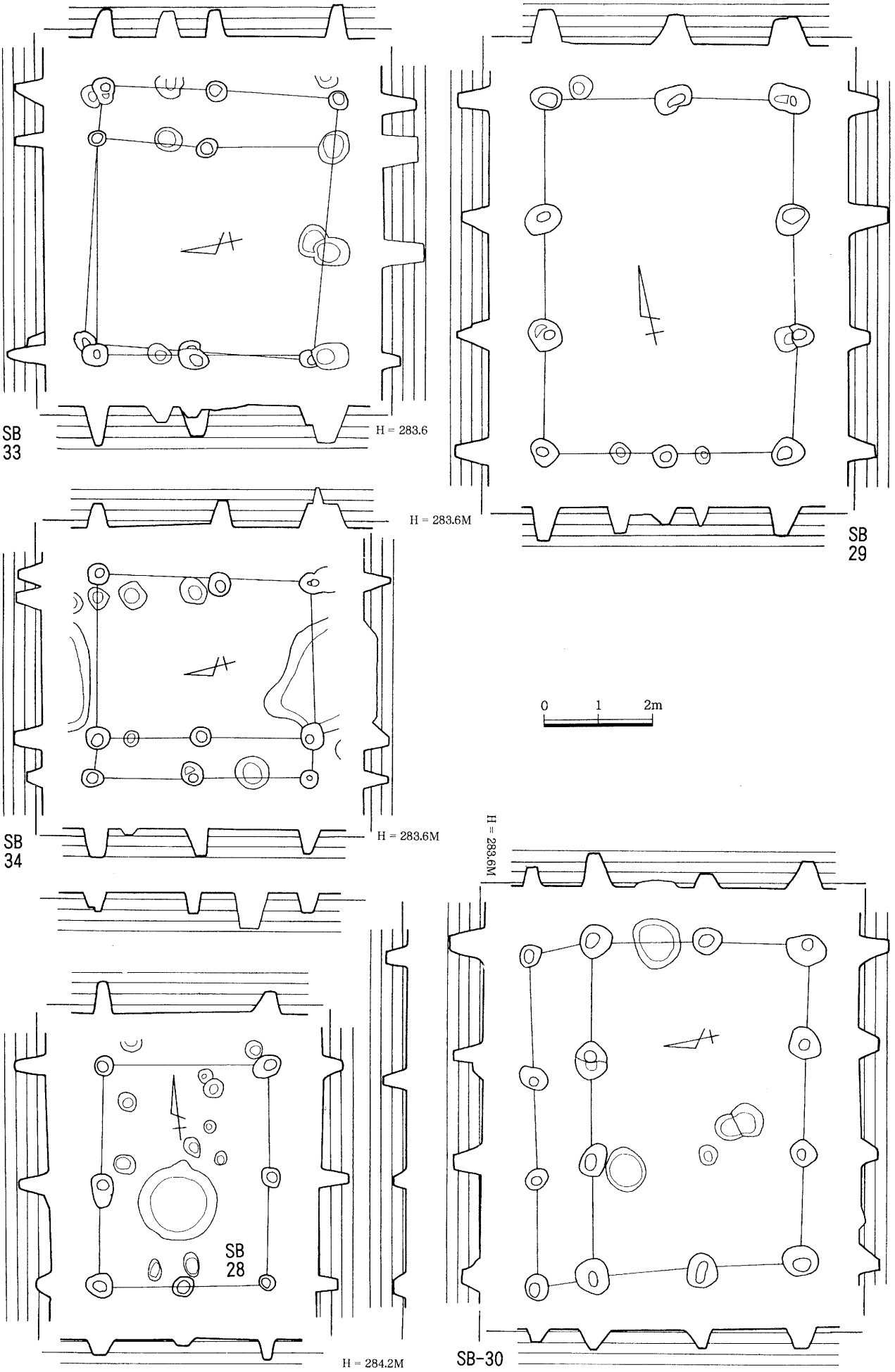
第211図　14～18、21号掘立柱建物跡　遺構実測図



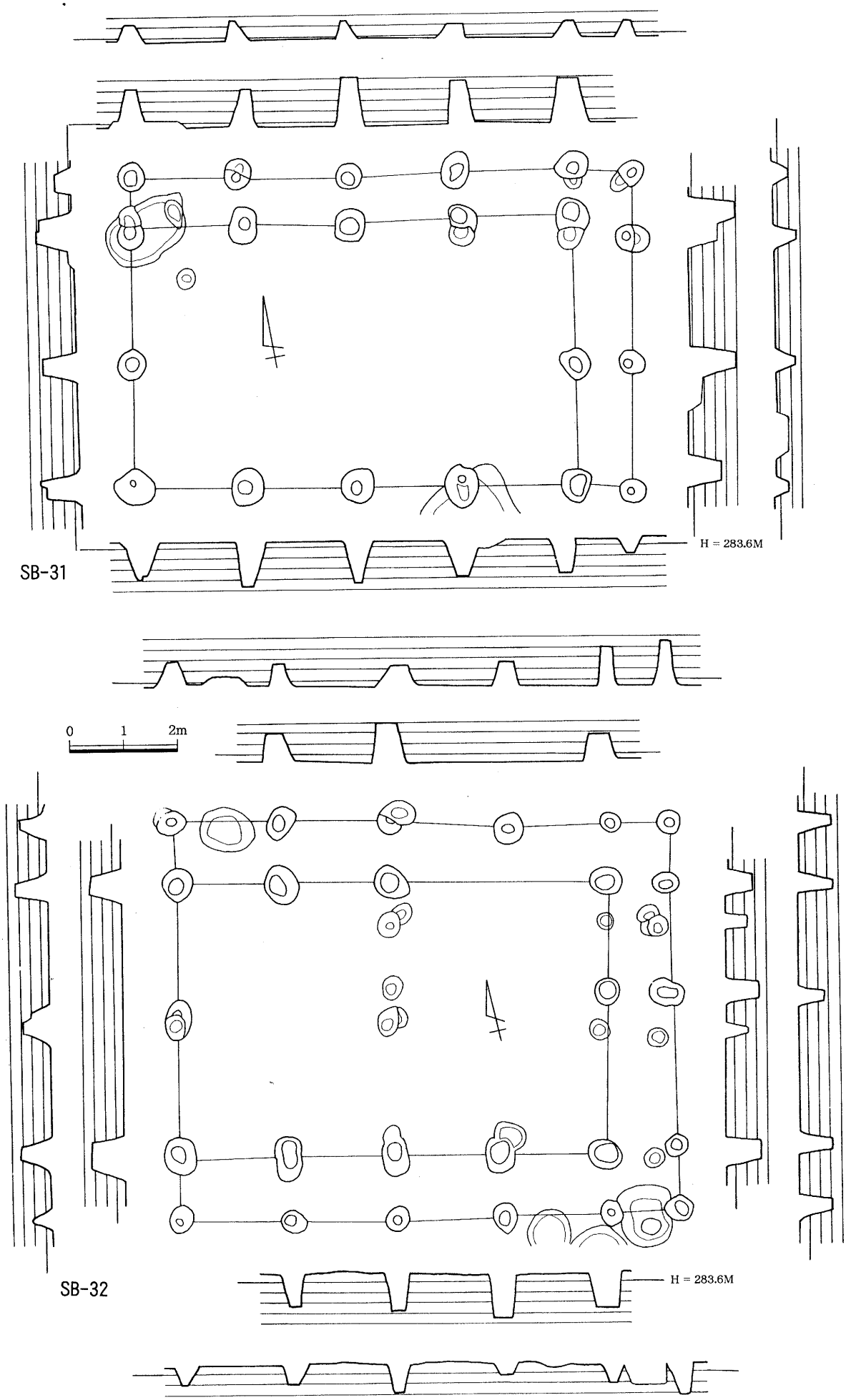
第212図　19・20・22・23号掘立柱建物跡　遺構実測図



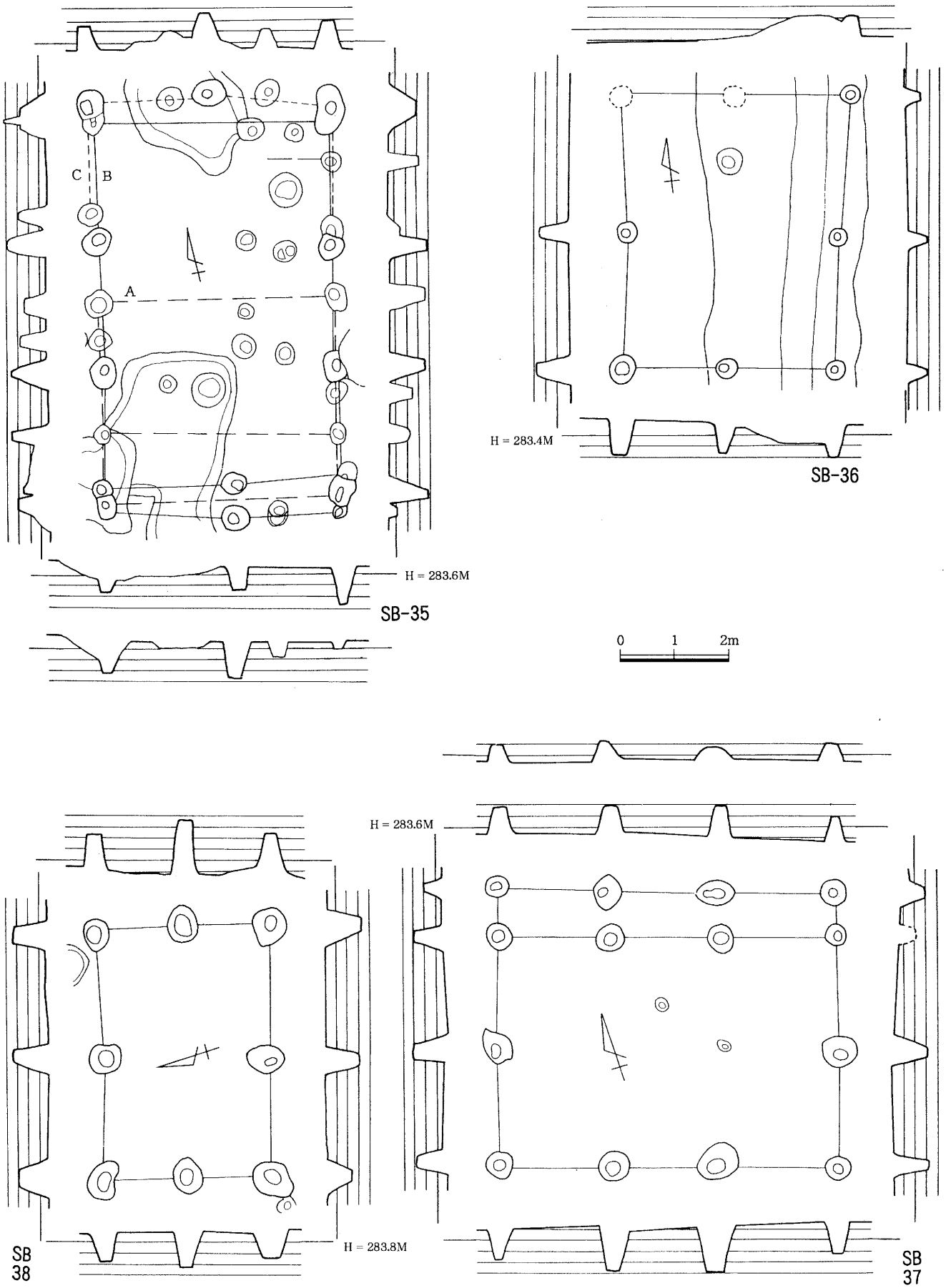
第213図　24～27号掘立柱建物跡　遺構実測図



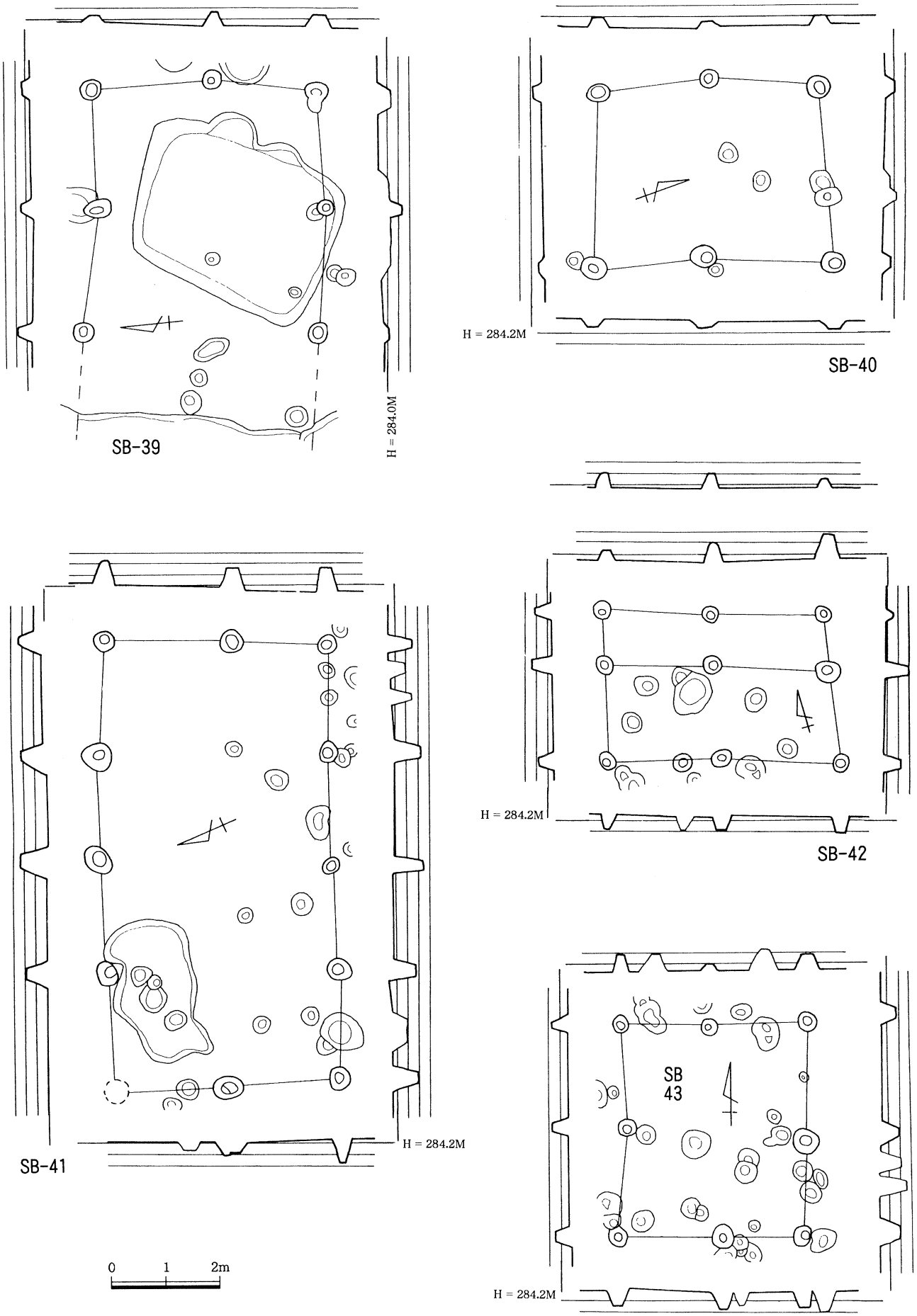
第214図　28～30、33・34号掘立柱建物跡　遺構実測図



第215図　31・32号掘立柱建物跡　遺構実測図



第216図　35～38号掘立柱建物跡　遺構実測図



第217図　39～43号掘立柱建物跡　遺構実測図

と推定される。

36号掘立柱建物跡（第216図）

梁行２間（3.76m）、桁行２間（4.99m）で、主軸方位はN10°Eである。

37号掘立柱建物跡（第216図）

梁行２間（4.16m）、桁行３間（6.09m）で、北面に廂を有する。主軸方位は、N72°Wである。

38号掘立柱建物跡（第216図）

梁行２間（3.04m）、桁行３間（4.59m）で、主軸方位は、N73°Wである。

39号掘立柱建物跡（第217図）

梁行２間（4.08m）、桁行２間（4.40m）～３間と思われ、主軸方位はN86°Wである。

40号掘立柱建物跡（第217図）

梁行２間（3.18m）、桁行２間（4.33m）で、主軸方位はN19°Eである。

41号掘立柱建物跡（第217図）

梁行２間（4.01m）、桁行４間（8.15m）で、主軸方位はN65°Wである。

42号掘立柱建物跡（第217図）

梁行１間（1.79m）、桁行２間（4.22m）で、北面に廂を有する。主軸方位はN74°Wである。

43号掘立柱建物跡（第217図）

梁行２間（3.38m）、桁行２間（3.89m）で、主軸方位はN２°Wである。

44号掘立柱建物跡（第218図）

梁行２間（4.05m）、桁行２間（4.11m）で、主軸方位はN13°Eである。

45号掘立柱建物跡（第218図）

梁行２間（3.57m）、桁行２間（4.34m）で、主軸方位はN22°Eである。

46号掘立柱建物跡（第218図）

梁行１間（2.88m）、桁行２間（4.14m）で、主軸方位はN15°Eである。

47号掘立柱建物跡（第218図）

梁行２間（4.07m）、桁行４間（8.24m）で、主軸方位はN20°Eである。

48号掘立柱建物跡（第218図）

梁行２間（3.85m）、桁行３間（4.04m）もしくは南に１間延びる建物で、主軸方位はN31°Eである。

49号掘立柱建物跡（第219図）

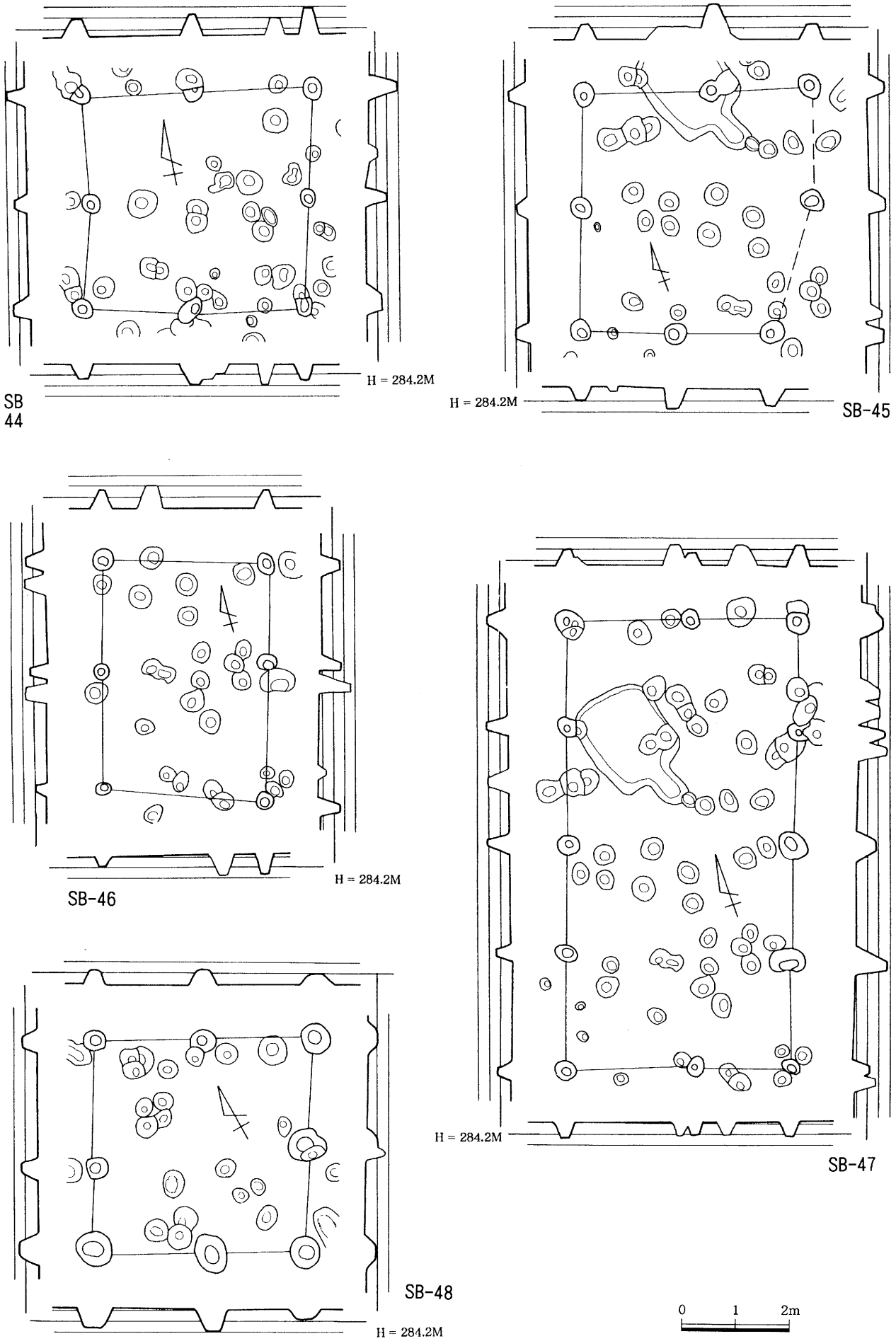
梁行２間（4.96m）、桁行３間（6.12m）で、主軸方位はN58°Wである。

50号掘立柱建物跡（第219図）

梁行２間（3.28m）、桁行２間（4.47m）で、主軸方位はN23°Eである。

51号掘立柱建物跡（第219図）

梁行２間（2.85m）、桁行２間（4.82m）で、主軸方位はN81°Wである。



第218図　44～48号掘立柱建物跡　遺構実測図

52号掘立柱建物跡（第219図）

梁行２間（3.05m）、桁行３間（4.41m）で、主軸方位はN88°Ｗである。

53号掘立柱建物跡（第219図）

梁行１間（3.87m）、桁行３間（5.72m）で、主軸方位はＮ８°Ｅである。

54号掘立柱建物跡（第220図）

梁行２～３間（4.94m）、桁行３間（5.85m）で、北面に廂を有する。主軸方位はN83°Ｗである。

55号掘立柱建物跡（第220図）

梁行２間（3.36m）、桁行３間（6.59m）で、北面に廂を有する。主軸方位は、N79°Ｗである。

56号掘立柱建物跡（第220図）

梁行１間（3.26m）、桁行２間（4.37m）で、主軸方位はN16°Ｅである。

57号掘立柱建物跡（第220図）

梁行２間（4.01m）、桁行２間（4.26m）で、主軸方位はN84°Ｗである。

58号掘立柱建物跡（第220図）

梁行２間（3.21m）、桁行２間（4.13m）で、主軸方位はＮ８°Ｅである。

59号掘立柱建物跡（第221図）

梁行１間（2.18m）、桁行２間（3.35m）で、主軸方位は東西である。

60号掘立柱建物跡（第221図）

梁行２間（3.25m）、桁行２間（3.72m）で、主軸方位はN87°Ｗである。

61号掘立柱建物跡（第221図）

梁行２間（3.19m）、桁行２間（4.25m）で、主軸方位はN79°Ｗである。

62号掘立柱建物跡（第221図）

梁行２間（3.89m）、桁行４間（7.95m）で、南面に廂を有する。主軸方位はN80°Ｗである。

63号掘立柱建物跡（第221図）

梁行２間（2.65m）、桁行２間（3.57m）で、主軸方位はＮ６°Ｅである。

64号掘立柱建物跡（第222図）

梁行２間（4.14m）、桁行２間（5.03m）の総柱建物で、主軸方位は南北である。

65号掘立柱建物跡（第222図）

梁行２間（4.12m）、桁行２間（4.71m）で、主軸方位はN84°Ｗである。

66号掘立柱建物跡（第222図）

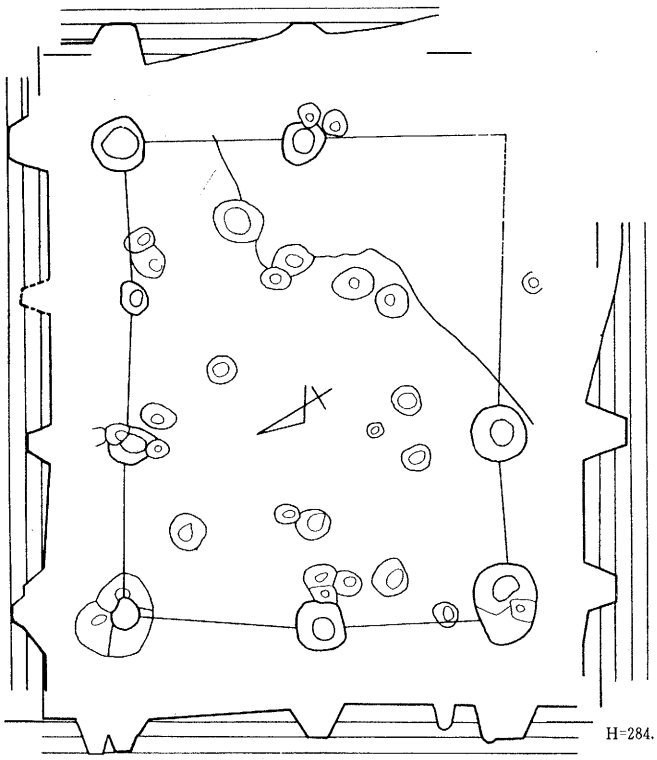
梁行２間（3.58m）、桁行３間（5.57m）で、主軸方位はN74°Ｗである。

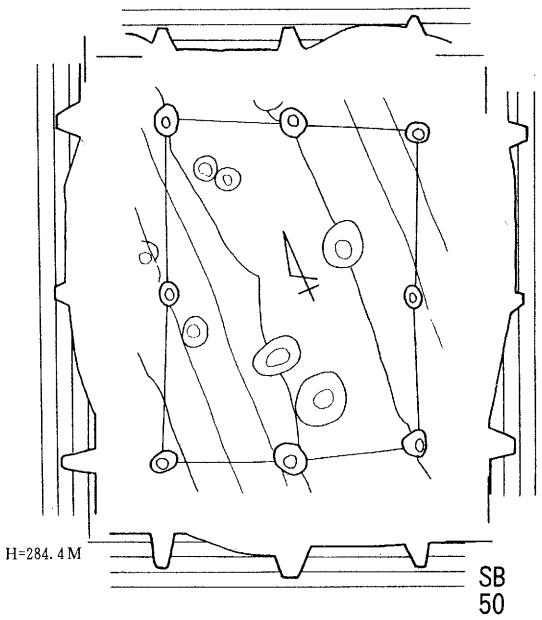
67号掘立柱建物跡（第222図）

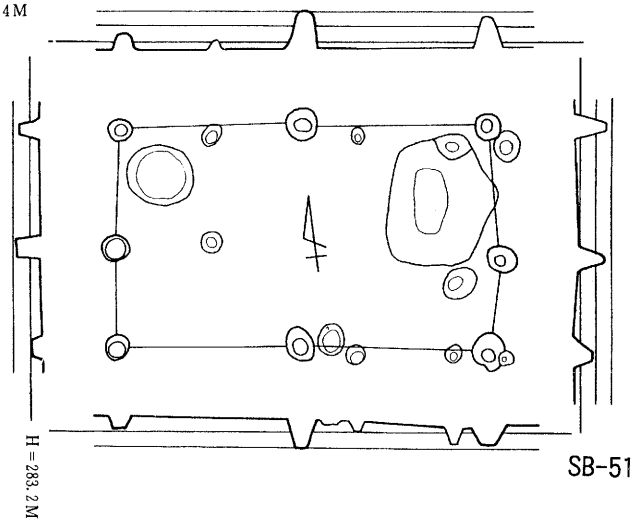
梁行２間（3.76m）、桁行２間（3.95m）で、主軸方位はN71°Ｗである。

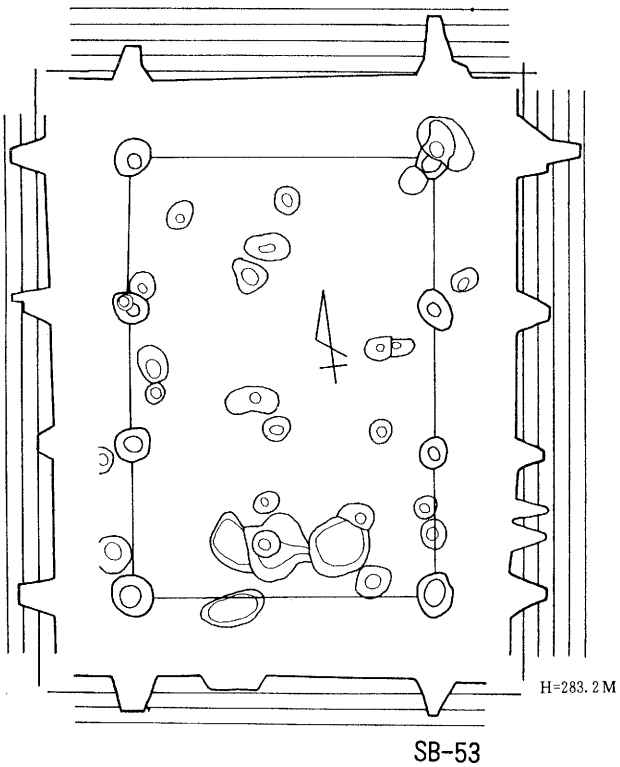
68号掘立柱建物跡（第222図）

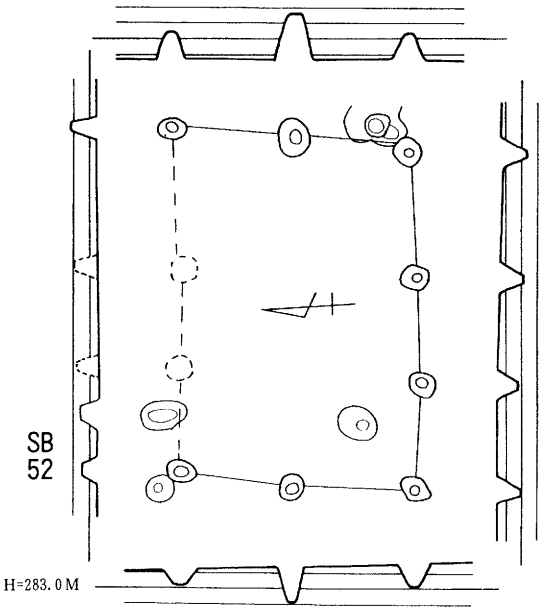
梁行２間（3.94m）、桁行３間（6.34m）で、主軸方位はN79°Ｗである。

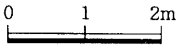




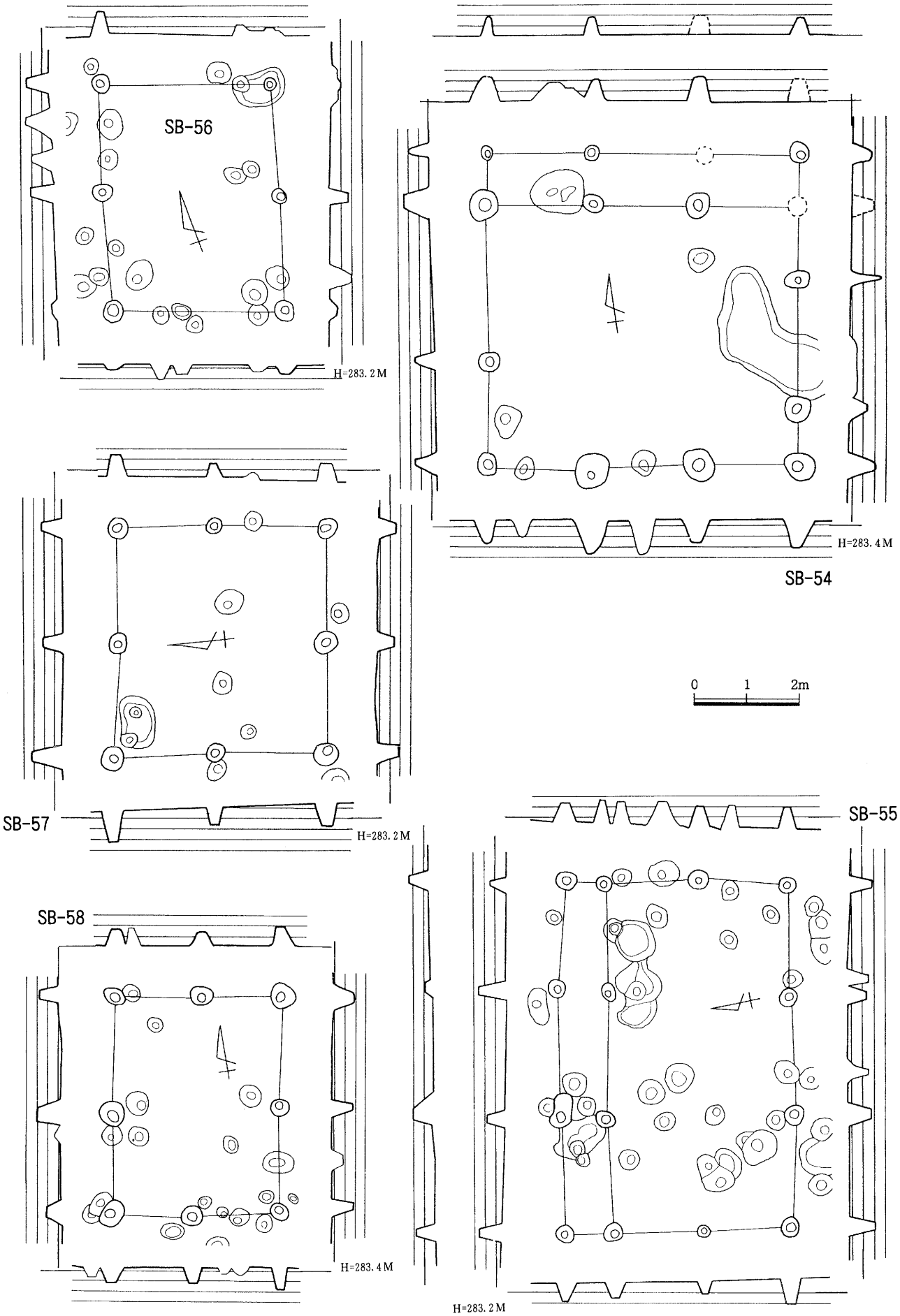




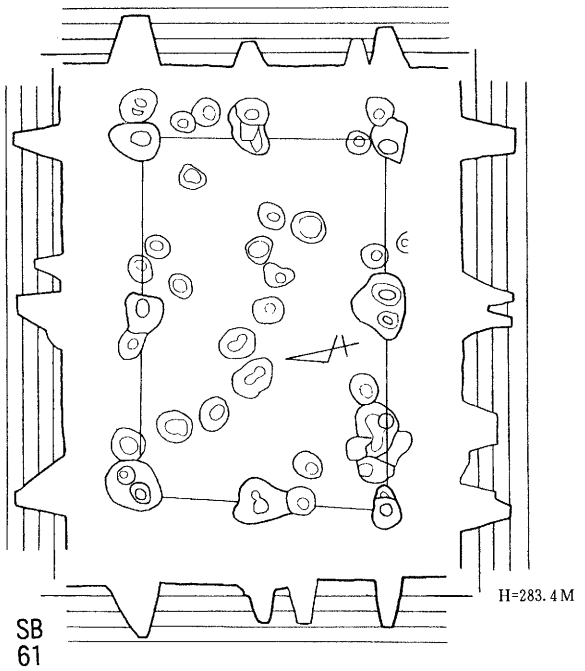


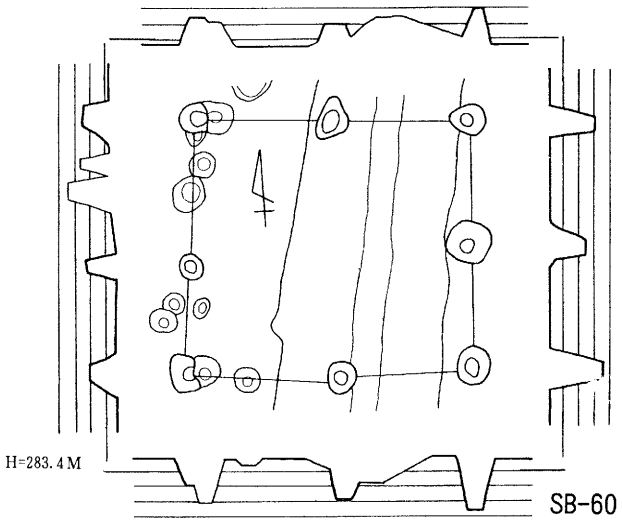


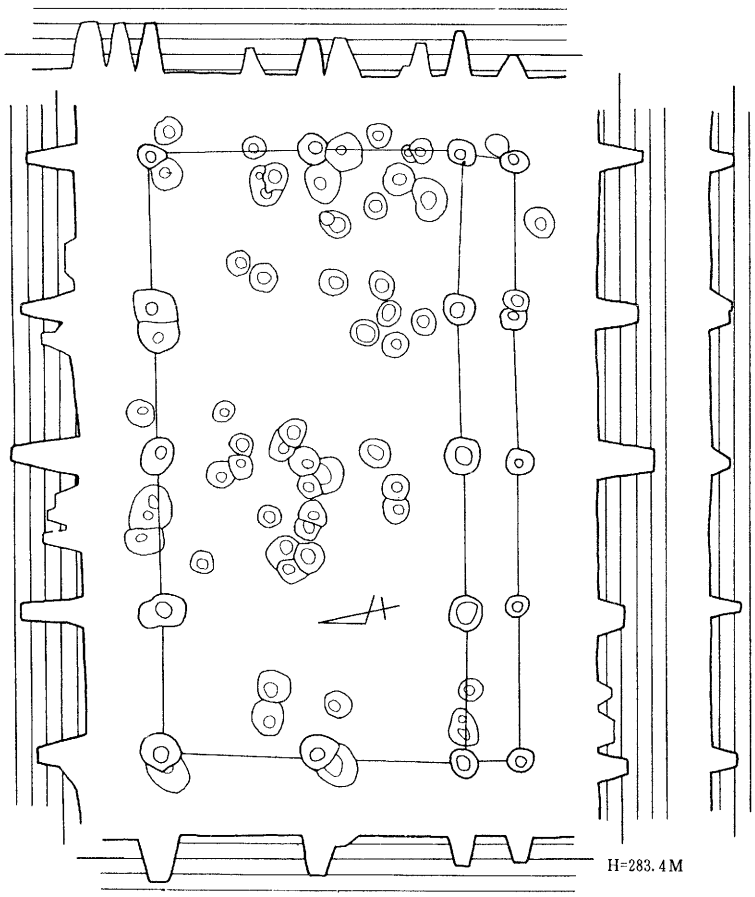
第219図　49～53号掘立柱建物跡　遺構実測図

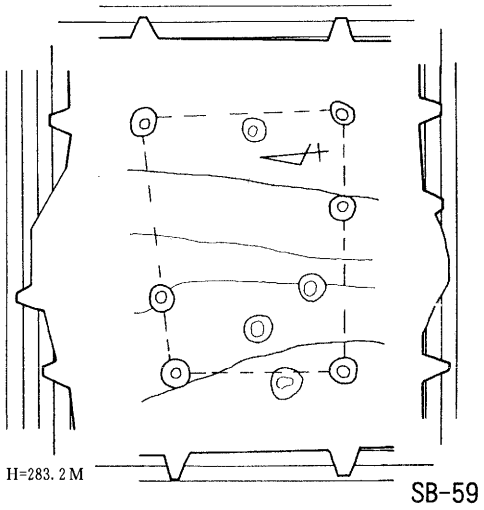


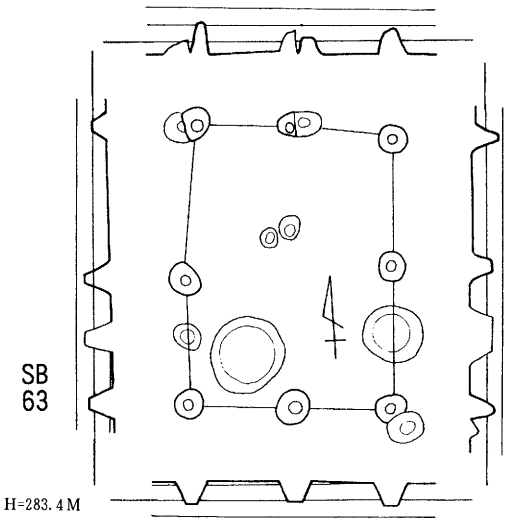
第220図　54～58号掘立柱建物跡　遺構実測図

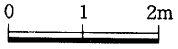




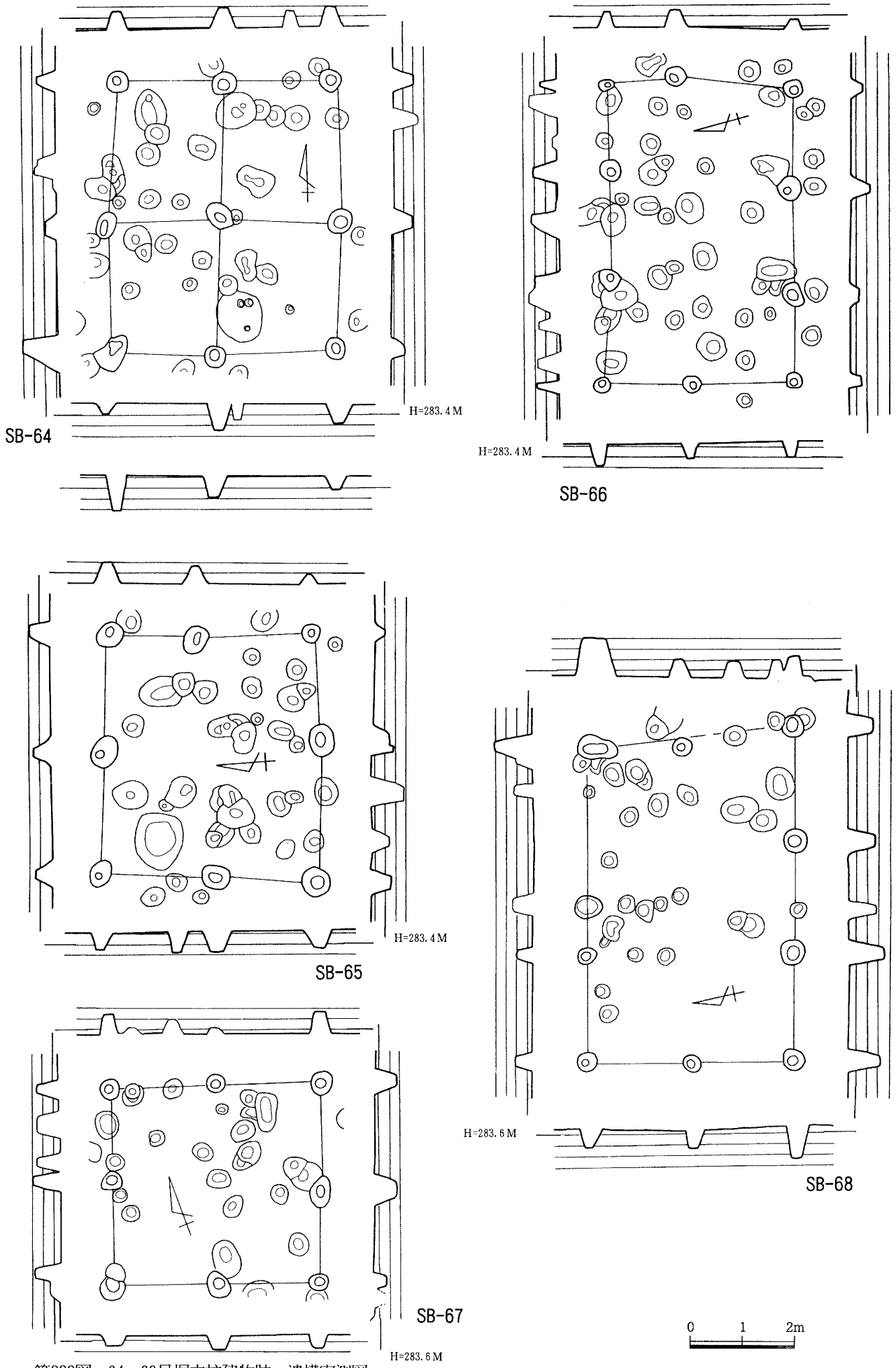




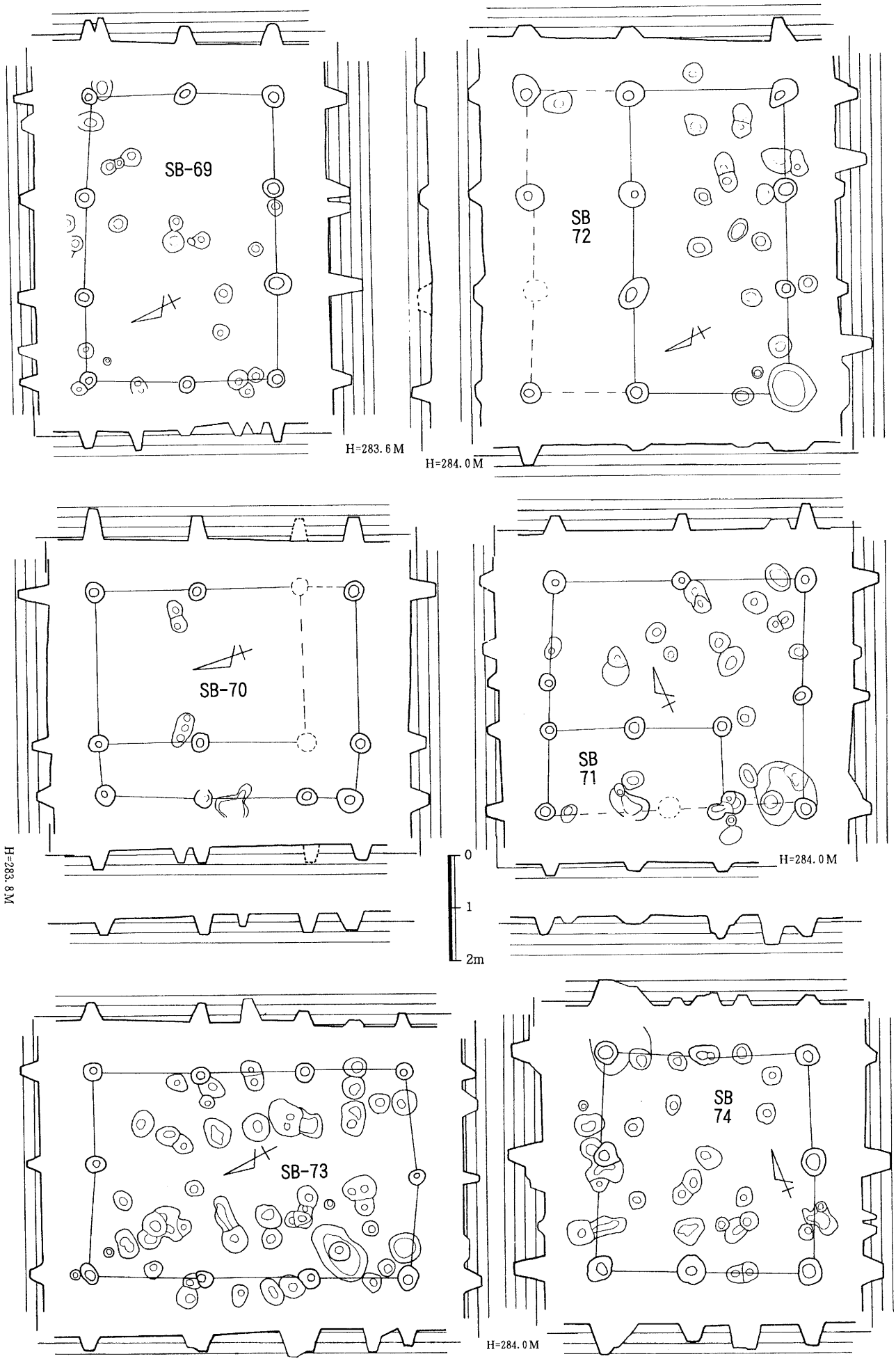




第221図　59～63号掘立柱建物跡　遺構実測図



第222図　64～68号掘立柱建物跡　遺構実測図



第223図　69～74号掘立柱建物跡　遺構実測図

69号掘立柱建物跡（第223図）

梁行２間（3.79m）、桁行３間（5.64m）で、主軸方位はN64° Wである。

70号掘立柱建物跡（第223図）

梁行１間（3.01m）、桁行２間（4.05m）で、２面（西・南）に廂を有する。主軸方位は、N18° Eである。

71号掘立柱建物跡（第223図）

梁行２間（4.46m）、桁行２～３間（5.13m）で、南西部に１間×２間の間仕切りを有する。主軸方位は、N66° Wである。

72号掘立柱建物跡（第223図）

梁行１間（2.92m）、桁行３間（5.89m）と推定され、主軸方位はN63° Wである。

73号掘立柱建物跡（第223図）

梁行２間（4.07m）、桁行３間（6.14m）で、主軸方位はN29° Wである。

74号掘立柱建物跡（第223図）

梁行２間（4.03m）、桁行２間（4.21m）で、主軸方位はN24° Wである。

75号掘立柱建物跡（第224図）

梁行２間（3.98m）、桁行３間（5.26m）で、主軸方位はN23° Eである。

76号掘立柱建物跡（第224図）

梁行１間（2.03m）、桁行３間（5.93m）で、主軸方位はN15° Eである。

77号掘立柱建物跡（第224図）

梁行１間（2.38m）、桁行２間（3.70m）で、主軸方位はN80° Wである。

78号掘立柱建物跡（第224図）

梁行２間（4.07m）、桁行３間（5.63m）で、主軸方位はN17° Eである。

79号掘立柱建物跡（第224図）

梁行２間（3.66m）、桁行２間（4.87m）で、主軸方位はN88° Wである。

80号掘立柱建物跡（第224図）

梁行２間（3.89m）、桁行２間（5.32m）で、主軸方位はN３° Wである。

81号掘立柱建物跡（第225図）

梁行１間（3.41m）、桁行２間（4.10m）で、主軸方位はN24° Eである。

82号掘立柱建物跡（第225図）

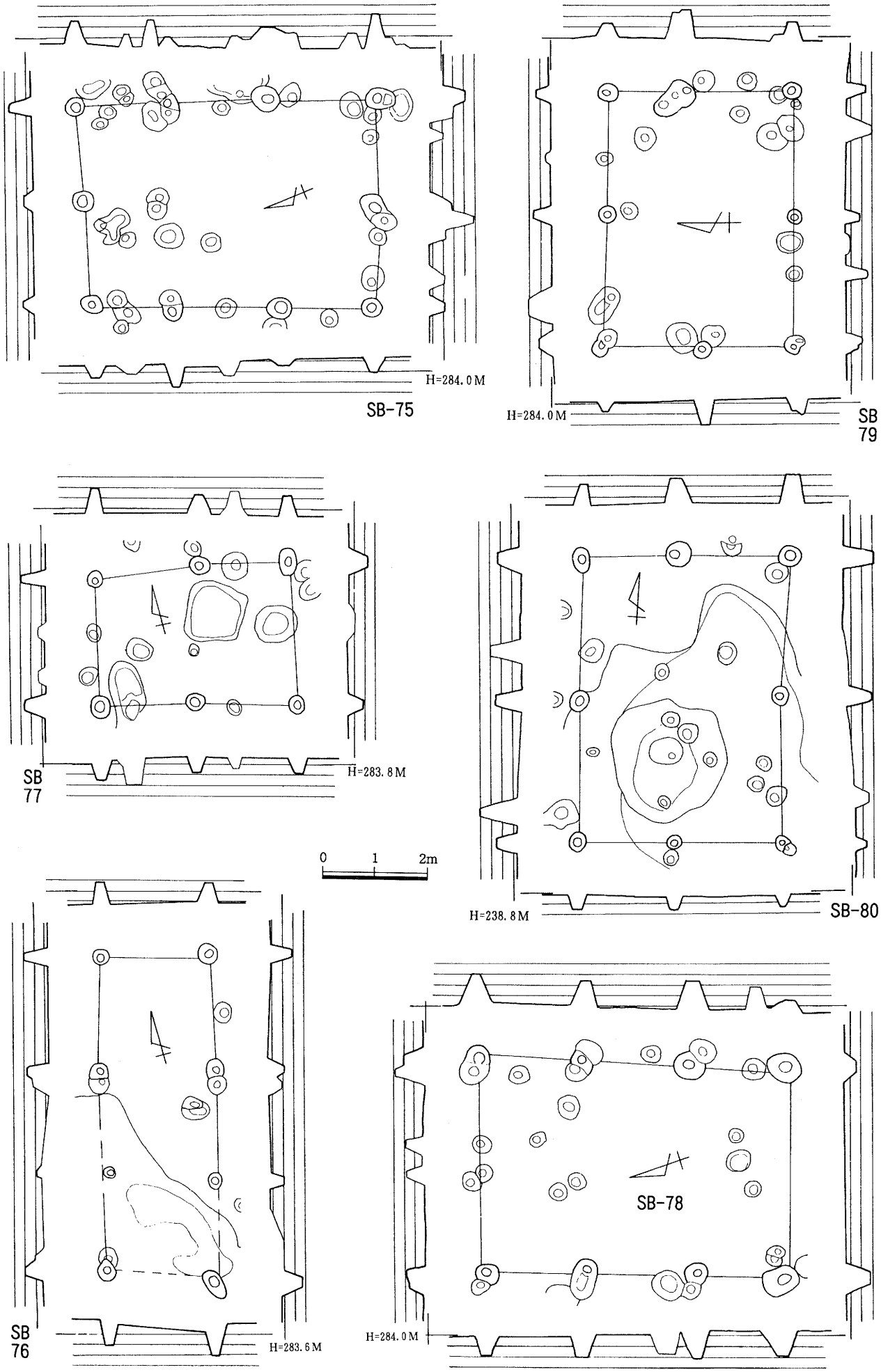
梁行２間（3.72m）、桁行３間（6.47m）で、主軸方位はN73° Wである。

83号掘立柱建物跡（第225図）

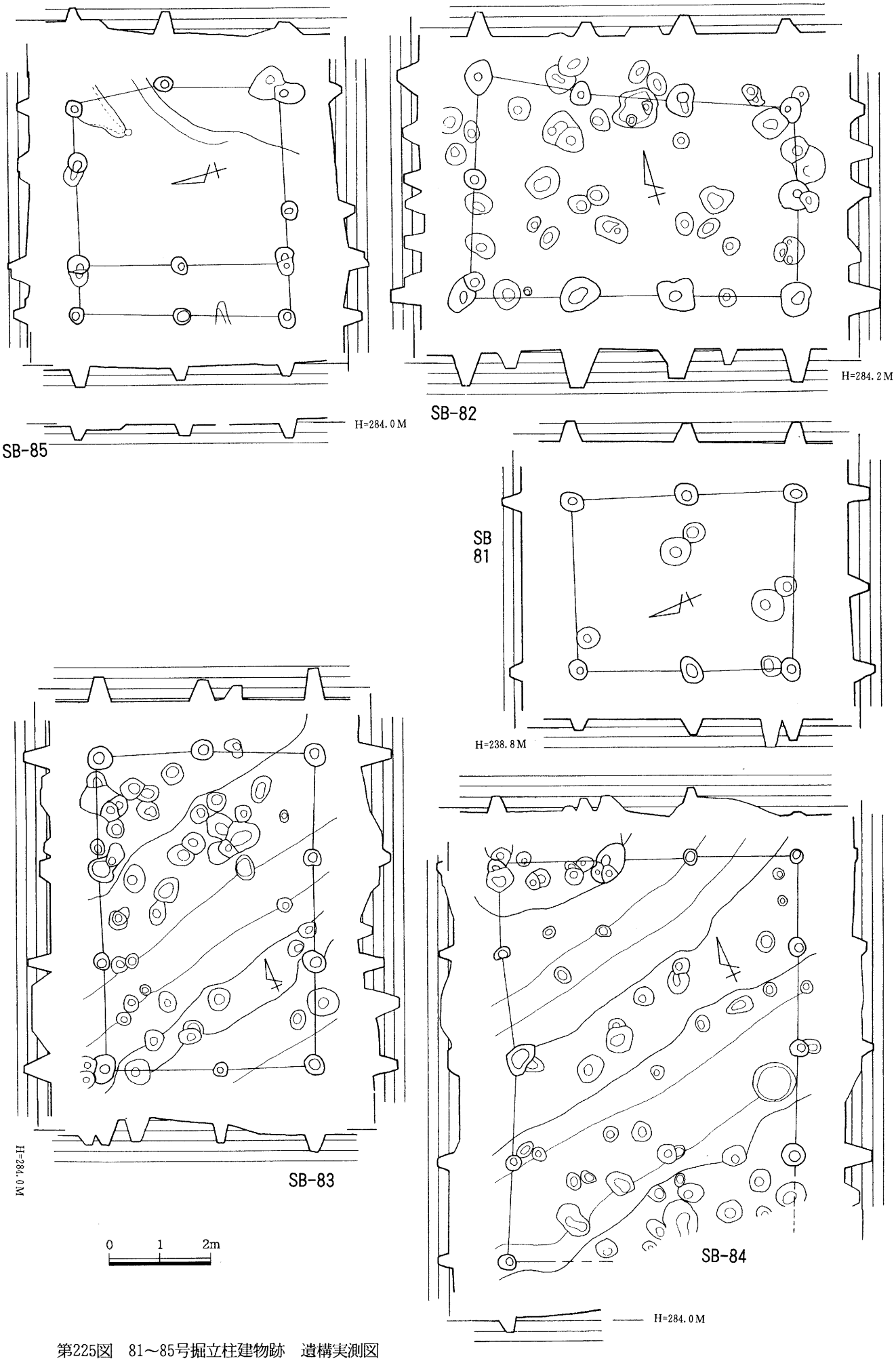
梁行２間（4.04m）、桁行３間（6.01m）で、主軸方位はN22° Eである。

84号掘立柱建物跡（第225図）

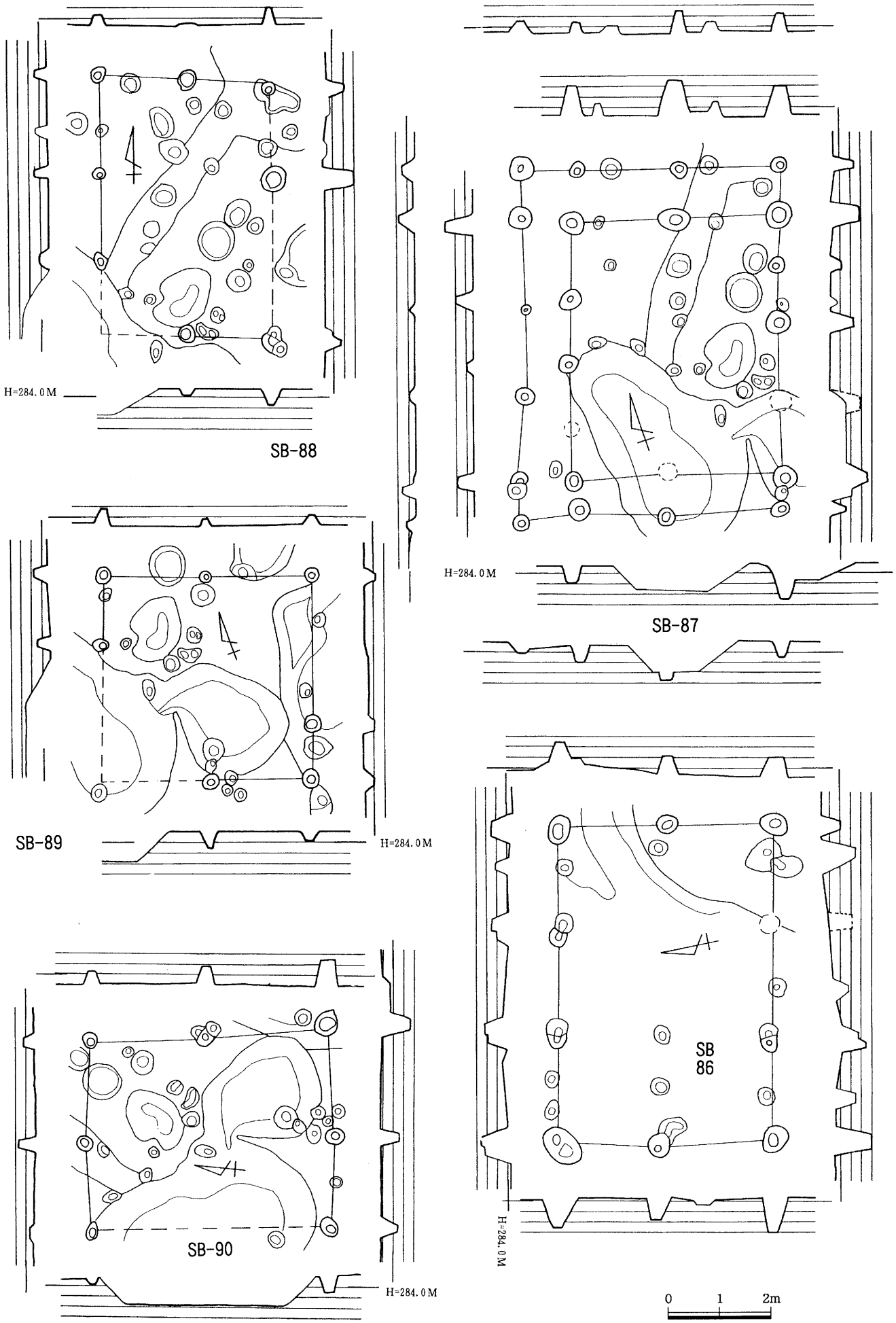
梁行３間（5.78m）、桁行４間（7.74m）と推定され、主軸方位はN22° Eである。



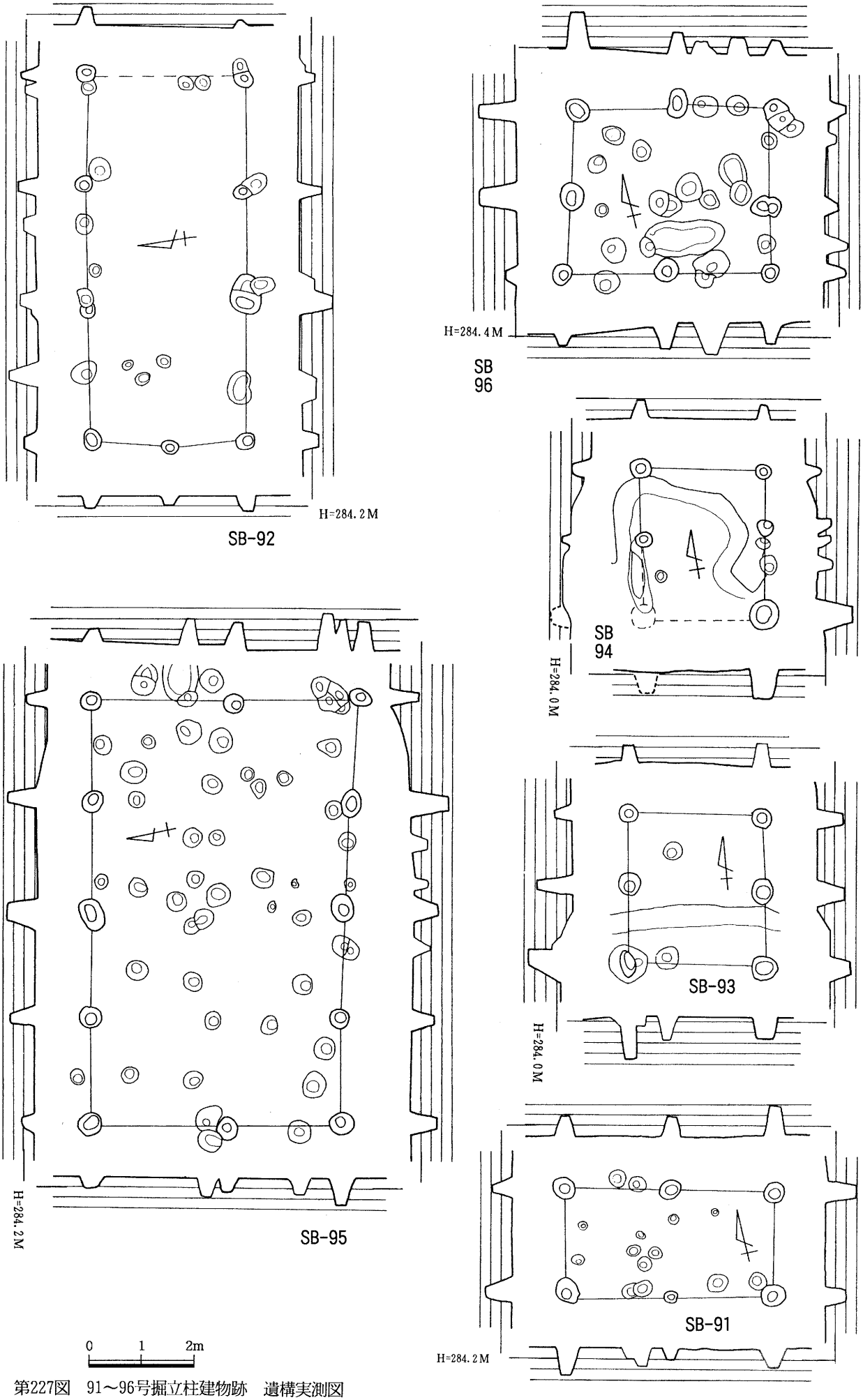
第224図　75～80号掘立柱建物跡　遺構実測図



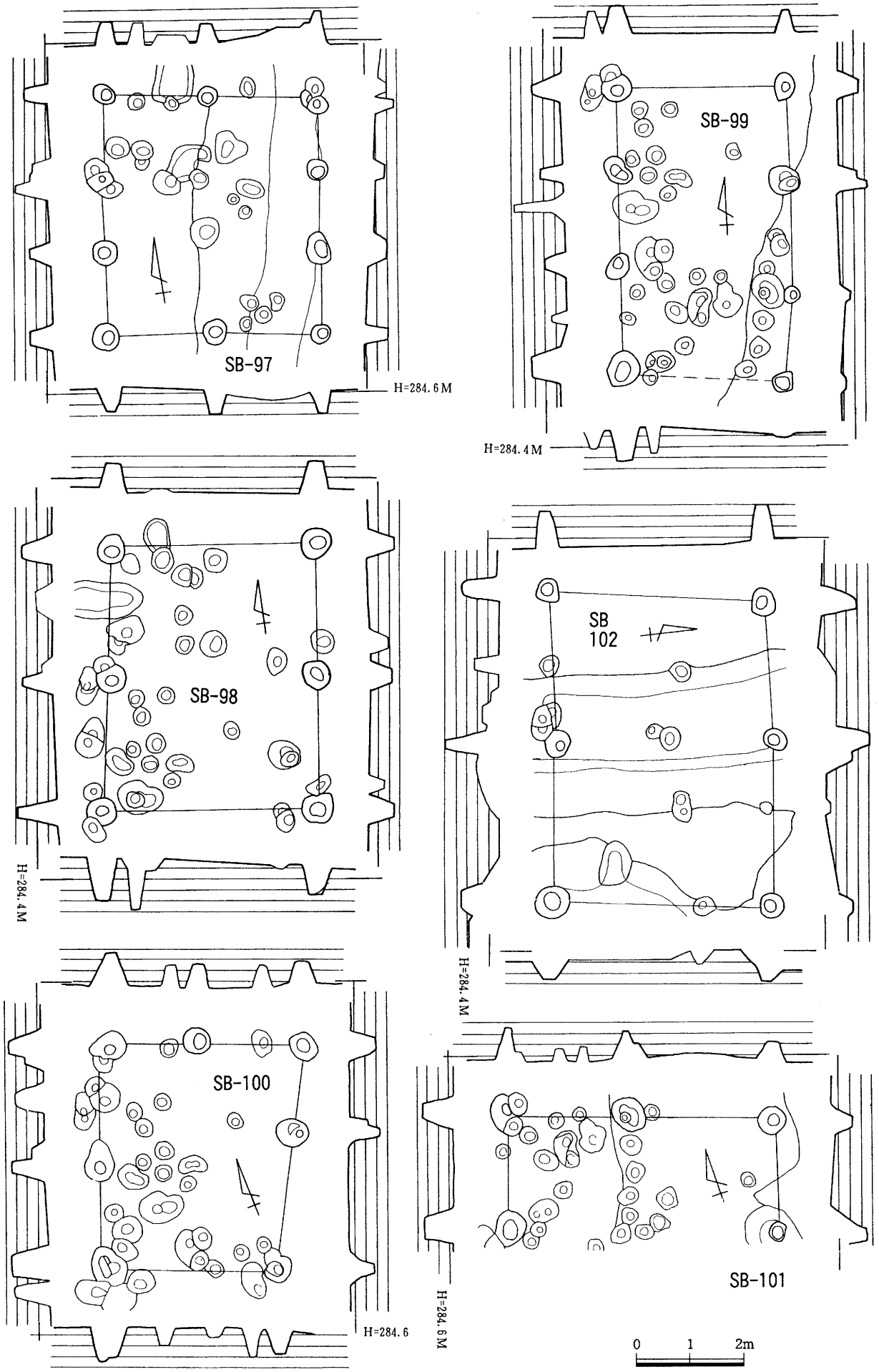
第225図　81～85号掘立柱建物跡　遺構実測図



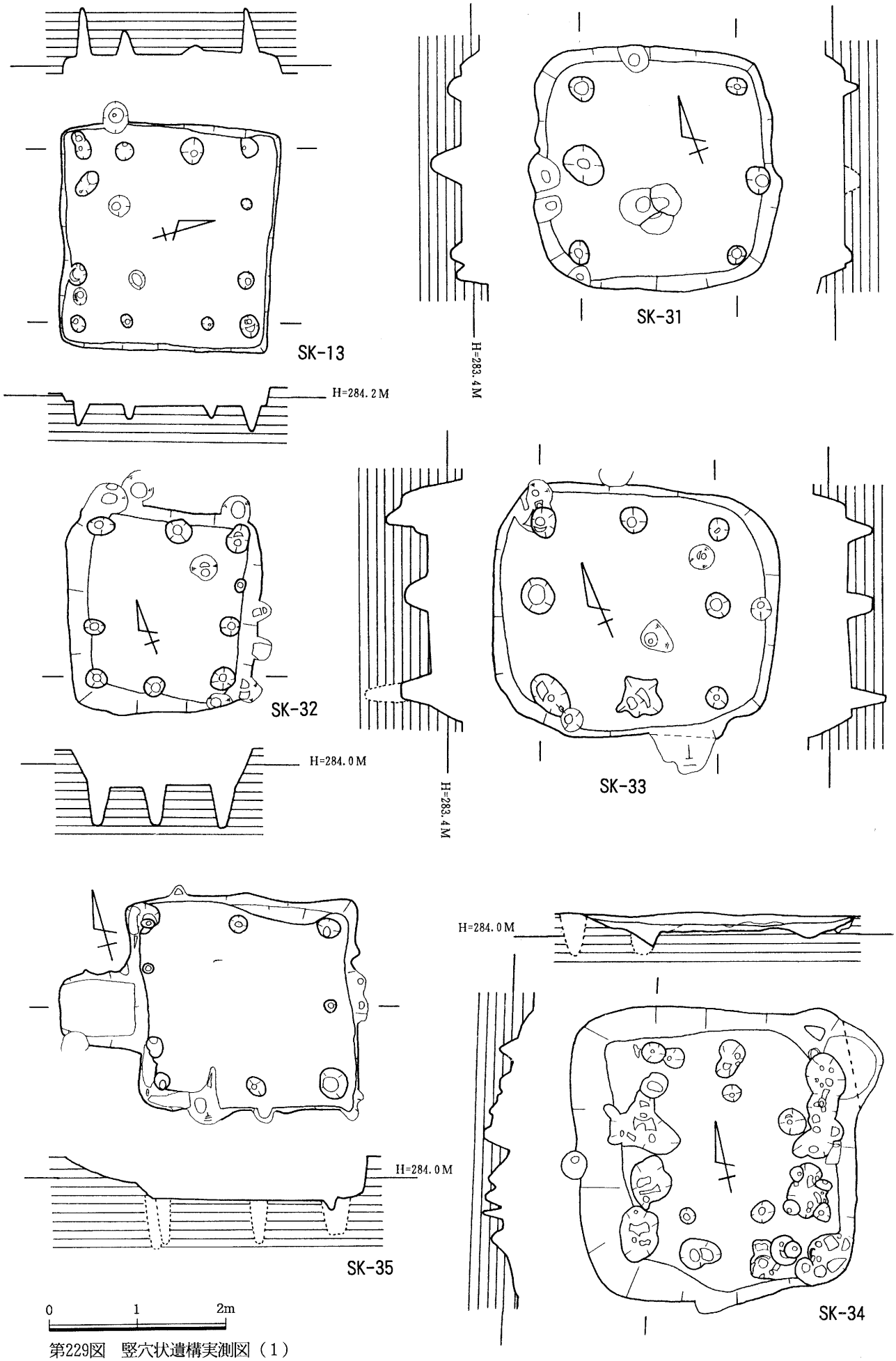
第226図　86～90号掘立柱建物跡　遺構実測図



第227図　91～96号掘立柱建物跡　遺構実測図



第228図　97～102号掘立柱建物跡　遺構実測図



第229図　竪穴状遺構実測図（1）